北斉石刻経の現況とその成立の背景

魏　　廣　平

【目次】

序
一．北斉石刻経研究のあゆみ
二．北斉石刻経の現況一覧
三．刻経年代考
四．北斉刻経の特徴
五．北斉刻経の主要な資助者
六．北斉刻経における二大僧団
　１．僧稠（稠法師）僧団
　２．僧安道壹（安法師）僧団
　３．僧稠僧団と僧安道壹僧団の関連性
七．石刻技術と特殊書法の問題
八．北斉石刻経成立の歴史的背景
結語

序

ごく最近のニュースであるが（2021年９月７日付）、中国国家文物局は「中国石窟寺考古中長期計画（2021-2035）」を発表した。それによれば、「石窟寺考古」は中国考古学研究の重要な構成部分として位置づけられ、就中、北斉石刻経の研究促進と遺跡の保護は、「（二）重点区域石窟寺考古調査発掘項目」中の「８．山東石窟寺考古項目」に指定されている。

上のように、中国における石窟寺研究にとって北斉石刻経は不可欠な構成部分であることが確認される。

北斉の名僧僧稠は鄴都周辺で活躍し、天保二年（551）北斉文宣帝から「国師」として招聘され、「大石窟寺主」に任命された。彼ら僧稠僧団は、王朝の上昇機運に乗り、中皇山石窟（刻経六部13.74万文字）、北響山石窟（刻経四部4.8万文字）などの石灰岩の山々に多くの石窟寺を作った。

一方、鄴都の東方では僧安道壹僧団が活動した。当時、北斉の社会的混乱は厳重な末法思想の恐怖をもたらし、彼等は佛像崇拝よりも経典を後世に残すことがより重要であると考えた。泰山『金剛経』、鉄山『大集経』などは、花崗岩摩崖への大文字刻経として千文字を超える大規模な刻経であるが、このほかにも多くの地域で大小規模の異なる石経が着工された。

本稿は、これらの石刻経の事跡を当時の地域文化と地理環境に還元して論じる。具体的には古来の北斉石窟寺・石刻経研究のあゆみ、35ヵ所の遺跡と20数万文字にのぼる北斉石刻経を一覧し、石刻経の地理位置を明示し、さらに北斉石刻経の歴史背景、佛教が中国化した過程などに言及する。

キーワード：僧安道壹，大空王佛，北斉律，佛教中国化，法身舎利，多元的中華文明

一、北斉石刻経研究のあゆみ

北斉王朝における帝王は六代のみ、わずか28年間の王朝であった。これは数千年の中華文明史にとっては一瞬に過ぎないといえよう。この間に、歴史上にも特異な石刻経運動が行われ、天保（550～559）年間に開始され30年間盛行した。今も旧北斉エリアに当たる河南省北部、河北省南部、山東省西部と中部と南部、江蘇省北部の35か所の山々に、20数万字にのぼる刻字が残されている。

本稿では以下、各地に散在する北斉石刻経の遺跡について、便宜的に、ほぼ推測される制作年代順に①～㉟の番号を付した。なお、出典あるいは提供元を示していない地図と写真は、すべて筆者提供である。

北斉における石刻経の濫觴は、西暦550年に作られた①河南省安陽市小南海石窟（**図１**）である。また、最大刻字数が残るのは④河北省渉県中皇山石窟刻経（**図２、８、18、37**）で、13.74万余文字である。総体的に見て北斉石刻経は非常に大規模で、中国のみならず全世界でも稀な石刻文献の宝庫である。近代まで歴史の底流で千年以上埋没したままだったが、20世紀80年代以後、徐々に内外の学者に注目され始め、今日では石窟寺研究テーマの重要な構成部分として考古学的、先端科学的方法等を加味した綜合研究が始まった。

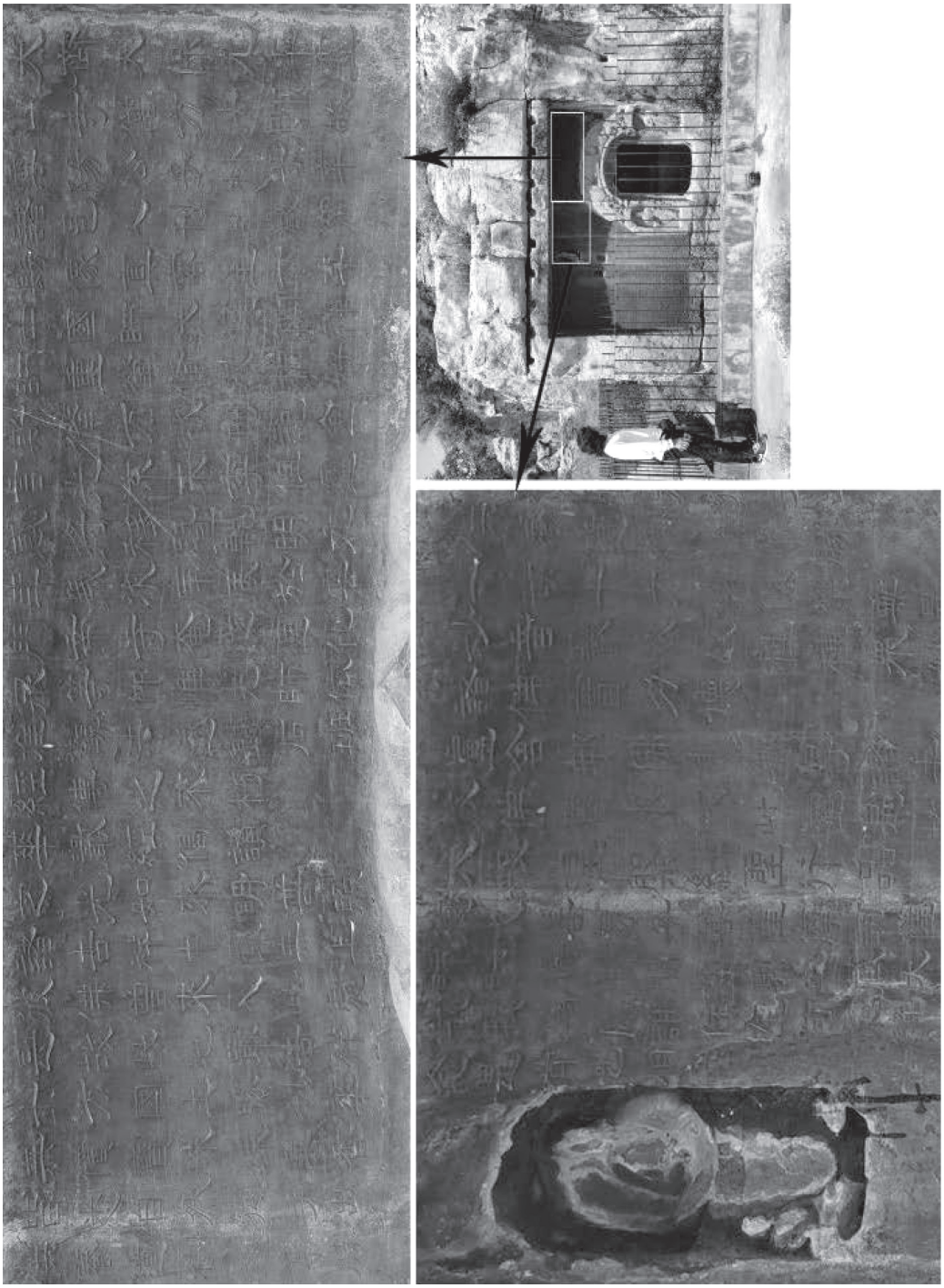


図１．①小南海石窟（筆者撮影）

図２．④中皇山石窟の山門外の左、長亭の北壁摩崖刻経の終末部分。手の右方部分の刻経は、手の大きさから見れば、《語石》が紹介する「屋駮嶝石経」の「寸余」の文字サイズに相当し、関連性が指摘されている。なお、手の左方は唐の廣明元年（880）の朱書落書。（筆者撮影）

北斉石刻経を収録する文献としては、その最初の文献は、北宋金石学家の趙明誠（1081～1129年）李清照（1084～1155年）夫妻が著した《金石録》[(1)]である。その中で北斉石刻経としているものは88条、第四百四から第四百六十六までで、その内54条が北斉題記を有している。隋以後のものでは北斉刻経に関連するものに隋開皇四年の《北斉造像碑》（第四百七十二）と《北斉徐州張長史碑》（第四百八十一）を上げている。また造像碑32条の中で言及する「《北斉唐邕造像碑》武平三年五月……第四百三十三《北斉造石経並記》天統四年六月」の記録は、現在周知されている⑮北響堂刻経洞外北側の《唐邕写経記碑》（**図３**）に相当する。現在は碑石上部の佛龕が欠損している。碑文は唐邕が発願した刻経事業について述べ、「盡勒名山」と興味深い記述がある。その刻経は四部あり、「天統四年（568）六月」起工、「武平三年（572）五月」完成した。北斉石刻経の中で唯一、起工・竣工の両年月を当事者が明記した遺跡である。また《金石録》には「第五百三十八《隋滏山石窟碑》上、第五百三十九《隋滏山石窟碑》下」が載る。滏山石

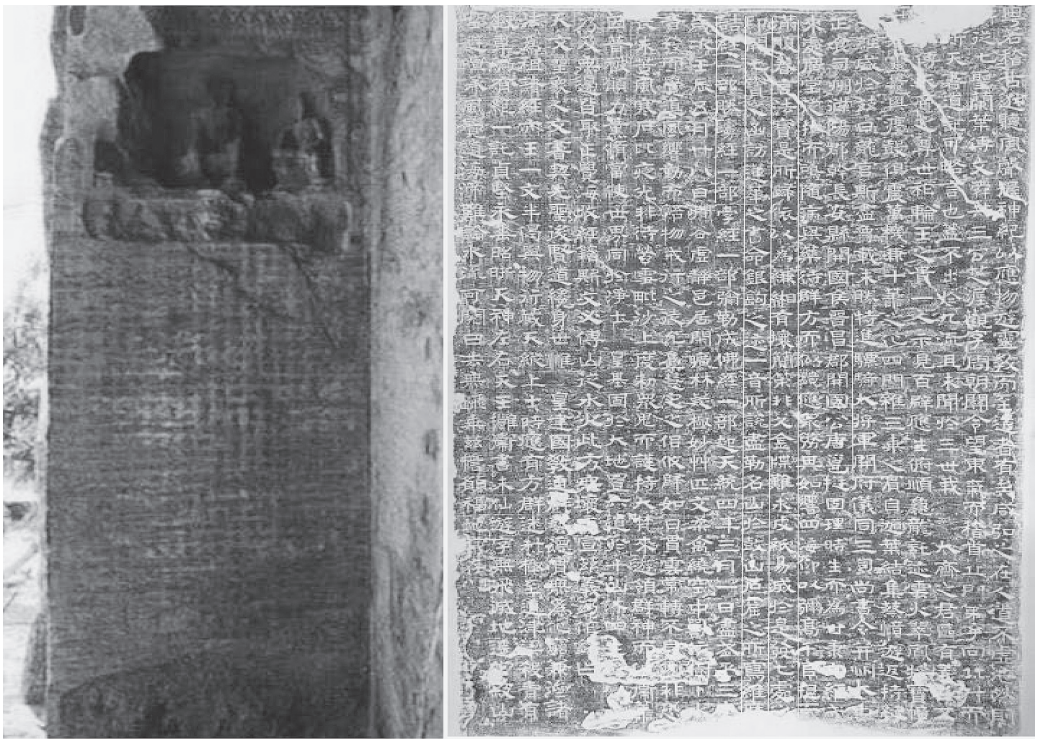


図３．⑮北響堂唐邕写経記碑と拓本（筆者撮影）

窟とは⑨南響堂石窟のことで、北斉武平四年（573）に起工し，北斉顯貴大丞相淮陰王の高阿那肱が出資して造窟し、北周武帝の廃佛に遭遇した後、隋代に復興したと伝えている。なお補足となるが、900余年前、趙明誠と李清照の夫妻が「靖康恥」前後の戦乱を乗り越え、妻の李清照が夫の亡後、亡命中にもかかわらず《金石録》を完成させ宋代までの金石学を後世に伝えたことは称えられるべきである。

清嘉慶（1796～1820）年間、済寧知州（済寧州の長官）黄易（1744～1802）が鄒県（当時も済寧州に所属、現在は鄒城市）に残る古代石刻を訪ね、鉄山、崗山、尖山の摩崖刻経を踏査した。職人に拓本を採らせ、阮元などの金石家に送ったことがきっかけとなり、摩崖石刻は徐々に文人墨客に注目されるようになった。[(2)]

その後，阮元、包世臣、葉昌熾、康有為、李佐賢等が⑯徂徠山、㉑尖山、㉒鉄山、㉓崗山、㉔葛山、㉕泰山経石峪（**図４**）等摩崖刻経について述べた。康有為は泰山経石峪《金剛經》を「榜書之宗[(3)]」と讃頌し（書体を問わず大方30cm 以上の大字を「榜書」と言う）、李佐賢（1807～1876年）も《石泉書屋金石題跋》の中で《経石峪》の書法価値を高く評価した。「尚存九百零一字，書法渾穆簡靜。康有為以為榜書之宗，列入妙品下，榜書亦分方筆圓筆，亦導源于鐘、衛者也，《経石峪》圓筆也，《自駒從》方筆也。然也《経石峪》為第一。其筆意略同《鄭文公》，草情篆韻無所不備；雄渾古穆，得之榜書，較《観海詩》尤難也」とある。

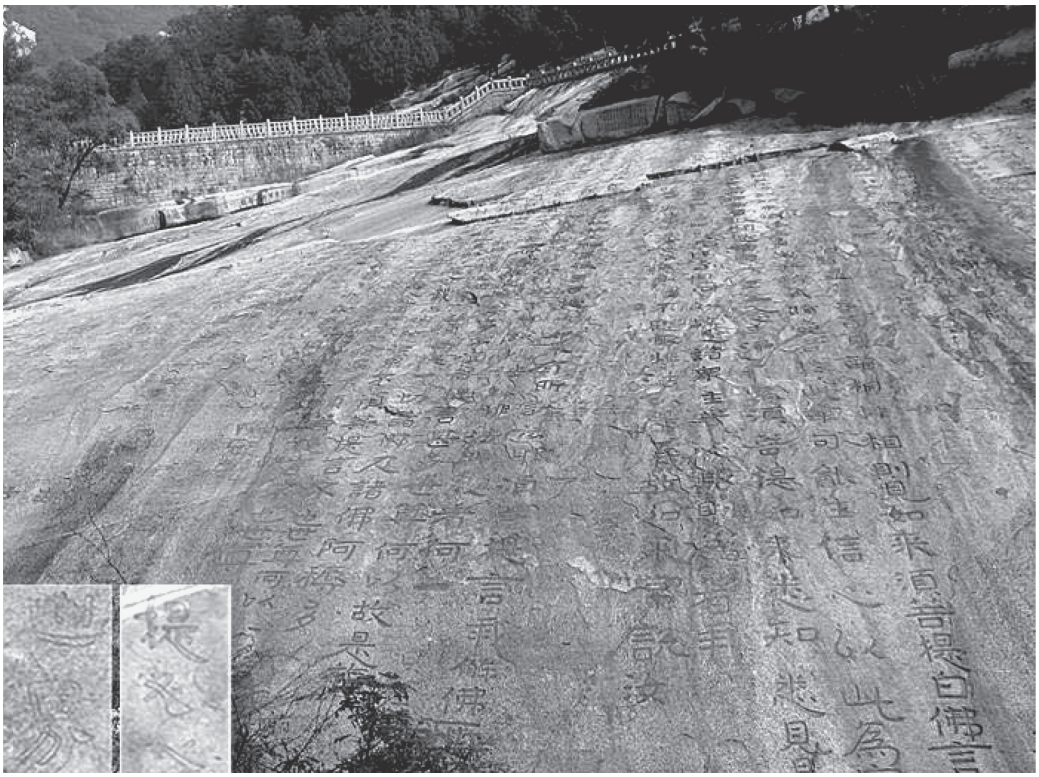


図４．㉕泰山経石峪《金剛般若經》。左下の写真「双鈎文字」は未完成刻経であることを示唆する典型的証拠である。（筆者撮影）

魏源（1794-1857年）は②水牛山、㉕泰山、⑯徂徠山、㉓崗山等刻経を僧安道壹の書だと推定した最初の人で、《岱山経石峪歌》[4]の「跋」に次のように述べている。「泰山経石峪摩崖，隷書金剛般若経，字大如斗，雄逸高古，與徂徠山水牛洞（汶上水牛山－筆者注）及鄒県崗山（尖山－筆者注）[5]文殊般若経，如出一手，皆為北斉僧安道壹所書，有《崗山石頌》（鉄山《石頌》－筆者注）題名可證。慨六朝如此墨王，而世莫知名，但有羲之姿媚之書」。

葉昌熾（1849-1917）の著《語石》は、山東、河南、河北等各地に残る北斉石刻経を初めて一つの石刻文献系統として纏めた。「北斉石刻文字，出於東魏，而益近南朝。至多雋妙。碑中時有極肖南帖之字，則東魏所少見者。北斉佛経刻石尤為古今大観。因山摩崖鑿龕建柱，山東之泰山石刻《金剛經》、徂徠山《大般若經》、鄒県嶾山（俗作尖山－筆者注）、寧陽水牛山（現在は汶上－筆者注）、東平白佛山、河南武安、河北磁県（現在の邯鄲市峰峰礦区－筆者注）鼓山之南北響堂寺、河北雷音洞（現在の北京市房山区－筆者注），皆始自北斉。太行左右，蓋有未発現者。若《太平寰宇記》言，遼山県屋駷嶝，《郡国志》云，高斉之初，鐫山腹写一切経於此，当亦尚存（その推測は誤りで、詳細は拙文の第９ページの「1988年から桐谷征一先生は……」の段落に記す）。此書所述涉県摩崖（④中皇山－筆者注），近人審為北斉，已傳拓者九石（詳細は次の段落

の範寿銘の事跡に記す）。鄒県嶧山摩崖，文有斛律太保家人。考《北斉書》，斛律光子武都，官太子太保、兗州刺史。鄒県正屬兗州，知亦北斉石刻。嶧山有石経洞，近処有陽山（1974年まであったが、失われた）字皆同時。北周鄒県崗山、葛山、小鉄山、摩崖経頌蓋踵嵯山之風而興起者，它処未聞。鼓山時有隋唐増刻。房山石経之役，由隋至遼，綿歴三百載，実発軔于北斉。著録者諸山刻経，当首推北斉一代矣」。かように葉昌熾が北斉石刻経のある地域を明記したものの、旧時の金石学は主に書法評価に傾き、交通などの条件も不備で現地調査が不充分であった。また石刻所在地や時代や作者などの誤記、贋作の出現など「黒老虎」（拓本は白黒のため、狡い拓本商人を黒い虎と言った。）に振り回され、誤解は避けようにも避けられない。現在こうした闇商売があたかも新発見のように報道され、いっそう陰湿化し途絶し難い。

清末民初の金石学者である範寿銘（号：循園、1870～1922）は光緒十九年（1893）に科挙で挙人に合格。安陽知県で在任中に古跡保存所を設立。民国後、河南省河北道（道庁所在地は衞輝にあり、当時は④中皇山所在の涉県も北響堂山所在の武安県も管轄。1914年豫北道に改称。）道尹に昇進し、同じ紹興出身の顧燮光（字：鼎梅、1875～1949）と一緒に8年間、太行山を遊歴した（《魯迅輯校石刻手稿》によれば、彼らは古代拓本収集の同好であり、同郷者である魯迅に北朝拓本を提供したという）。その収穫は範寿銘の《循園金石文字跋尾》に載り、ここで初めて中皇山（当時は唐王峧と言う）に石刻経があると記載し、成立の時代を次のように分析した。「涉県摩崖佛経在県西北二十里唐王峧、媧皇廟分刻三洞内外岩壁十幾萬言。極宇之大観、未著年代、不知為何人所刻。□以其経文字體與響堂刻経（当時は北響堂山石窟は武安県所属――筆者）無異、定為北斉唐邕之作鐫。邕封晋昌郡王、故後人名其地曰唐王峧、然終於石刻無人名年号、未敢臆決。己未（1919年）春間顧君鼎梅遣碑工孫泰安赴涉、椎拓整幅於洞口。得残造像一方、文曰：亡女趙妃……入彼華堂、云々。下段及左方即刻観世音菩薩、其字体亦與三洞佛経無異。北斉唐邕傳載武平初為御史所劾、除名久之、以旧恩復。□将軍開府、累遷尚書令昌邑王。造像内所称、令王建福之次、即指唐邕而言。其云亡女趙妃当即唐邕妻、而造像者趙妃母也。□□尚書令、封昌邑王在武平之初、則此三洞為天統間無疑。証以旧説、謂天保末使人往竹林寺取経函勒之岩壁、時代亦会似此鐫鑿。□□工十年方慨想見当年時之窮竭物力矣。中洞之右尚有□□陵県令王崇孝造像□□□陵後魏太平真君十一年置、至隋開皇十八年改曰黎城、此造像既在佛経之右、亦北斉刊也」と。現在の中皇山にある北斉残碑（**図18**）に、後代の刻字と思われる「古中皇山」という文字が楷書で刻まれているが、これは時代が民国になったことにより、おそらく範寿銘らが過去の帝政王朝を意味する「古」を冠したものであろう。

近代に至り日本で中国佛教遺跡に関する著作が多数出版され、今は見ることができない貴重な図版を含んでいる。筆者は北島信一先生の協力を得て、日本国会図書館に収蔵されている20世紀初から80年代までの北斉石刻経関連の書籍を調べた。その目録は下記の通りである。

（1）松本文三郎：《支那佛教遺物》大鐙閣 大正三年（1914）、山東省鄒県の尖山、鉄山、葛山、

崗山摩崖の紹介を含む。

（2）常盤大定：《支那佛迹踏査古賢の旅へ》金尾文淵堂 大正十年（1921）北周の滅佛運動と房山石経について記載し、房山風景と石経の写真一枚ずつ。

（3）啓明会第七次講演集《支那佛教史跡踏査報告》常盤大定 大正十一年（1922）「泰山経石峪金剛般若経九百五十一字は本館に陳列している徂徠山魏（原文ママ）王子椿の般若経と筆跡が同じ。」とある。

（4）常盤大定：《支那佛教史跡》金尾文淵堂 大正12年（1923）泰山、徂徠山石経の記載がある。

（5）常盤大定、関野貞：《支那佛教史跡評解三》昭和二年 佛教史跡研究会（1927）

（6）水野清一、長廣敏雄：《響堂山石窟》東方文化学院京都研究所 昭和十二年（1937）響堂山石窟学術調査，石窟の写真及び拓本など、内容豊富。

（7）常盤大定：《支那佛教史跡踏査記》，支那佛教史跡踏査記刊行会 1938

（8）道端良秀：《概説支那佛教史》法藏館 昭和十四年（1939）末法思想と石経に言及。

（9）常盤大定：関野貞 編：《支那文化史跡》第一～十一輯 昭和十四～十五年（1939～1940）

（10）常盤大定、関野貞：《支那文化史跡解説 第九巻》法藏館 昭和十五年（1940）

（11）常盤大定：関野貞：《支那文化史跡解説 第十二巻》法藏館 昭和十六年（1941）

（12）常盤大定：《支那佛教の研究》春秋社 1941

（13）道端良秀：《中国佛教全集》第五巻（日本書苑出版社 1985年１月）河北、山東の佛教摩崖刻経について語る。筆者はかつてその一部分「鄒県尖山大佛嶺刻経」を中文に訳した。[(6)]

1961年５月、当時の中国科学院郭沫若院長は泰山を視察して大いに詩興を湧かせ、李白「登岱詩六首」を思わせる「泰山詩六首」を作った。[(7)]その第五首《訪経石峪》「経字大如斗，北斉人所書，千年風韻在，一畝石坪鋪。閲歴久愈久，摧殘無代無。只今逢解放，庶不再模糊」が今も泰山経石峪に刻まれている。後に山麓下の「岱廟」の「東御座」（清の乾隆皇帝の行宮）に、郭沫若氏の「泰山詩六首」の石碑がある。ちなみに㉕泰山経石峪刻経が《金剛經》であるから、㉒鉄山刻経も《金剛経》だろうと1980年代末まで多くの人々に言われていた。

1979年以後、中国は海外旅行団体に対する開放範囲（多くの石刻遺存地は辺鄙な山奥）を徐々に拡大し、海外の学者、学術団体が多数訪れるようになった。1981年から筆者は日本書道家の今井淩雪、種谷扇舟、相川政行（鉄崖），漢学家の鎌田正、石川忠久，史学家道端良秀、中村啓信など多くの方々を各地の石刻遺跡に案内した。当初は「ガイド」という職種がまだ無く、それぞれの名所に案内人「講解員」が配置されていた。専門知識が必要ならば、現地学者を招聘し、説明してもらった。当時、鄒県（1992年10月鄒城市に改称）の鉄山摩崖刻経現場では文物保管所王軒所長が素晴らしい説明をなさっていたが、筆者はうまく訳せず汗顔の至りだった。私は「千五百年前、何のために、どんな道具で、これほど硬い花崗岩に巨大な文字を刻んだのか」、という疑問を抱き、興味を持つようになった。

1988年３月、曲阜で日本の立正大学桐谷征一先生をお迎えし、鄒県の鉄山、崗山、嶧山、葛山などの山々を登攀調査した。この時、筆者は佛教史や佛教々義、調査の方法論としてのKJ法等などの教えに触れた。特に1994年６月から1995年６月まで私は日本立正大学佛教学部に特別研究生として留学し、先生と朝夕を共にして丁寧なご指導をいただいた。1994年11月末には、先生から「中国北朝石刻経講義を準備するように」と言われ、12月13日講義の綱要を用意した。この27年前の原稿に、その後の新たな発見や議論を加えたのが本拙論である。

1988年から桐谷征一先生は頻繁に中国石刻経の調査に来られたが、思い出深い記憶がある。とくに当時先生は《語石》に載る「遼州屋駷嶝一切経」を調査されており、等高線付きの「遼県」地図などを持ってきた。山西省文物局の専門家も中国国際旅行社山西省分社日本部の担当者もよく協力してくれたが、数年かけても見つからなかった。1991年３月、旧「遼県」（現在の左権県）南鄰の武郷県にある墨蹬峰が、かつて「屋駷嶝」と称されていたことが分かった。筆者は山西省の友人の協力を得て、現地の人に案内され調査した。省道319号線を走って高歓洞（**図５**）を過ぎ、東南数キロの処で右折、農村道路を走り、近くの村に駐車して徒歩で登山した。その時に山西方言の「蹬」という言葉の意味が分かった。周囲の山々に比べ「屋駷嶝」だけが急峻で、その山頂に平らな台があるのである。１時間ほど摩崖刻経を探しながら山頂に着

図５．高歓洞がある崖は省道319北側の路肩である。近くに清漳河の上流の清漳西源が流れている。地理方位から分析すると、このあたりの省道319は北斉時代の上都－下都の間の駅道であった。高歓洞は、太行山脈横断の重要な出入口となる滏口陘の西にあり、その位置を確定する座標点である。（筆者撮影）

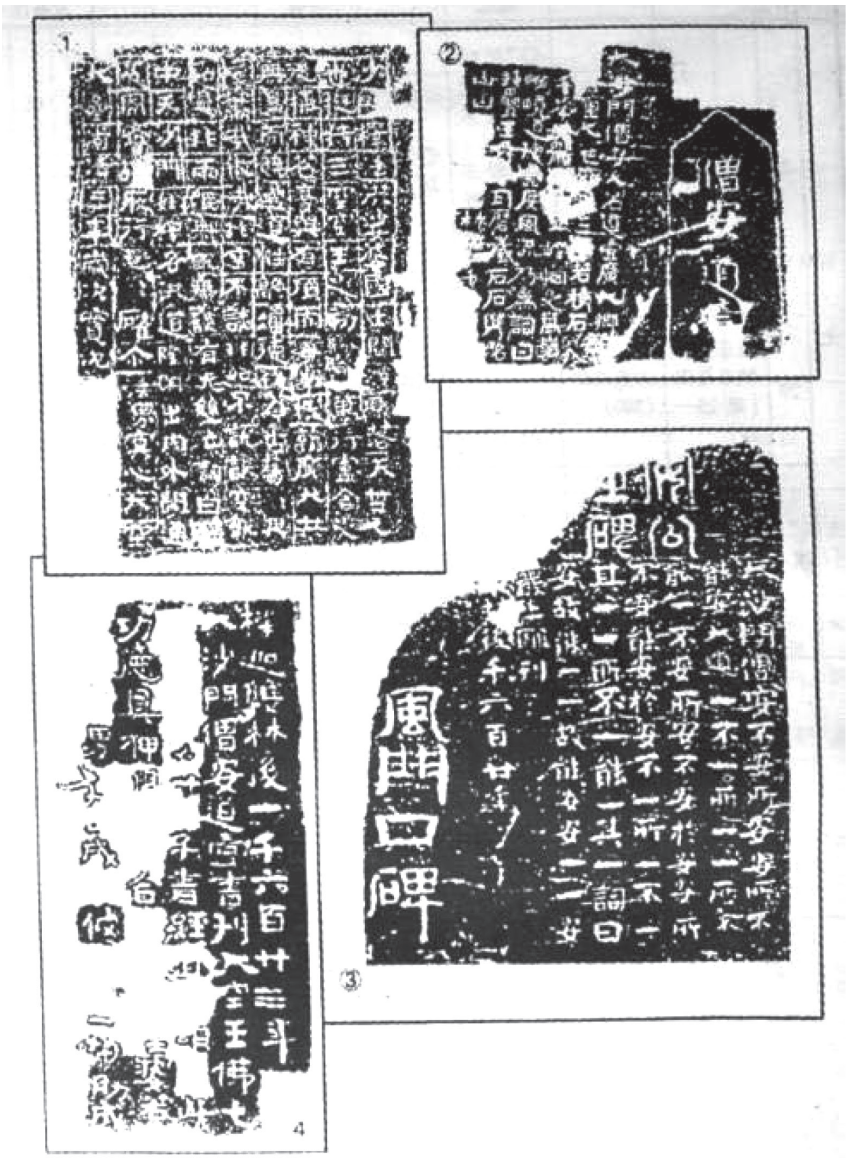
くと、強風が頬を打ち、崩れた建物の残骸と瓦礫や清代らしき碑の残石が残るだけのさびしい光景であった。周辺は風化が激しい砂岩であり、「寸余」の文字を刻んだという「一切経」はこの山にありえないと思って、肩を落として下山したのであった。1992年夏、左権県の知人より「一切経」が見つかったと手紙が来た。それに手で触れている写真も同封されていた。筆者が現地調査したところ、これは馬忠理先生が1990年の北朝摩崖刻経研討会で発表した④中皇山刻経であった。中皇山は、墨蹬峰の東南方向へ約60km である

その他、現在の山西省内に伝わる北斉文物としては佛像と題記があるが、かつては刻経も存在した可能性がある。鳳台県周村廣福寺の天保元年（550）《大威徳経》、左権県天保三年（552）の《華厳経》などであるが、現在は無い。

1990年10月、山東省鄒県（現在鄒城市）で山東省石刻芸術博物館と山東省書道協会との共同主催になる第一回「中国北朝摩崖刻経書学討論会」が行われた。その成果は『北朝摩崖刻経研究』にまとめられ、1991年12月、斉魯書社出版社から出版された。1980年代末までの石刻経研究は書学に関するものが多かったが、この論文集には山東省石刻芸術博物館の王思礼先生と賴非先生の《中国北朝佛教摩崖刻経》および邯鄲市文物局の馬忠理先生の《鄴都近邑北斉佛教刻経初探》などの歴史・考古学的研究が加わった。

1994年７月26日《済南日報》、1995年７月16日《中国文物報》が「平陰県で北朝摩崖刻経が発見された」という報道を掲載し、歴史・書法・佛教など多くの学者に注目され、続々と研究者が訪れた。⑩洪頂山遺跡である。筆者と胡新立氏は1995年７月下旬に調査に入った。この時はまだ西峪北崖にある「圭型位牌」と称される罫線内に囲まれた「僧安道壹」の「壹」字はまだ存在していたが、その後破壊された（図６は破壊後の状態）。当時筆者が地元の村民に聞いたところでは、「近くに大洪頂という高い山がある。二洪頂はもう一つの山。新発現と世間で騒いでいるが、この村では爺から子供までみんな知っています。大昔から神々を彫った大文字があるんです。報道されていなかっただけですよ。」と、ほとんど関心がなかった。現地の人にとっては遺跡とはそんなものかも知れない。1996年１月、東平湖の統一管理の一環として済南市平陰県所属の旧県郷を泰安市東平県に移した際、「二洪頂」は「洪頂山」と改称された。2006年５月25日、洪頂山摩崖刻経は国家重点文物保護単位（国家重要文化財）に指定された。洪頂山摩崖刻経が発見され、多くの謎が解け始めた。

2002年８月山東省石刻芸術博物館と山東孔子国際旅行社（筆者が担当）との共催により、山東省済南市で第二回「中国・山東北朝摩崖刻経考察與研討会」が行われた。国内外より80数名が参加（中国社会科学院、中国芸術研究院、敦煌研究院、中央美術学院、宗教文化出版社、邯鄲市文物局、山東省文化庁所属関係部門など。また海外から、日本：東京大学、立正大学、明治大学、武蔵野大学、昭和女子大学、大谷大学、愛媛大学、石刻研究所、墨縁雑誌社など、アメリカ：コロンビア大学、プリンストン大学、韓国：ソウル大学、東国大学など）。シンボジウ



①洪頂山南岭“沙门释法洪”题记
②洪頂山北领“安道壹”自署和“大沙门僧安”题记
③洪頂山北岭风门口《安公之碑》题记
④洪頂山北岭“大空王佛”西邻“释迦双林后一千六百廿三年”题记

図６．⑩洪頂山刻経の拓本（桐谷征一　著「北斉大沙門僧安道壱刻経事跡」山東省石刻芸術博物館　編《北朝摩崖刻経研究》（續）香港・天馬図書有限公司2003年12月刊、所収　P.56より引用）

ムでは北朝史、佛教史、佛学義理、美術史、写経人僧安道壹、書道、石刻経の保護技術と対策など幅広いテーマからなる高水準の論文発表があった。中国社科院世界宗教研究所の張総氏が北魏から北宋に至る山東境内48か所の石刻経を論じ、日本学者桐谷征一氏は河北、河南、山東

30処石刻経を「北斉大沙門安道壹刻経事蹟」にまとめた。開会期間中に山東省美術館でシンポジウム併設《山東摩崖刻経拓片匯展》があり、加えて11か所の山東省境内にある北斉石刻経を実地踏査し，現場で専門家らが報告や自由討論を行った。嶧山見学の際は、日本学者北島信一氏、胡新立氏と筆者が五華峰摩崖の東側に花崗岩摩崖で紀年の最も早い北斉刻経（河清三年）題記を発見した。このシンポジウムの論文集『北朝摩崖刻経研究（続)』を山東省文化庁の手配に従って2003年12月、香港天馬図書有限公司から出版した。

2005年８月河北省邯鄲市で、河北省邯鄲市文物局、山東省石刻芸術博物館、山東省中国青年旅行社（筆者が担当）との共同主催による第三回「中国北朝石刻経考察與国際研討会」が行われ、国内外より70数名が参加した。国内参加者は中国社会科学院、復旦大学、山東省文化庁、邯鄲市文物局等の研究者らで、海外参加者は日本の立正大学、武蔵野大学、昭和女子大学、大谷大学、放送大学、石刻研究所及びアメリカのコロンビア大学であった。参加者たちは河南省安陽市小南海石窟、河北省邯鄲市３ヵ所の北朝石刻経の現地調査を行った。シンボジウムには論文が多数寄せられ、論文集『北朝摩崖刻経研究（三)』を2006年12月に出版した。その中、馬忠理氏の《邯鄲北朝摩崖佛経時代考》は邯鄲境内各地の石刻経の内容と論点及び証拠について分析し，刻経総字数は20.29万字に達した。また復旦大学張偉然氏の《関於僧安道壹的再思考》は、「これまでは姓（苗字）が‘安’、名（名前）が‘道壹’といわれてきたが、不適切である。佛教の立場からいえば‘僧安道壹’が一つの法号である」と述べた。楊浩氏、郝莉氏共著の《山東省東平境内北朝摩崖刻経及相関問題的深討》は1994年に洪頂山遺跡が発現されて以来，初めて発表された論文である。

2007年12月、賴非氏の《山東北朝佛教摩崖刻経調査與研究》が科学出版社から出版された。氏は、山東省エリア（北は泰山から南の嶧山まで）の間にある全ての摩崖刻経を分析し、前半は現存刻経にかかわる各種資料，後半はそれに関する研究成果である。

2008年、哥倫比亞大学（Columbia University in thecity of New York）韓文彬氏（Robert E. Harrist Jr. 2002年８月の第二次、2005年８月の第三次北朝摩崖刻経国際研討会に参加）の《The Landscape of Words: Stone Inscriptions from Early and Medieval China（景観に活用された漢字－早期から中古までの中国の摩崖石刻)》が華盛頓大学出版社（University of Washington Press）から出版された。内容は石鼓文、漢中石門、四川芦山樊敏碑、莱州雲峰山や済寧漢碑などのほか、北斉石刻経を多数載せている。表紙の紹介文にこうある。「中国景観の中でもっとも特徴を発揮する石刻芸術を、西欧で最初に紹介する専著である。石刻文字は巨石や崖と一体となり自然地形の一部のように溶け込み、数千か所の風景名勝を構成する。中には図形模様と見まごうばかりに大く刻まれた文字もある。両千年以来、こうした厖大な石刻文庫があり、重要な公共芸術の役割を発揮している。こうした八世紀以前の作品に作者が専心し、工夫を重ね研究した結論は、石刻文字とは地質構造とのバランスを図り、周囲を宗教意識も含んだイデオロ

ギーに合致する環境を作ることであった。」と。

2014年８月、中国とドイツ両国の文化交流プロジェクトの一環として王永波氏と雷德侯氏（Lothar Ledderose）共著の《中国佛教石経　Buddhist Stone Sutras in China －山東省 第一巻－》が中国美術学院出版社から出版された。本書は方位や寸法を精密機器を利用して大変精度が高く、文章と絵や写真も優れ、装幀も精美である。雷德侯氏は「前書き」で「山東石刻芸術博物館が編集した《北朝摩崖刻経研究》一～三巻は、《中国佛教石経シリーズ》という重大な共同研究プロジェクトの基礎を確実に固めたと認識している。」と高く評価した。

2016年12月、房山石経博物館と房山石経與雲居寺文化研究中心とで編集した《石経研究》（編輯委員会名誉主任宿白氏、主任羅炤氏）第一輯が燕山出版社から出版された。ここに胡新立氏の《北朝鄴城佛教刻経題記考略》、北島信一氏の《鉄山〈石頌〉－招魂与送魂的祈祷文》、倉本尚徳氏の《従刻経看鄴城佛教：以小南海石窟与北響堂山石窟為中心》、蔡穂玲氏と呉若明氏との共作《德国海德堡科学院“中国佛教石経”項目綜述（ドイツハイデルベルク Heidelberg 科学院研究プロジェクト略説）》が載る。次いで2018年10月に第二輯（華夏出版社）が出版された。ここに拙論《北斉石刻経現状及其歴史背景》（本稿はこの発表に数枚の地図と最新研究を増補したものである）、北島信一氏の《鉄山摩崖石経的天書理論与神豪之思考》が載る。続いて2020年７月に第三輯が出版（華夏出版社）された。ここに北島信一氏の《天書与北斉石経》、ドイツ Claudia Wenzel 氏の《山東等地刻《文殊師利所説摩訶般若波羅経》九十八節文（Re-visiting the “98 character passage” carved in Shandong and beyond）》、劉勇氏の《趙道德事跡－墓誌所見高歓家族的鷹犬人生》、拙論『石鼓文刻於「北魏説」再研究』などの論文が載り、それぞれの角度より確実に研究を進めている。

2016年12月、王大中氏の《兗州金口壩刻石遺珍》が文史出版社から出版された。兗州博物館蔵品および民間収蔵の多くの金口壩刻経、題記、佛像、佛教残石などを目録化し、説明を添える。

2017年６月、張強氏、魏麗雅氏（Lia Wei ベルギー）共著の《大空王佛－僧安道壹刻経與北朝視覚文化》が文物出版社から出版され、「僧安道壹」の名が初めて書名に登場した。テキスト研究より着手し，書法史、金石学、宗教と喪葬儀式、佛語と道符など多分野多角度から論じる。

さて筆者は、北斉石刻経が書法・美術的な価値ばかりでなく、思想宗教文化史上の高い価値を擁していると考え、2002年第二次北朝摩崖石刻国際研討会と2005年第三次北朝摩崖石刻研討会を提案し、多くの大前輩、専門家に大いに励まされてきた。また北朝摩崖刻経研究に余念ない人々が研討会に出席し、みな報酬も無いにもかかわらず論文を寄稿してくれた。彼らの励ましを思うと、改めて筆者の微力を費やし、1400年前の石経のために尽力しようと決意を新たにする次第である。

二、北斉石刻経の現況一覧

次に掲げた“北斉石刻経現状一覧表”は現地調査と文献分析のもと、桐谷征一先生[8]と馬忠理先生[9]の研究成果などを参照して作成したものである。なお2020年に現れた「棗庄卓山刻経」は疑問点があるが、“一覧表”の末尾に付した。また図15で北斉石刻経の所在を全て地図上に表記した。図16は参考として引用したもので、当時の「北斉・北周・陳の対立地図」である。

―北斉石刻経現状一覧表―

番号	遺　跡	位置概要	石刻内容	年　代	石質
①	河南省安陽市小南海石窟刻経 **（図１．右下はその全体図）**	石窟内	**「比丘僧稠**供養」**（図33．右）**	天保元年（550）	石灰岩
		石窟門外の上と左	《稠法師記》にある「大齊天保元年霊／山寺僧**方法師**……刊此巌窟……**国師大徳稠禅師**……**鏤石班経傳之不朽**」／《華厳經偈贊》／《涅槃經·聖行品》**（図１．上と左下）**		
②	山東省汶上県水牛山白石寺《文殊般若》刻経碑 （図７）	汶上県博物館蔵	文殊／般若／尓時文殊師利白佛言世尊我觀正法，无為无相无得无利无生□滅无来无／去无知者无見者无作者不見般若波羅蜜亦不見般若波羅蜜□界非證非／不證不作戯論无有分別一切法无盡離盡无凡夫法无聲聞法无辟支佛法／佛法非得非不得不捨生死不證涅槃非思議非不思議非作非不作法相如／是不知云何當學般若波羅蜜尓時佛告文殊師利若能如是知諸法相是名／學般若波羅蜜菩薩摩訶薩若欲學菩提自在三昧得是三昧已照明一切甚／深佛法及知一切諸佛名字亦悉了達諸佛世界文殊師利白佛言世尊何故／名般若波羅蜜佛言般若波羅蜜无邊无際无名无相非思量（上日下童）无歸依无洲渚／无犯无福无晦无明如法□无有分齊亦无限數是名般若波羅蜜亦名菩薩／摩訶薩行處非行非不行處悉入一乘名非行處何以故无念无作故（図７） 碑左側面の題記（両行）： 經主厲威將軍兗州東陽平太守義州五城上郡太守太山羊鍾 郡功曹東市貴 邑人奉朝請羊善 邑人羊萬□／經主白石寺比丘高明□仙□高方大石窟寺法高（？）邑人兗州主簿羊穆邑人羊釋子 碑右側面の題記（三行）： 白石寺……明建……比丘……許……東□薑……／龍華寺……東……郡中正東……郡功曹東……／都維那□明達……都維……	北斉天保七年（556）十一月の石碑。	石灰岩
③	山東省汶上県水牛山摩崖	山頂の南側の崖	②と同じ、梁扶南国三蔵曼陀羅仙訳《文殊般若經》上	北斉	花崗岩

④	河北省涉県中皇山石窟刻経 **＊山麓に新設された「北斉石刻陳列館」で中皇山周辺の遺跡から集めた北斉『七級石浮図観音経碑』や歴代遺物など多数展示。**	蚕姑洞	《十地經》（全国唯一、5.84万文字）/《佛説盂蘭盆經》/《深密解脱經》/《佛垂般若涅槃略説教戒經》**（図２）**	天保末に起工との説あるが[10]、前記《循園金石文字跋尾》では天統年間から北斉崩壊までとする。	石灰岩
		眼光洞	《思益梵天所問經·序品問談品》/《思益梵天所問經·問談品囑累品》		
		山門外、左の摩崖	趙妃母題記:「**亡女趙妃**志趣貞石徳□內融春秋未幾奄頽蘭馥聞者悲悼聲言頓絶況曰母子焉堪忍痛**今因令王建福之次**遂竭家資敬觀世音像観世音經刊山鑿石題文不朽唯願亡女□斯纖屬入彼華堂……具游淨国」、「妙法蓮華經觀世音**普**」**（図８）この下と左方部分は平に磨かれ、空白が多い。**	576年末 **＊⑮北響堂山と同じく、北周が北斉を侵攻した際に、慌てて放棄したと思われる。**	
20年ほどの内に石刻経（近辺の木井寺などの寺院から遷された刻経も含め）を刻んだ文字は13.64万に達し、当時世界一の規模である。					
⑤	山東省東平県海檀寺《大斉□□□□□□海檀寺碑》	老湖鎮梁林村書堂峪海檀寺遺址	碑陰の三つの佛龕の下に縦33行、計1700文字ほど刻されている。第１行「□時无盡意菩薩」から第30行「普門示現」まで破損もあるが文字は多く判読でき、「妙法蓮華經觀世音普門品」の全文であると推察しうる。	皇建元年（560）	石灰岩
⑥	山東省泗水県天明寺《維摩詰経》刻経碑	泗水県文物管理所	《維摩詰經·見阿閦佛品》碑	皇建二年（561）	石灰岩
⑦	山東省東平県司里山摩崖刻経	山頂大佛の右側の摩崖上部	残存「佛言」等大字，経名不詳	北斉 **＊山頂大佛右下にある小佛龕題記：皇建二年（561）**	石灰岩
		東側にある摩崖	《佛説大涅槃經》の節文		
⑧	山東省済南市平陰県張海村二鼓山摩崖刻経	村の西へ「大鼓山」より更に西。二鼓山の山道の路面の岩石にある。	「**大空王佛**」/「**比丘僧太**、道顒、僧安一、程伯仁」 **（図９）** **＊「空」字のウかんむりの縦画は「佛足」模様。中国で一番古い「佛足印」であり、年号も付いている。**	河清元年（562）	石灰岩
⑨	河北省邯鄲市南響堂石窟刻経	山門の外、東南約100mにある摩崖（**図10．左２**）	双鈎「**大空王佛**」の「佛」字は縦約40cm。もう一つの楷書「大空/王佛」は一字約８cm。筆跡は北斉以後に見られるタイプ。この２つの「大空王佛」の間に数個の小佛龕があり、「大齊河清二年…/□□邑主魏…/敬□佛□…」の題記がある。双鈎「大空王佛」は小佛龕の以前に作られた可能性が大きい。	河清二年（563）以前	石灰岩

		1号窟 （華嚴洞）	《大方廣佛華嚴經》〈四諦品〉ないし〈浄行品〉、《文殊般若經》	北斉武平四年（573）起工	
		2号窟 （般若洞）	《文殊般若經》下、《大品般若経・法尚品》、「十六佛名」、「**昭玄沙門統定禪師**敬造六十佛」 **＊この窟の入り口の左と右の両面にある《滏山石窟寺之碑》によれば、天統元年（565）比丘慧義が霊化寺を創立し、武平四年（573）唐邕の政敵である「大丞相淮陰王」高阿那肱が出資をして行った「開窟鑿像」したが、後に北周廃佛に遭い、隋代に石窟工事を再開した、という**		
		4号窟	《妙法蓮華経・普門品》		
		6号窟外壁	諸行無常偈		
⑩	山東省東平県洪頂山摩崖刻経	西峪南崖	《文殊般若經》下、《佛說文殊般若波羅蜜經》、《沙門釋法洪題記》：「沙門釋法洪娑婆国士閻浮□落天竺人／也挺□三空空王之初紛綸萬行盧舍之／後構神苕亭與有頂而爭峰機翰廣大共／無邊而道遠道性融治德年今古蕩蕩異／懷□哉攸哉非空不談非如不說談空朗内外閑通／□風□古厥 行邑邑確而法易冥心大空／**大齊河清三年**歲次實 沉八月□□□□」**（図6. 左上）**、（4條）「**大空王佛**」など。	河清三年（564）と「**釋迦双林後一千六百廿三年**」	石灰岩
		西峪北崖	《文殊般若經》上、《文殊般若經》下、《仁王般若經》下、《大集經・穿菩提品》、《大品般若經》、題額《摩訶衍經》、「**大空王佛**」（これが**北斉刻経最大文字であり、サイズは**3.5x9.8m、「佛」の最終画は3.55m で縦画二本の起筆は、佛の両手の形である）**（図10. 中）**。最大文字の左下の題記：「**釋迦雙林後一千六百廿三年／**大沙門僧安道壹書刊**大空王佛**□七／□□□□□□書経□□□□□／功德具神□□□□□□□」。付近に圭状位牌罫線に囲まれた「僧安道壹」、「大沙門僧安□名道壹廣大鄉□／□里人也□□三世□若積石之／千峰□□碩□崆峒之萬嶺／崔饒道德器度風流乃為詞曰／重迭□□□月磨義石石雋名／□□林□千□□」、《安公之碑》「大沙門僧安不安所安安所不／能安大道一不一所一所不／能一不安所安不安于安安所／不安能安于安不一所一不一／其一所不一能一其詞曰／安故能一一故能安安一一／岩上雕刊／□林後千六百廿□□」。ほかに《風門口碑》／六波羅蜜／藥師琉璃光佛／大山岩佛／高山佛／安王佛／式佛（2條）／維衛佛／□葉佛／□奈佛／南無舍牟尼佛／牟尼佛／阿彌陀佛／彌勒佛／釋迦葉佛／觀世音佛／大勢至佛／具足千萬光相佛／安樂佛／**大□□佛**／佛門僧法□□□」などの佛名や残字。		

⑪	山東省済寧市兗州区 金口壩刻経	兗州博物館	《文殊般若經》などの残片。佛像台座にある《阿弥陀佛座沙丘題記》:「大齊河清三 / 年歳次實沉於沙丘 / 東城之内**優婆夷比 / 丘尼之寺**率彼四衆 / 奉為　太上皇帝陛 / 下師僧父母俾閏含 / 靈一切有識……」**（図11）**	大斉河清三年（564）	石灰岩
⑫	山東省巨野県石佛寺《華厳經》	巨野県博物館	《華厳經》碑	大斉河清三年（564）	石灰岩
⑬	山東省鄒城市嶧山五華峰摩崖刻経	南側下部	《文殊般若經》の節文（残存79文字）	河清三年（564）	花崗岩
		東側下部	文殊 / 般若 / 東平何□ / 東平僧安 / 陳留福 / 河間劉廣 / 廣弟子 / 趙根 / 孟茴兒 / 鶯巧 / 屈鳳 / □石 / 河清三年[14]		
⑭	河南省安陽市霊泉寺（元は高僧の慧光の弟子である道凭の建立した宝山寺）《華厳経》	現在の山門の真正面の坂の上にある碑亭内に二つの碑がある。	《華厳八会碑》/《司徒公婁叡華厳經碑》に「大方廣佛華厳経・菩薩明難品第六 **寺檀越主**司徒公使持節都督瀛冀光岐豐五州諸軍事瀛冀光岐豐五州刺史食常山郡幹**東安王婁叡**東安郡君楊」、「**王世子**假都督歧州□方軍事歧州刺史儀同三司左右直長大賢直内備身□都督食廣州南陽峡城□縣海虞伯**子彦**第二子通直散騎常侍**仲彦**」	北斉河清三年（564）の年末から（武成帝）天統元年（565）四月の前、「叡在豫境留停百余日」の間に作られた。	石灰岩
⑮	河北省邯鄲市北響堂石窟刻経 **＊『資治通鑑』によれば、石窟「大佛洞」は東魏武定五年（547）の前に高氏によって造られた。**	山門外にある石刻	《大般涅盤経 · 師子吼菩薩品》	天統四年（568）	石灰岩
		刻経洞の外《唐邕写経記碑》**（図3）**のつぎから洞内へ続く	《唐邕写經記碑》:「於鼓山石窟之所, 写《維摩詰經》一部、《勝鬘經》一部、《孛經》一部、《彌勒成佛經》一部」。計 : 4部	《唐邕写経記碑》:「天統四年（568）三月一日から武平三年（572）五月二十八日」	
		刻経洞中室南壁の右上。下と左は平に磨いた広い空白がある	《妙法蓮華經觀世音普門品第**廿四**》**(図12)**[12] ＊この**「廿四」**まで刻んだが、④中皇山と同じく、北周が北斉を侵攻した際に、慌てて放棄したと思われる。	576年末	
		刻経洞外上方摩崖	**大空王佛** / 寶火佛 / 無垢佛	北斉	
		合計：**4.8万字**			
⑯	山東省泰安市新泰県徂徠山映佛崖刻経	徂徠山南側の省道244号線の東側の山頂	《文殊般若經》の節文、「経主王子椿」、「般若波羅蜜」	武平元年（570）	花崗岩
⑰	山東省泰安市新泰県徂徠山光華寺刻経	山東省道244路西林場院内巨石	《大品般若経 · 序品》の節文、「十八空」/ **大空王佛** / 彌勒佛 / 阿彌陀佛 / 觀世音佛 /「般若波羅蜜経主冠軍將軍梁父縣令王子椿普喜武平元年僧齋大衆造**維那慧遊**」**（図13）**	武平元年（570）	花崗岩
⑱	山東省鄒城市嶧山腰経洞摩崖刻経	山の中腹に腰経（妖精）洞	《文殊般若經》下	武平元年～武平三年（570～572）七月の間[13]	花崗岩

⑲	河北省涉県木井村宝雲寺刻経碑	現在は中皇山ふもとの北斉佛教石刻陳列館に移された	《七級石浮図觀音経碑》「妙法蓮華經觀世音普門品第廿四」（文字の破損もあるが、全文である） 《石垂教経之碑》「佛垂般若槃畧説教戒經一巻」（全文）	武平二年（571）[14] 武平四年（573）	石灰岩
⑳	河南省林州市洪谷寺千佛洞石窟刻経	洞内	《妙法蓮華経・觀世音菩薩普門品》/《金剛般若波羅蜜經》/《金光明経・贊佛品偈》/《摩訶摩耶經》/《無量義經・行品偈》	武平五年（574）	石灰岩
㉑	山東省鄒城市尖山摩崖刻経	鄒城市外環路東北の角の外側が「支鍋石」の北坂にあたるが、原石はもうない。	《文殊般若經》と《思益梵天所問經・問談品》の節文、六波羅蜜 / 諸行無常 / 文殊般若 / **大空王佛**（サイズ1.8x6m、「佛」の二本の縦は佛の手の形）（図21. 中の下）/ 大沙門僧安 / 大沙門僧安與漢大丞相京兆韋賢十九世孫州主薄兼治中鎮軍将軍膠州諸長史行睢州刺史興祖弟子深妻徐息欽之休児等同刊**経佛**於昌邑之西繹嶺（山＋参）山里於時**天降車跡四轍地出湧泉一所**故大斉武平六年歳次乙未六月一日……經主□□□晉昌王**唐邕妃趙** / 經主韋子深妻徐法仙 / 經主□□□□同陳德成 / □□□□□德信妃董妃 /　など	武平六年（575）六月一日 **＊1960年代にダムを作った際、石刻経を石材にするため破壊した。山東省博物館に昔の拓本が収蔵されている。2016年、山東省博物館蔵の拓本を使って鄒城市鴻山の山頂に複刻された。**	花崗岩
下記の鉄山に北周大象元年の年号が載っているが、北斉亡国の三年目であり、しかも「東嶺僧安道壹署經」の署名もあり、僧安道壹僧団の所為である。					
㉒	山東省鄒城市鉄山摩崖刻経（図17）	鉄山公園のなか	《大集經・穿菩提品》、《石頌》 摩崖の下題記：寧朔將軍大都督任 / 城郡守經主孫洽 / **東嶺僧安道壹署經** / 齊搜揚好人平越將軍周 / 任城主簿大都維那 / 閭長嵩 **＊孟府に収蔵された清末の拓本では、題記左側に「任城郡 / 功曹南平阳县 / 功曹大都维那 / 赵郡李巨敖」とあるが、現在は亡失。** 摩崖の左：12行《石頌》	《石頌》に載っている「皇周大象元年（579）八月十七日」	花崗岩
下記二ヵ所に北周大象二年の年号があるが、刻経内容、刻経特徴，所在場所を見れば、同じく僧安道壹僧団の所為である。					
㉓	山東省鄒城市崗山摩崖刻経	雞嘴石 東壁	《佛説觀無量寿經》の節文	大象二年（580）七月三日	花崗岩
		雞嘴石 北壁	二郎 / 比丘惠暉 / 尽法會 / 大象二年七月三 / 日、比丘道成、僧岸、唐章 / 像主朝思和 / 韋傳竹 / 石經（佛龕）釋迦文佛 / 弥勒佛 / 阿弥陀佛		
		山頂、北坡、東坡	《入楞伽經》/ **大空王佛** / 阿弥陀佛 / 釋迦文佛 / 弥勒尊佛		
㉔	山東省鄒城市葛山摩崖刻経	葛爐村の北	《維摩詰所説經・見阿閦佛品》	大象二年（580）	花崗岩
下記の刻経は年号がないが、旧北斉エリアに立地し、北斉刻経の特徴も持つ。576年末に北周が北斉に侵攻した際、未完成のまま慌てて放棄したと思われる。特に⑧二鼓山（河清元年）と㉗雲翠山は共に「**比丘僧太**」の刻銘がある。この三点によって㉕から㉞までの各地刻経と北斉“僧安道壹僧団”が繋がっていることが解る。					

㉕	山東省泰安市泰山経石峪《金剛経》	ふもとの紅門から中天門の間、「経石峪」石鳥居をくぐって東へ200m	鳩摩羅什・訳《金剛經》の節文。2800文字あったはずが、現存（未完成の残字も入れて）は約1070文字。**（図４）**	北斉？ **＊郭沫若氏は「経字大如斗、北斉人所書……」と判断した。**	花崗岩
㉖	山東省寧陽県神童（鳳凰）山摩崖刻経	山頂南側	**大空王佛** / 彌勒佛 / 彭大買	北斉？	花崗岩
㉗	山東省平陰県雲翠山摩崖刻経	山頂摩崖西壁	**大空王佛** / 比丘寶陵 / 比丘智□ / **比丘僧太（図10．左４上）** / 比丘道□ / 比丘僧令	北斉？	石灰岩
㉘	山東省平陰県洪範鎮東山摩崖刻経	泉池東山、泉池北山それぞれに１條	**大空王佛**	北斉？	石灰岩
㉙	山東省平陰県大寨山摩崖刻経	山頂の南、狭い山筋の上向きの石盤	阿弥陀佛	北斉？	石灰岩
㉚	山東省東平県銀山摩崖刻経	山の南側の崖	佛説摩訶般若波羅蜜	北斉？	石灰岩
㉛	山東省滕州市陶山摩崖刻経	山頂の北側の石盤	般若波羅蜜 / 阿弥陀佛 / 觀世音佛 / 経主空	北斉？	石灰岩
㉜	山東省滕州市羅漢山摩崖刻経	山頂近くの崖の西側	《文殊般若經》末句：「何以故」	北斉？	石灰岩
㉝	河南省衛輝市霖落山香泉寺刻経	香泉寺	《大方廣佛華嚴經·佛不思議法品》	北斉？	石灰岩
㉞	江蘇省徐州市雲龍山摩崖刻経 **＊2016年５月11日《徐州日報》報導發現了“阿彌陀佛”。**	北魏石佛から東北へ約400mの麓。 **＊旧城内、古來の「廟会」祭祀場。**	“阿彌陁佛”（図21．**右上**） **＊「陁」の最終画、「佛」の最終画が大変長く，僧安道壹僧団の石刻の特徴（図21）に合う。現存石刻は多回に破壊され、数度にわたり修復したものである。2020年５月19日筆者と胡新立氏は徐州博物館の岳凱氏の案内で踏査した。**	北斉？ **＊徐州は北魏、東魏、北斉のエリアであり、山の上に北魏石佛あり、その近くに「太和十年」（486）題記がある。**	石灰岩
下記の林旺石窟は北斉に起工され、隋開皇七年（587）に竣工。北斉石刻の継続工事の典型としてこの一覧表に収録する。					

㉟	河北省涉県林旺石窟	清漳河東岸、近くに古驛道もある。	□□□□□跡非色非形秘理幽玄無言無説暨于**秦風胡俗**天人道士識異淺深物分[15]利鈍／故三十七品開等級之門十二部經辟有空之道然世迷三毒俗染六塵／即生滅於四輪亦往來於五惑就令抱樸養生之術淮南鴻寶之論會逐時遷終隨／□□豈如童子獻土長者布金憑一念以達無生積半善而登彼岸游菩薩苦海坐□□□林永事無為長居自在然斉州楊王府戸曹參軍前臨水縣正李子良稟氣／□□□宗世襲龍門之風……上為皇帝陛下七世父母見存眷屬／法□□生**刊營石窟莊嚴未就便値齊亡**玄教陵遲屢移歳序然大隋率雲烏之／職□□龍之書父母天地兄姉妹日月哀百姓以君臨救群生而作主遂使遍垂甘露□□□雲以**開皇七年**歳在鶉首律應蕤賓日維丁末但以幸承願力蒙助善因尚／□□□仍余舊所於是磬子孫之業盡身外之資爰命匠人就不滿□ 然輪法師本□□□後歸釋種……乃三界之名區遠致／高僧近成法集恐山頽川涸地絶天傾勒石伝[16]芳	石窟門外の左右の摩崖に、それぞれ石碑形が彫られ、石窟の縁起、邑義、建設記がある。左方の碑に、**北斉に起工し、隋開皇七年**（587）にやっと**完成**したとある。	石灰岩

注：表中の十ヵ所に僧安道壹僧団を象徴する独特な佛名「大空王佛」（大字で標記）17條がある。そのうち年号のある石刻は⑧の年代（562年）が一番早い。ほかは⑨$_2$、⑩$_6$、⑮、⑰、㉑、㉓、㉖、㉗、㉘$_2$である。今まで各地の歴代佛教石刻遺蹟を調査したが、「大空王佛」という佛号は僧安道壹僧団の石刻経事業以外に無い。図15の⑧、⑩$_6$、㉗、㉘$_2$は「大空王佛」が一番多く集中していることも、⑩にある《安公之碑》の内容も、ごく近いところに⑤、⑦、㉗、㉘、㉙、㉚が存在することも、それに僧安道壹僧団刻経運動の合理性を考えれば、洪頂山が僧安道壹僧団の本山であることを表明している。

下記は2020年に新たに存在が知られるようになった「棗庄卓山刻経」である。僧安道壹僧団の作品であるかどうか賛否両論がある。2020年11月19日に山東省石刻芸術博物館によって行われた「第六回石刻論壇」（参加者60数名：北京大学朱青生教授の研究チームなどの考古機構と博物館およびマスコミ）で、もと鄒城市博物館長胡新立氏と筆者が現地調査し「北斉の刻経ではない」と結論したが、その主な根拠は下記の通りである。

その一：曼陀羅仙訳の《文殊師利所説摩訶般若波羅経》98文字の節文であれば、最左行の最下にある「世」文字の下にあるべき６文字の空間が取られていない、その下は十数ｍの絶壁で、僧安道壹僧団の刻経現場とは見られない。

その二：岩石にノミの痕が見える（図14．右下に石の写真：白い点）1400余年前の作品とは考えられない。

その三：経文あたりの岩石は色が周辺より濃いグレーであり、そこの石英の筋はまわりより不自然に突き出ていて、塩酸類に腐蝕された感じがする。

その四：１．現在の山東省エリアの中で、北斉刻経には、初期の②汶上白石寺《文殊 般若》碑

から末期の㉕泰山《金剛経》まで、多くは略字「无」が使われているが、ここの経文は「無」となっている。

２．卓山の「般若」の文字（図14．左下のアップ）を汶上《文殊般若》碑の「般若」（図７．上部）に比べると、卓山の書は工夫が足らず、生気もない。これは複製品と考えられる。

その五：2017年10月に所在地である斉村鎮の文物管理を担当する幹部は「利白佛言世」行の左上方に約90㎝のところに自作の漢詩を刻んだ。草書の文字は大きい方が20㎝ほどもあり、テーマ行の下部には「丁酉菊月」と記入した。それを作った時、一つの文字が30㎝以上の数十文字の古い刻経があれば、無視のままにすることは有り得ない。

⑦ 疑問	山東省棗荘市 市中区斉村鎮 卓山摩崖刻経	西峰の山頂	般若（「般」のサイズは（約）横33cm、縦18cm） ＊「般若」（**図14**．左下のアップ写真）から西へ80m ほど、南向き崖に約60°の岩石表面に《文殊般若経》の節文は約22文字がある。2020年５月19日、10月20日、2021年４月15日に筆者と胡新立氏および現地学者が現場調査した。 利白佛言世□□□／ 佛言般若□□□／ 相非思□□□／ □晦無明□□□／ □是名般□□□／ □行處非□□□／ □□處（？）何□□／ □□□□／ □□凋□□□ ＊上記の「経文」文字のサイズは（約）: 横34cm、縦28cm **＊最近、上記の20文字ほどの拓本だけではなく、《文殊般若経》98文字の節文に「大斉河清元年四月六日」も加えて108文字の「卓山刻経拓本」が流通している、その拓本の最左行の二つ目の「白」の下の横の筆画に当たるところは岩が膨らんで何も刻まれていないはずが、完全な字形である。**

図７．汶上県博物館蔵　②水牛山白石寺《文殊般若經》碑。図の右の写真は碑の左側面の「題記」。図の左拓本の写真が碑の右側面の拓本であり、温兆金氏提供。（筆者撮影）

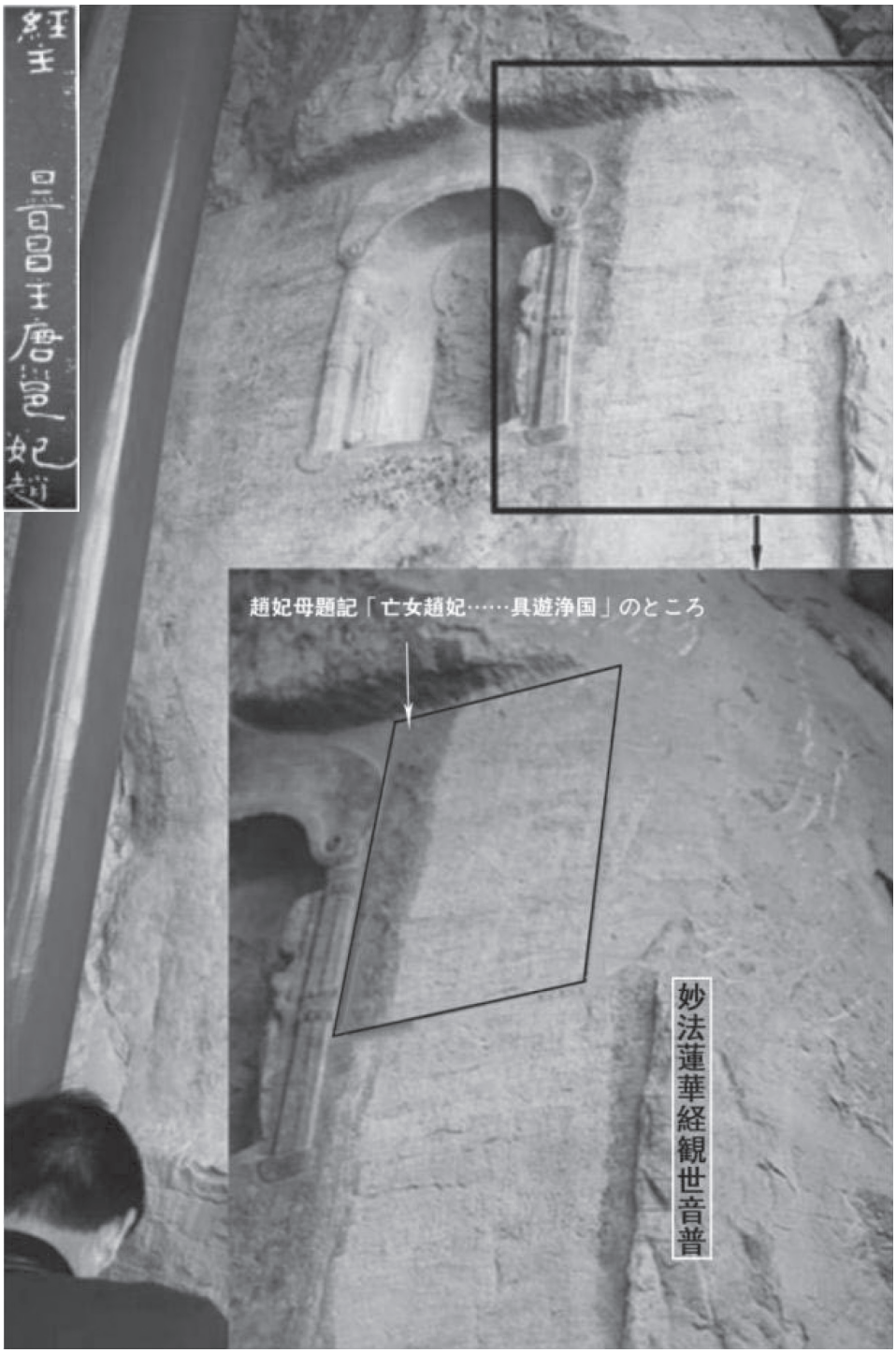


図８．④中皇山の現在の山門外の左の摩崖の上部の題記に「亡女趙妃…」とある。図左上㉑尖山刻経にも「経主□晋昌王唐邕妃趙」と同じ人物が見える。中皇山題記の下に「妙法蓮華経観世音普」まで文字があるが、下と左は磨いて出来た空白の平面であり、未完成のままである。（筆者撮影）

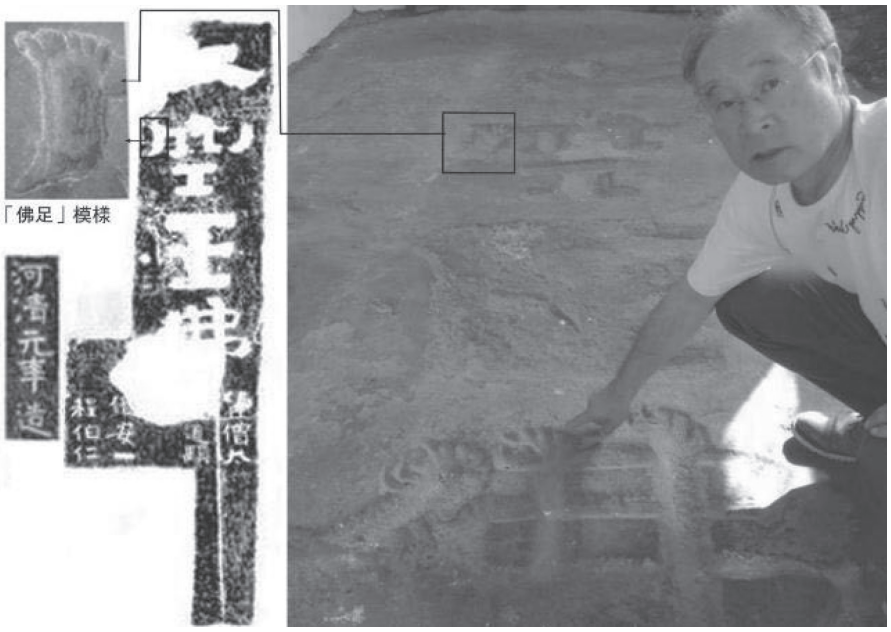


図９．左は⑧二鼓山「大空王佛」拓片（頼非氏提供）。右は原石（「佛」の手の模様を指して「経変書」の特徴と説明する北島信一氏）。（筆者撮影）

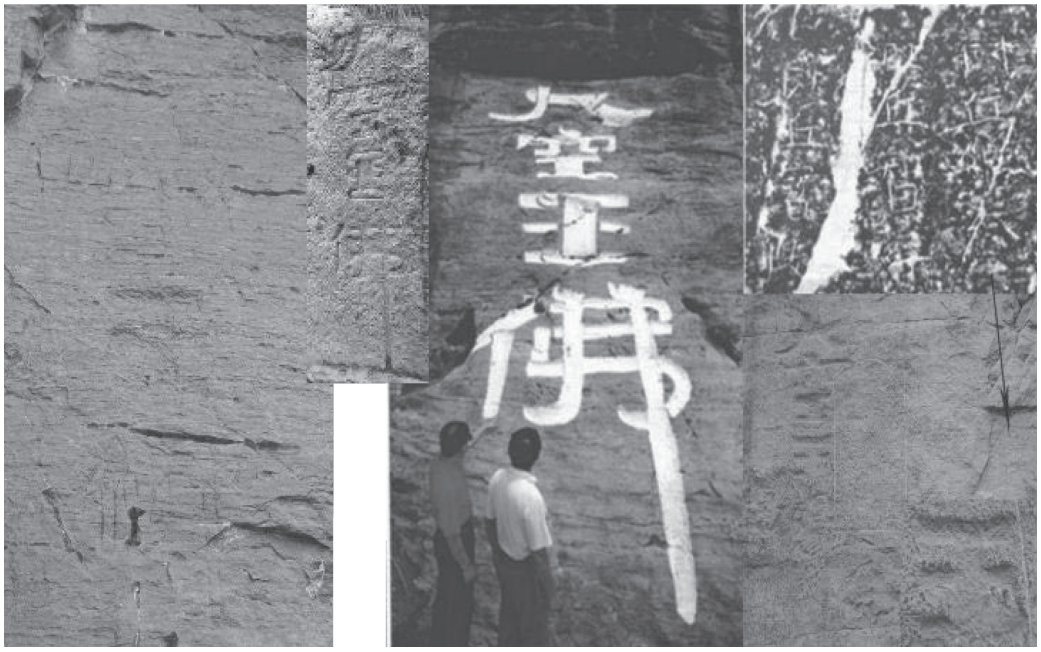


図10．左から⑮北響堂山「大空王佛」。⑨南響堂「大空王佛」。⑩洪頂山「大空王佛」（楊浩氏提供）。右下は㉗雲翠山「大空王佛」で、その右下隅「王」は拡大したもの、縦画の上端を横画へ挿入するところは洪頂山「大空王佛」と同じ、僧安道一僧団の石刻作品らしく模様が刻まれている。右上は㉗矢印部分の拓本で、１行目は「比丘僧太」と判読できる。（筆者撮影）

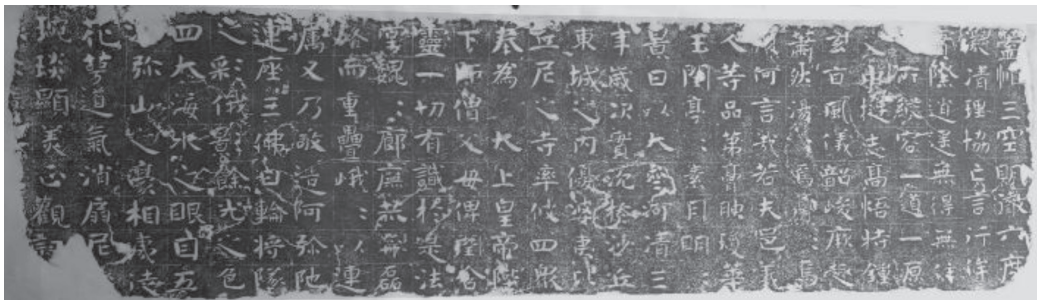


図11．兗州博物館展示品⑪金口壩《阿弥陀佛座沙丘題記》（筆者撮影）

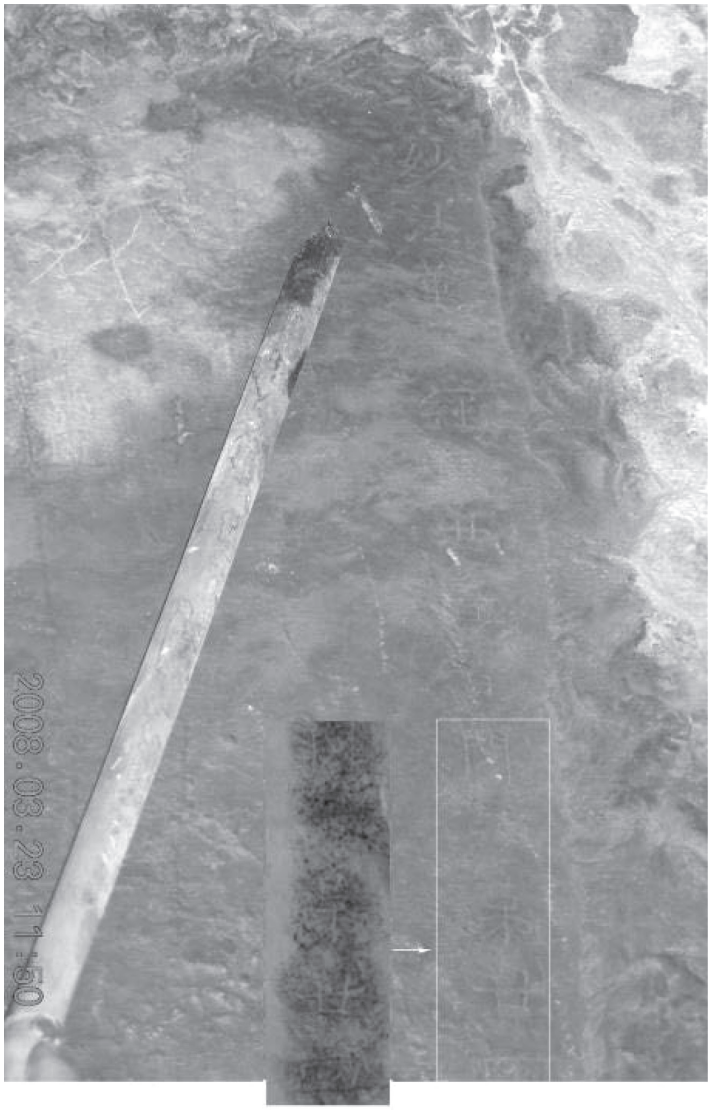


図12．⑮北響堂山石窟刻経洞の中室壁に刻まれた「妙法蓮華経観世音普門品第廿四」（筆者撮影）

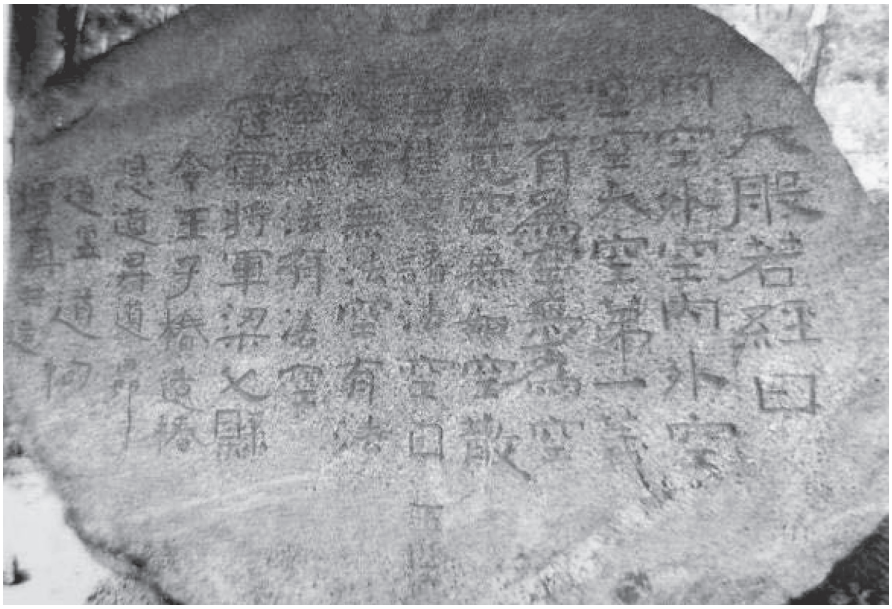


図13. ⑰徂徠山光華寺刻経の「十八空」刻石（筆者撮影）

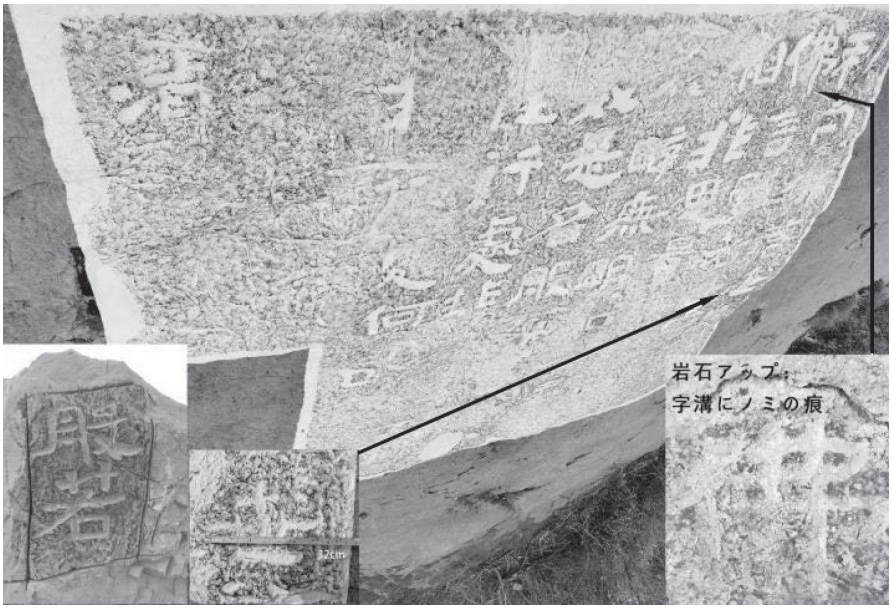
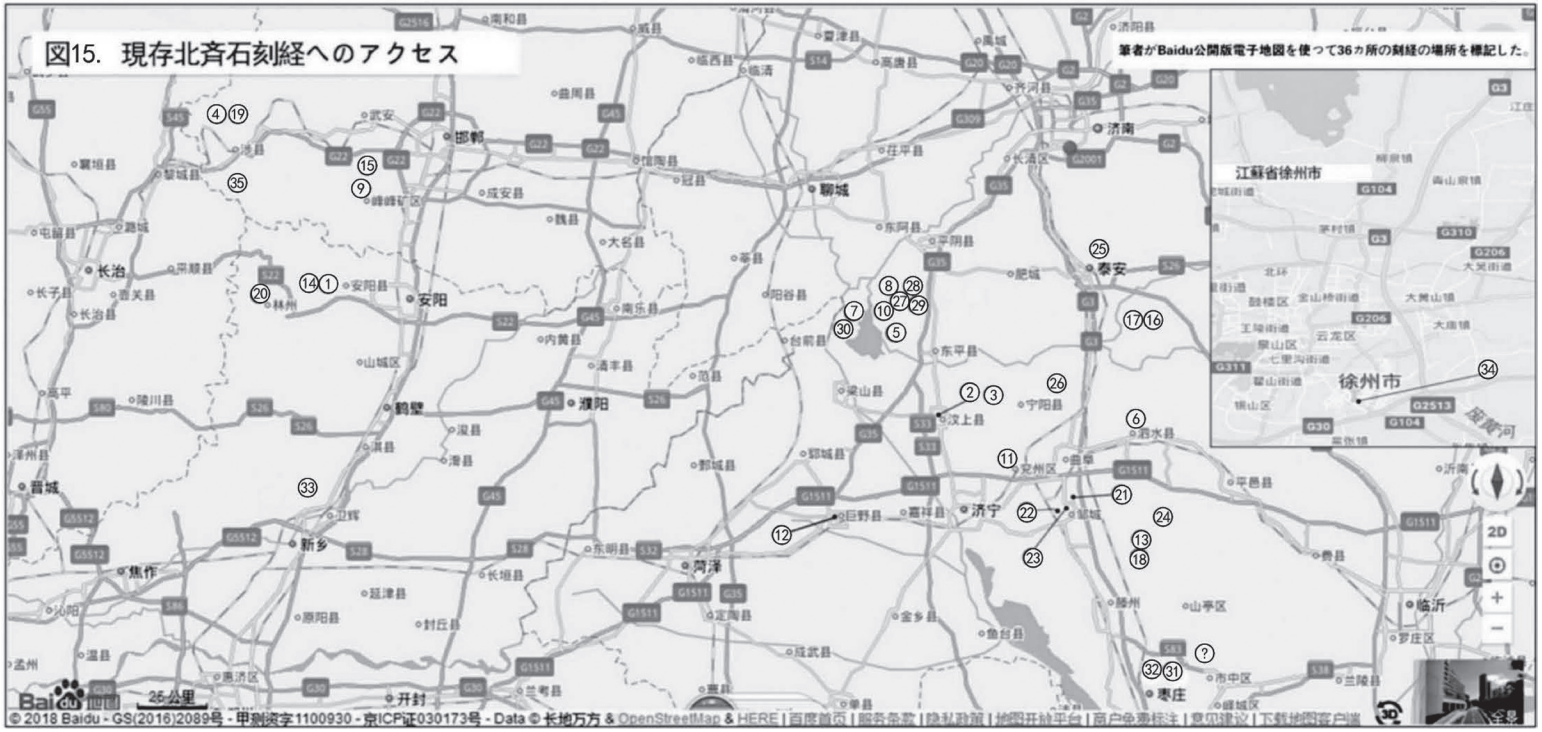


図14. 疑問の卓山摩崖（筆者撮影）



図例　①河南省安陽市小南海石窟　②山東省汶上県水牛山白石寺《文殊般若經》刻経碑　③山東省汶上県水牛山摩崖刻経　④河北省涉県中皇山石窟　⑤山東省東平県梁林村海檀寺《觀世音經》刻経碑　⑥山東省泗水県天明寺《維摩詰經》刻経碑　⑦山東省東平県司里山摩崖刻経　⑧山東省済南市平陰県張海村二鼓山摩崖刻経　⑨河北省邯鄲市南響堂石窟　⑩山東省東平県洪頂山摩崖刻経　⑪山東省済寧市兗州区金口壩刻経　⑫山東省巨野県石佛寺《華厳經》刻経碑　⑬山東省鄒城市嶧山五華峰山頂巨石摩崖刻経　⑭河南省安陽市霊泉寺《華厳經》刻経碑　⑮河北省邯鄲市北響堂石窟　⑯山東省泰安市徂徠山映佛崖刻経　⑰山東省泰安市徂徠山光華寺刻経　⑱山東省鄒城市嶧山腰経（妖精）洞摩崖刻経　⑲河北省涉県木井村宝雲寺刻経碑　⑳河南省林州市洪谷寺千佛洞石窟　㉑山東省鄒城市尖山摩崖刻経　㉒山東省鄒城市鉄山摩崖刻経　㉓山東省鄒城市崗山摩崖刻経　㉔山東省鄒城市葛山摩崖刻経　㉕山東省泰安市泰山経石峪《金剛経》摩崖刻経　㉖山東省寧陽県神童（鳳凰）山摩崖刻経　㉗山東省平陰県雲翠山摩崖刻経　㉘山東省平陰県洪範鎮東山摩崖刻経　㉙山東省平陰県大寨山摩崖刻経　㉚山東省東平県銀山摩崖刻経　㉛山東省滕州市陶山摩崖刻経　㉜山東省滕州市羅漢山摩崖刻経　㉝河南省衛輝市霖落山香泉寺刻経　㉞江蘇省徐州市雲龍山摩崖刻経　㉟河北省涉県林旺石窟　㊲山東省棗荘市市中区斉村鎮卓山摩崖　＊中国 Baidu 社2018年度の開放プラットフォーム地図に基づき、筆者作図。

図15. 現存北斉石刻経へのアクセス

図16. 北斉、北周、陳の対立図（郭沫若　編《中国史稿地图集》上、北京・中国地図出版社1996.6刊、所収」P.72より引用

上記の原石と拓本とを比較すると、「碑」と「帖」表現の違いが感じられる。今後、現地調査のもとで原石・拓本・写真・三次元図形を使って考古研究を進めれば、旧金石学を遥かに超える研究成果が得られよう。

三、刻経年代考

北斉の石刻経（①～㉞）は天保元年（550）に始まり、武平七年（576）十二月に北周の侵攻により放棄され、北周大象元年（579）の㉒鉄山、大象二年（580）の㉓崗山と㉔葛山で一時期復興したが、その後隋朝（581年）が建立されると、社会構造、宗教信仰などが急激に変化し、北斉僧団は消滅しその刻経運動は終わった。以下には、石刻経遺跡に付された年号の問題について検証してみたい。

１．北斉年号を明記した最初の刻経：①小南海石窟：天保元年（550）。

２．北斉年月日を明記した最後の刻経：㉑尖山刻経：武平六年（575）六月四日。

３．起工・竣工の年月日を明記した刻経：⑮北響堂石窟刻経洞外の北側の《唐邕写経記碑》（図３）。「写維摩詰経一部勝鬘経一部孛経一部彌勒成佛経一部起天統四年（568）三月一日盡武平三年（572）歳次壬辰五月廿八」とある。

４．北斉に起工、隋に竣工の刻経：⑨南響堂山**石窟**と㉟林旺石窟の石刻経は継続工事であり、北斉に起工され，隋に竣工された。

５．「釋迦双林後」年号について：北斉の天保年末から皇族内部は殺人・抗争を繰り返し、政変が多発。これが原因で天保十年（559）から河清元年（562）までの四年間の内に五回も年号が変わった。翻弄された国民が平穏を願った時、僧安道壹僧団は⑩洪頂山において「釋迦双林後一千六百廿三年」の年号（図６．②、③、④の三ヵ所。ちなみに図６．①は「河清三年（564）」。）を採用し、佛教世界の平穏さを示したのだろう。⑧二鼓山にも同じように「経変書」の「大空王佛」が刻字され、その題記には「河清元年」「僧安一」と刻まれている。私はこれらの年号の関係を次のように分析する。

当時の高僧である慧思（515－577）もまた末法思想の影響を受け、その著述《立誓願文》に「釋迦牟尼説法住世，八十餘年，導利衆生，化縁既訖，便取滅度。滅度之後，正法住世，徑五百歳。正法滅已，像法住世，徑一千歳。像法滅已，末法住世，徑一萬年」と述べていた。これを僧安道壹僧団が採用したことが考えられる。そうであれば、洪頂山の「釋迦双林後一千六百廿

三年」は「河清三年」（564）または「天統元年」（565）に相当する。

「双林後」とは釈迦の入滅後の年代を数えるもので、当時、多種の計算法があった。北朝はとかく佛教と道教と儒教との角逐があり、成立の早い方が正統と思われたようで、両者は様々に理由を上げて「釈迦生年」、「老子出関」年代を遡らせた。《史記・孔子世家》に孔子と老子に会った話を載せ、紀元前518年のことと伝える。「釋迦双林後」は更に古い伝承のため仏教の方が優れていることになる。

６．記年の無い刻経について

刻経に「題記」がなければ、九仞の功を一簣に欠くとも言われる。刻経を介して礼佛を行なう際は「題記」を作り、発願内容、供養人、年代を標記するのが慣例である。下記の刻経には記年がないが、北斉の遺跡であると推測される。

④中皇山の山門外左崖に石碑のような形が刻まれている（図８）。この碑額に相当するとも思われる佛龕の左側に文字があり、趙妃の母によって「亡女趙妃」発願文が刻まれた。そこの右上に数十本の鑿跡がはっきり見え、おそらく発願文の冒頭部分の痕跡であろう。現在は「妙法蓮花経観世音普」の文字が残るのみだが、完成当初は佛龕を挟んで40列の文字があったであろう。龕の右13列、龕の下18列、龕の左９列、佛龕下はただ３字だけ残り、その下と左の碑面は空白である（図８）。

㉑尖山「経主□尚書晉昌王唐邕妃趙」（図８．左上にある拓本）刻石では武平六年（575）六月時点で経主の「唐邕妃趙」は存命中だったが、前出の④中皇山碑石では「亡女趙妃」とある。この記述によれば、「唐邕妃趙」は武平六年（575）六月以降の死去であり、尖山はその後の造営ということになる。唐邕は、武平六年（575）十二月、晋陽の戦いで北周に降伏し、北斉境内に居る彼の三男が殺され、唐氏一族は逃亡した。この時までに、④中皇山々門の趙母発願による「亡女趙妃」刻石は、「妙法蓮華経観世音普」の「普」（図８．右アップ写真）まで，⑮北響堂刻経洞中室南壁の「妙法蓮華経観世音普門品第廿四」は「四」（図12）まで彫り上がったということであろうか。

これと同じ様相を呈すのが㉕泰山経石峪で、同遺跡にはいわゆる題記の類は存在しない。いったい何時の刻経と見るべきであろうか。しかるに、同刻経中にはいわゆる双鈎文字あるいは筆画の一部（図４．左下のアップ写真）のみの箇所が見える。これは同刻経が未完成であったことを示しており、事業が途中にして慌てて放棄されたことを示している。

北斉は577年一月に滅びた。おそらく、同じように各地で造営が進んでいた他の石経も未完成のまま、経主、僧団が消え、石工棟梁が失脚して雲散霧消し、刻経運動はあっという間に消滅した事情を示すものといえるのではあるまいか。

また㉓から㉞の刻経は、関係者（⑧二鼓山と㉗雲翠山は「比丘僧太」（図10．最右上の拓本）、

字形、書法等により、また地理的位置（昔の北斉エリア）、周囲環境、岩石の風化状況、地方史籍記載などから北斉時代の成立とみなされる。

四、北斉刻経の特徴

北斉石窟と石刻経事業は僧団の教義、経典選択、スポンサーの経済力、地理環境、石刻技術など多方面のバランス上に成立したもので、遺跡ごとの特徴に注目する。

１．刻経内容の選択

僧稠僧団の刻経地域には《孛経》、《勝経》、《弥勒下生成佛経》、《維摩詰所説経》、《十地経》、《華厳経》、《妙法蓮華経》、《涅槃経》、《金剛般若経》などが目立つほか、石窟も多く作られた。これらは北斉佛教を「地論学派」が牽引したことを示す。佛教学者の任継愈先生は《中国佛教史》において「地論学派」の教義に触れ、《十地經》の「十地」について次のように言われた。「十地はすなわち菩薩修習の十大階段のことである……低い‘地’（等級）より高い‘地’へと努力継続すること……‘俗識’より‘佛智’へ転換し、最高目的に至る十段階のことである」と。

僧安道壹僧団の刻経地域には《涅槃経》、《金剛般若経》、《妙法蓮華経》、また当時翻訳成ったばかりの《大集経・穿菩提品》などや、「大空王佛」などの佛号が採用されたが、経文の一部を抜粋した「節文」ばかりで長大な経文は一つもない。また⑤司里山には大佛が彫られているがこの例は珍しい。ほかに数ヵ所の遺跡に座禅窟や佛龕が見られるが、その数がわずかなことも特徴だろう。

２．刻経文字数

北斉領域においては河北省の刻経字数が最も多い。邯鄲市地域では、北斉刻経の大半が旧鄴都周辺部に造営された。刻経が十数部（節文と未完成品を含む）であり、合計20.29万字（この内④中皇山１か所のみで刻経六部、13.64万字[17]である）。石刻経として膨大な規模をわずか20年ほどで作り上げた。

文字数が河北省に次ぐ山東省に長大な経典の石刻は一点もなく、経文の節文あるいは摘要及び佛号が多い。また花崗岩の大字彫刻が多いことも特色である。㉒鉄山摩崖刻経は文字が一番多く残っており、現在判読可能な字数は794字である。しかし、昔の記録ではさらに多く、《石頌》では「敬写大集経穿菩提品九百卅字」とする。また《石頌》の437字（本来は614字）、題記の47字を加えると、現在の鉄山摩崖（図17）の判読可能字数は1278字である。

また㉕泰山経石峪《金剛經》（図４）は規模が大きく、保存状態が一番いい。文字数は破損文字と未完成の「双鈎文字」も含め約1070字である。

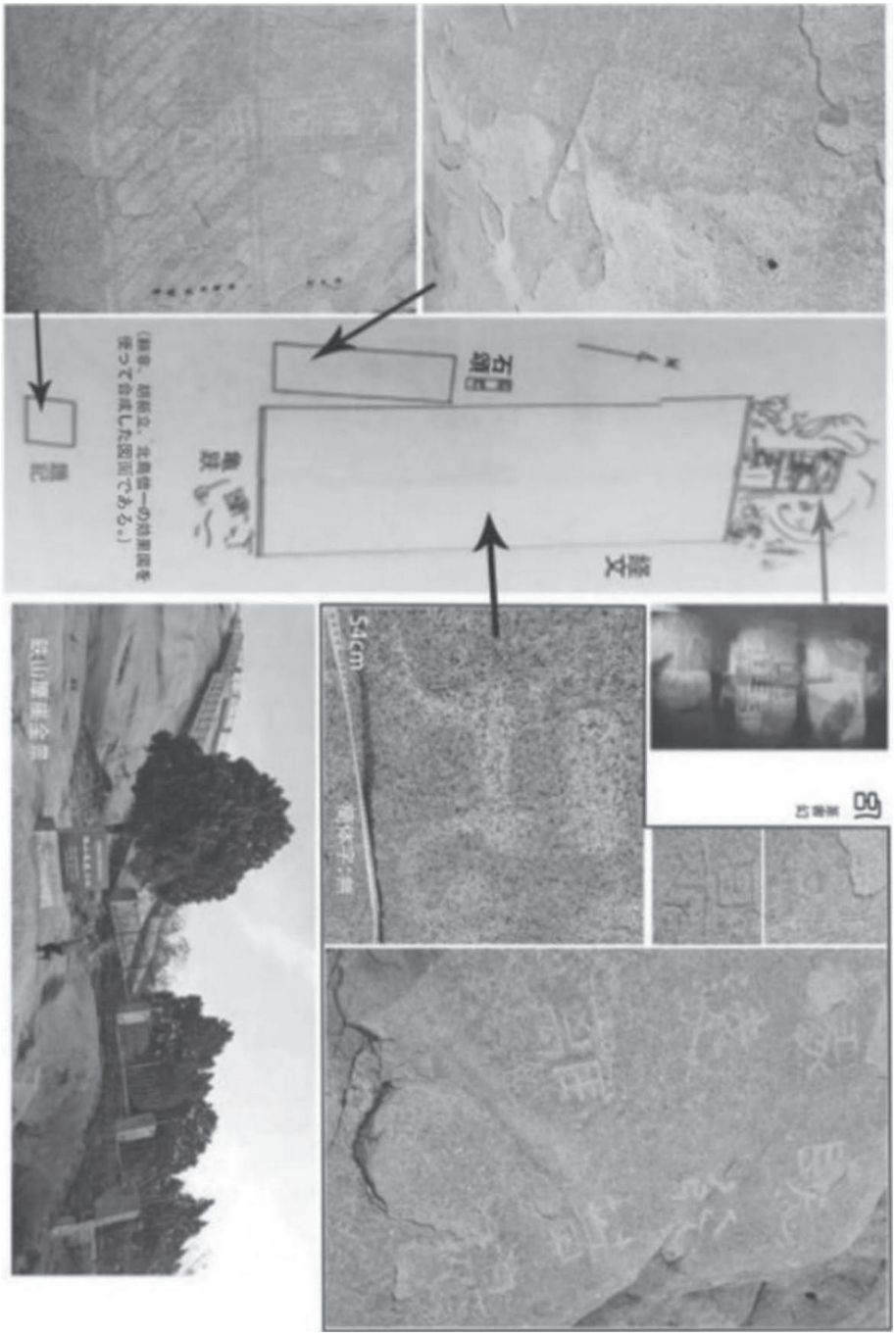


図17．鉄山摩崖刻経（筆者撮影）

３．北斉刻経の遺跡数

山東省は25ヵ所、河北省は５ヵ所、河南省は４ヵ所、江蘇省は１ヵ所である。

４．鄴都周辺及び東部に認められる最初期の北斉石刻経

最初期の北斉刻経は、鄴都周辺の①小南海石窟（天保元年）と、その東部の②水牛山白石寺刻経碑である。後者の題記に「経主厲威将軍兗州東陽平太守義州五城上郡太守太山羊鐘□□□……」とあり、《北斉書・巻四・帝紀第四・文宣高洋》に「七年十一月壬子詔曰……併省三州、一百五十三郡……」という記録がある。また『中国古今地名大辞典』（商務印書館香港分館1931年）P.490【東陽平郡】項目に「南朝宋置陽平郡。後魏曰東陽平郡。北斉廃。即今汶上県治」とある。更に同『辞典』P.1046【義州】項目にも「後魏置。北斉廃……故治在今河南汲県」とある。上記の理由で、その刻経碑の成立は天保七年十一月前だと推定する。

５．北斉石刻経の立地条件

北斉石刻経は石窟の一部分として刻まれたところもあるが、当時の寺院の近辺に造られたところもある。

６．花崗岩における刻経

山東省中部と南部に10ヵ所の花崗岩刻経がある。花崗岩は硬度が極めて高いのみならず、粒子も粗大で、当時の鑿では石灰岩製の④中皇山石経のような精妙な小文字は彫れなかった。その10ヶ所を年代順に並べると下記の通りである。

⑬嶧山頂五華峰摩崖　河清三年（564）
⑯徂徠山映佛崖　武平元年（570）
⑰徂徠山光華寺巨石　武平元年（570）
⑱嶧山腰経（妖精）洞　武平二或三年（571～572）
㉑尖山　武平六年（575）
㉒鉄山摩崖《大集經》　武平七年（576）
　　《石頌》　北周大象元年（579）
㉓崗山　北周大象二年（580）
㉔葛山　北周大象二年（580）
㉕泰山経石峪　北斉？
㉖神童（鳳凰）山　北斉？

７．北斉石窟と石刻経との比較

北斉石刻経事跡では、河北省、河南省の刻経は石窟の内外に刻され、しかも佛像もある。河北省、河南省、江蘇省にある北斉刻経はすべて石灰岩である。しかし山東省では⑦司里山の摩崖大佛、⑩洪頂山の小型佛龕、㉓崗山「雞頭石」北側題記に隣接する小型佛龕がある程度で、

他の刻経遺跡に佛像は無い。山東省の北斉石刻経には石灰岩と花崗岩の二種あるが、僧安道壹僧団刻経事跡では中皇山・南北響堂山のような石窟は一つもない。また同じ北斉でも多数の佛教遺跡が残る青州では、石灰岩製石窟も佛像も題記もあるが、石刻経が無い。最東端の膠東半島で近年発見された平度市天柱山東魏武定六年石窟と青島市膠南区３か所の石窟（峡溝西山石窟、石屋子溝石窟、黄石坎石窟。いずれも北朝～隋唐）には花崗岩石窟と佛像があるが、刻経が無い。北斉各地の僧団が佛教の石刻運動をそれぞれ個性的に行ったと観ることができる。

８．佛教から道教に変相した中皇山

中皇山々門前に《中皇山刻経記碑》（仮名）がある。これは⑮北響堂山《唐邕刻経記碑》（図３）に相当すると思しき碑であるが、文面が無く未完成らしい。図18に楷書「古中皇山」の四文字が見えるが，後人の筆であろう。北朝様式の螭首亀趺碑で、蟠龍と佛龕の大半が残り、亀趺は頭部が損壊して数回修復したようである。唐宋以後、佛道儒「三教合一」が進み、明朝に

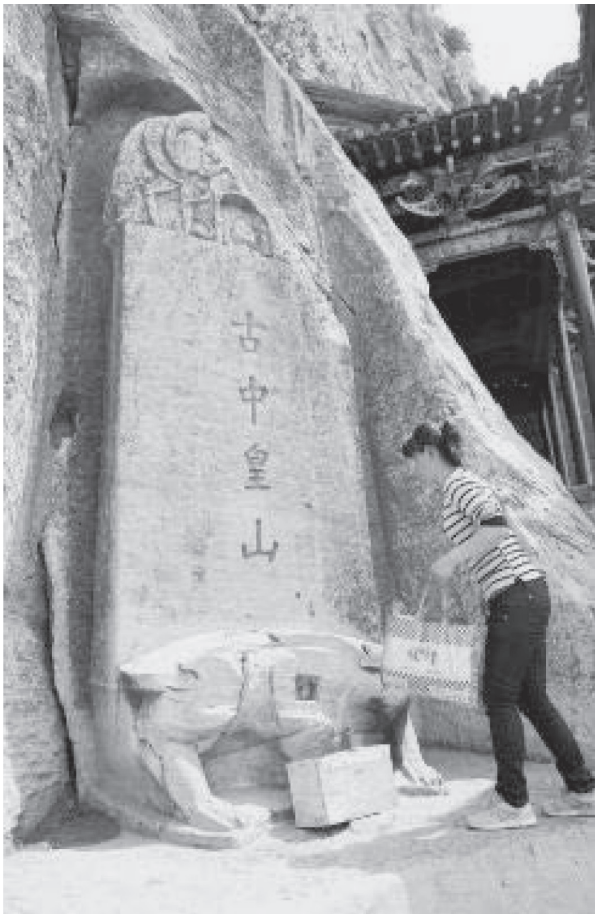


図18．④中皇山の山門前にある「古中皇山」の碑。この写真の右後の赤い柱の４本目の後の摩崖刻経には多くの字数が刻まれた。図８を参照すれば、中皇山で唯一の題記である「趙母題記」に「亡女趙妃…」があり、唐邕が北斉各地に展開した石刻運動の計画者であることの証拠の一つである。（筆者撮影）

至って中皇山は道教道場となり、「人皇」である「伏羲・女媧」という伝説上の人類祖先を祭祀する「媧皇宮」に様相を変えた。

現在④中皇山石窟は観光名所になったが、かつて筆者と馬忠理先生が現地調査の際、農家の人が「あの山を唐王峧という。そこに「媧皇宮」があり、後ろの崖に一寸ほどの文字が沢山刻まれています。」と親切に教えてくれた。「唐王」は、北斉の晋昌王唐邕のことではなかろうか。

五、北斉刻経の主要な資助者

北斉刻経は広大な領域に展開し、規模雄大な造営が多数ある。これらは相当な経済力、宗教的動員力、文化的書写水準、石刻道具、交通条件などの条件が揃わなければ実施できない、全国的宗教活動であった。

梁啓超氏は南北朝佛教を次のように分析した。「佛教発達，南北駢進，而其性質有大不同者。南方尚理解，北方重迷信。南方為社会思潮，北方為帝王勢力。[18]」北斉文宣帝高洋は即位の初めに菩薩戒を授与され、《高王観世音経》を国経に欽定した。[19]そして「以国儲分為三分，謂供国、自用及以三宝」という詔書を下した。[20]寺廟石窟を多数造営し、境内の佛寺は四万ヵ所以上、僧侶は鄴都だけで八万人を越えた。さらに555年に「道士皆剃髪皈依沙門」という道教禁止命令を公布し、佛教が独占的地位を占めるに至った。

唐邕　この社会環境で石刻経運動を推進した大人物こそ唐邕だった。《北斉書》には唐邕の記載が詳しい。字は道和、祖籍は晋陽、幼い頃から「聰明敏慧」だった。「高歡命其直外兵曹，典執文帳。 邕善書計，強記默識」で、「文襄大將軍督護」に抜擢された。文宣帝高洋にも重用され、尚書令まで昇進した。武平初年、右丞相の高阿那肱や御史に弾劾されて晋昌王という名ばかりの肩書で朝廷権力中心から遠ざけられていた。北斉末に再起用されたが、武平六年（575）十月、北周の武帝が14万５千人の軍隊（将軍の一人の楊堅は４年後、隋の初代皇帝）を率いて北斉の晋州に侵攻してきた。朝から昼まで前線から急を告げる駅馬が３回も発出されたが、後主高緯は妃と狩猟に夢中でこれを無視。十一月に入りようやく応戦に向かったが、２か月間に幾戦も連敗を続け、鄴都に撤退した。その間、晋陽に居た唐邕は北周に降伏し、「授開府儀同大將軍，卒于隋開皇初年鳳州刺史任上。邕三子、長子君明、開府儀同三司、開皇初、卒于應州刺史、次子君徹、授中書舍人、隋戎、順二州刺史、大業年間，卒于武賁郎將任上、**少子君德，以邕降周伏法**[20]」と、歴史は目まぐるしく変わった。唐邕と北斉刻経に関わる記載は、⑮北響堂の《唐邕刻経記碑》（図３）に「待群方而似鏡、応衆務其如響。四海仰以彌高、千官挹而満腹、眷言法寶，是所歸依」とあり、刻経洞に刻まれた四部刻経の第一部は《維摩詰經》であることから、唐邕**自身**が維摩詰である自負心を表していることや、④中皇山の趙妃母題記（図７）「亡女趙妃……具遊浄国」と、㉑尖山摩崖（図７．左上）「経主□尚書晋昌王唐邕妃趙」の計三か所の山は勿論のこと彼が北斉全体の石刻経運動を把握したことが知られる。

高阿那肱　⑨南響堂石窟に高阿那肱が出資した。彼は高歡時代より寵愛を受け、後主から「大丞相淮陰王」に任命されたが、《北斉書》では「肱伎庸劣，不涉文史……亡斉者遂屬高阿那肱」と、悪評されている。

婁叡（531-570）は鮮卑族で、本姓は匹婁、北魏六鎮の一つ懐朔鎮（現在の内蒙古固陽県の境内）に所属し、高歓の本妻の甥である。《魏書・補列伝第七》には「叡字伏仁，父拔，魏南部尚書。叡幼孤，被叔父昭所養……叡無他器幹，以外戚貴幸，縱情財色……河清三年（564），濫殺人，為尚書左丞宋仲羨彈奏，経赦乃免。尋為太尉，以軍功進大司馬。武成至河陽，仍遣総偏師赴懸瓠。**叡在豫境留停百余日**，専行非法，詔免官，以王還第、武平元年（570）二月五日薨」とある。⑭小南海霊泉寺の《司徒公婁叡華厳経碑》にも「寺檀越主……東安王叡。**王世子**……**子彦**第二子……**仲彦**」と記されている。皇族の外戚である婁叡家族は道憑の弟子の霊裕が住持であった寺院の拡張工事に大いに布施したので、霊裕はお礼として《司徒公婁叡華厳経碑》を揮豪したようである。1979年、現在の太原市で婁叡の墓が発掘され、その墓誌銘が「太原叡墓発掘簡報」（《文物》1983.10）に掲載されている。

地方名門豪族　②水牛山白石寺刻経碑に見える泰山羊氏一族（原籍は現在の山東省泰安市新泰県羊流鎮）は、史書に10余人の官吏と書家が記載され、北朝で活躍した。このうち上党太守の羊衙、征南大将軍の羊祜（蔡文姫の甥）、兗州別駕であった羊瑩の息子羊烈などが佛道に精進し、北魏太和年間に兗州で尼寺を建立するなどしている。また⑯⑰徂徠山二ヵ所に「梁父県令」王子椿の名前。㉑尖山に韋氏（「鄒魯大儒」出身の前漢元始年間の丞相である韋賢の子孫）一族と唐邕妃趙の名前。㉒鉄山に匡氏（前漢建昭年間の「丞相」匡衡の子孫）一族など諸遺跡に名門豪族の名が残されている。

北斉刻経（特にスケール大きな刻経）には、王朝からの供養、寺の檀越主であった権力者と名門豪族からの寄附、各地の庶民信者からの布施や労働力の貢献があったのである。

六．北斉刻経における二大僧団

北斉刻経では㉒鉄山のように明確に各種の参与者を記入した例は少ない。北斉刻経の基礎理論として注目したいのが「地論」と「末法」思想である。下記の小節で佛教史を遡り、遺跡現場を調べ、刻経に関する僧団の主要人物を絞り出したいと思う。

１．僧稠（稠法師）僧団

北斉の鄴都を中心に（そのエリアは現在の河南省安陽市と隣接する河北省邯鄲市。図15）僧稠と彼の弟子達は石刻経運動を始めたのである。

①小南海石窟の窟門の上に「稠法師記」として、発願人、供養人、石刻年代を記載する。これは現存する最古の北斉刻経である。僧稠は乾明元年（560）に遷化し、霊山寺の方法師が弟子

達と一緒に僧稠の遺志を継続することを誓いあった。石窟内正面の佛像の傍らに比丘僧稠の供養する姿と題記も刻されている。（図28．右）近年、その近郊の旧都鄴と磁県と武安県など数か所で、僧稠遺跡だとされる禪窟、寺廟遺跡が発見され、河南安陽から出土した《大斉故沙門大統僧賢墓銘》によれば東魏、北斉の各級僧官はみな僧稠、慧光の門人である。

僧稠　《続高僧傳》には、「僧稠（480-560）俗姓孫，祖籍昌黎，後居鉅鹿。以性度純懿孝信知名，勤学世典備通経史，授太学博士，講解儒学経籍，聲蓋朝野。在連年戰亂、社会動盪之際，28歳投巨鹿景明寺僧実法師出家。其後，從道房禪師習禪；往定州嘉魚山修禪；修煉《涅槃經》的《四念処法》；再轉趙州（今河北隆堯県境内）漳洪山隨釋道明禪師習十大特勝法；到少林寺參祖師佛陀扇多（跋陀）時，譽自蔥嶺以東，禪学之最。與北魏最高僧官国統慧光並列両賢」、「北魏孝明帝（515-528）三召不去，乃就山送供；後又婉拒東魏、北斉皇帝的多次徵召，天保元年（550）以古稀之齢，由宣帝高洋聘為国師，任皇家寺院石窟（即⑬北響堂寺）大寺主，高斉河北，獨盛僧稠。周氏関中，尊登僧実。……致令宣帝擔負，傾府藏於雲門，塚宰降階，展歸心於福寺，誠有図矣」とあり、また「僧稠禪法，不再頭陀乞食，前後受朝廷、豪門供養40餘年，著作僅《止観法》両卷」「稠懷念処，情範可崇，摩法虚宗……可崇則情事日顯，幽頤則理性難通」とあって、僧稠禪法は達摩と違う。また《太平廣記》に「僧稠武芸高強，能飛行壁間，開創少林武術之習」と。僧稠は、痛苦が社会環境などの「外因」によるのではなく、「自招」つまり自身の感知によるとし、僧俗ともに現在の境遇に安住しようと唱えた。乾明元年（560）に僧稠は雲門寺で座化された。

慧光（487-556）は河北定州の出身、13歳に上洛し，少林寺で出家した。後に跋陀にしたがって《華厳》、《涅槃》、《維摩》諸経を翻訳した。また勒那と菩提流支と共に《十地經》を翻訳し、「聖沙弥」とか「斉代名賢，重之如聖」と讃えられた。北斉天保二年（551），文宣帝高洋は十統之職を設けた。そのなかで、曇遵、曇献、那連提黎耶、曇延、法上、僧賢、定禅師はみな慧光の門人である。慧光は70歳で鄴郡（現在の安陽）で圓寂した。

道憑（487-559）は、12歳で出家。慧光の弟子。《続高僧傳》に「聞（慧）光師宏揚戒本、因往聴之、渉悟大乗、深副情願。乃辞（慧）光、通法弘、趙魏伝燈、罕有斯焉。講《地論》、《涅槃》、《華厳》、《四分》……以斉天保十年（559）三月七日、卒於鄴城西南宝山寺」とある。⑭霊泉寺に「宝山寺大論師道憑法師焼身塔　大斉河清二年三月十七日」と刻まれた石塔が伝わっている。

霊裕（518～605）は、道憑の弟子である。《続高僧傳》に「専業華厳、涅槃、地論、律部……唯大集、般若、観経、遺教等疏……又從安、遊、栄三師聴雑心義、嵩、林二師学成實論……遂号為「裕菩薩」也、皆從受戒三聚、大法自此廣鳶焉」。隋まで各地で活躍。

慧遠（523-592）は、慧光の孫弟子に当たる。《続高僧傳》に載っている。幼い頃より聡明人に勝り，13歳で僧思のもと剃度出家し，16歳で湛律師に随從して鄴都に入り法を学んだ，20歳で

昭玄大統法上（495～580）特設の具足戒を受け，昭玄都順法師を教授威儀師とし，慧光十大弟子を證戒師とし，当時榮譽とされた。慧遠は《十地経論疏》、《大涅槃経義記》、《大乗義章》など20部100余巻の著作を著述。硤石寺（現在山西晋城の青蓮寺）を開山した。北周軍が北斉を占領した時、慧遠は大胆に武帝の当面で滅佛政策を批判した。三年後、武帝が崩御した。慧遠は嵩山少林寺の住職を勤めていた。

以上を証として、①小南海（僧稠、方法師）、④中皇山（唐邕趙姫）、⑨南響堂寺二号窟（昭玄沙門統**定禪師**）、⑭小南海霊泉寺（道凭と霊裕）、⑮北響堂（僧稠が住持した大石窟寺）、水浴寺（昭玄大統**定禪師**）などのある鄴都周邊は、僧稠僧団の主要活動エリアであったとみることができる。

現在に残る鄴都周辺20万文字ほどの北斉刻経は、当初は更に多かっただろう。また④中皇山刻経は１ヵ所で13.74万文字。しかも書法が上品で、複数の能筆家の手になる。異民族文化が濃い北朝において、当時の教育レベルなど考えると、多くの高僧達は写経に大変熱心だったと思う。しかし鄴都周辺の北斉刻経はほとんど署名がない。その原因は下記のような事柄が反映していよう。

(1) 僧稠僧団は史書に載る高僧が多く、「捨身精神」をもって「法身舍利」である石窟と石刻経を造ったのであろう。

(2) 石窟と石刻経は、当時の経済力や石刻技術水準上、長期にわたる大工事となった。短命な北斉王朝は滅佛運動を推進する北周に攻撃され、多くが未完成のままで、題記が完成しなかった。

２．僧安道壹（安法師）僧団

現在も魯中山脈の泰山の西支脈の洪頂山あたりに、北斉石刻経遺跡が多く残されている。そこから東へ泰山主峰、南へ徂徠山、魯南山脈の鉄山なども超えて徐州の雲龍山まで（図15）が僧安道壹僧団の活躍した地域である。

北響堂山（刻経洞の上、図10左１）と南響堂山（山門の100m 外の崖、図10．左２）の二か所の双鈎書の佛号「大空王佛」は注目すべき、僧安道壹僧団の石刻経事業の濫觴だと思うが、その後は現在の山東省が僧安道壹僧団の主要な刻経活動地域である。⑧平陰県二鼓山の石道に「僧安一」、⑩洪頂山に「僧安」と三ヵ所の「僧安道壹」、⑬嶧山の五華峰摩崖の東側の下部に「僧安」、㉑尖山に「僧安」と二ヵ所の「僧安道壹」、㉒鉄山《石頌》に「斉大沙門安法師」、その右下の題記に「東嶺僧安道壹署経」とある。「東嶺」は都の「鄴」から見て東方の山々を中心に活動する僧安道壹を示している可能性があり、同時に彼が「譽自蔥嶺以東，禪学之最」と言われた僧稠を意識し、自らの主導する石刻経事業に自負心を抱きこの署名としたようにも思える。また「署経」はただ経典を岩石に書く「写経」とは違う。２世紀ごろ外来僧である支娄迦

讖が訳した《文殊師利問菩薩署経》にある「佛言如佛境界，其署如是。其署者，如佛境界等無異，諸法皆从是署如敕心瑞応」から借りた言葉であろう。つまり署経は人を戒め導く布教（敕心瑞応）の「法身舎利」を作るために行われたのである。とくに僧安道壹僧団が参与した石刻経はユニークな表現が多く、「署経」僧が岩石に「筆」で写経した後は、「法師」という指導者の立場で石刻チーム（とくに文盲が多い北斉時代）と共同に作らなければならない。北斉時代は岩石書写や石刻技術あるいは経済や交通条件などに制限があり、とくに山東省あたりは石窟内でなく、露天下で風雨にさらされ、しかも刻みにくい花崗岩も多数あり、ユニークな大文字も多く、制作時間がかかる。僧安道壹がどんなに個人能力があっても一人で「署経」を完成することは無理であり、「法身舎利」を立派に創るため、「署経」者も石工も工夫に工夫を重ねて共同作業しなければ布教が始まらない。かように署経とは、石刻経文化を定義する重大概念である。

（1）鉄山摩崖

刻経の第一期は㉒鉄山のふもとの石碑形の『大集経』である。経文の930字（字径50～70㎝）が完成した武平七年（576）末に北周軍襲来によって作業が中断された。この時、石碑の冠にあたる「碑額」にあしらった「盤竜」と『大集経』３字（字径は３～４ m）、および台座にあたる「碑蚨」にあしらった「双亀」」は未完成である。石碑の形式に不可欠な冠にあたる「碑首」には欠落箇所があり、台座にあたる「碑蚨」にあしらった「双亀」は２匹の内の一匹の彫刻作業が始まっていただけである。にもかかわらず、「跋」にあたる偈文の『石頌』を造るはずがない。また『石頌』本文からもそれは言え、例えば北斉王朝であれば、敬意を払って「大斉」あるいは「皇斉」と年号を書くべきが、失敬罪にあたる単字「斉」を使ったのである。それに研究者の中には、『石頌』は『大集経』の石碑形の中軸線からずれていることから、両者の工期は異なるとみている（図17）。

第二期着工は『石頌』によると「皇周大象元年（579）歳大淵献八月庚申朔十七日丙子」である。この時、旧北斉の僧安道壹僧団と佛弟子の匡喆達は佛教再興を努力しようと呼びかけたのである。またその中に「□釋迦本演之世、工時十二**那由他**（梵語 nayuta　計算できないほど多数、数学ならば10の60乗）、衆生發菩提心、天子得無生法忍」とある。『大集経』では、釈迦牟尼が成佛前に十二の那由他の時をかけ修行した結果、菩薩位に就き、その後に燃灯佛の接引で成佛したことに触れている。『妙法蓮華経』の「我成佛已来、復過於此百千万億那由他阿僧祇（梵語 asajkhya　無限数の長い時節）刼。自従是来、我常在此娑婆世界説法教化」などと関係するであろう。『石頌』は北周滅佛運動、つまり「大刼」の法難に遭った後、「衆生發菩提心」を自覚し、惨殺された北斉皇帝が「得無生法忍」の境地に至り成佛したこと、また長期戦乱で生じた多くの遭難者を追悼することを暗喩している。故に（もと）斉安法師「署経」の隣に、この偈文を作ったのである。『石頌』題額２字の字径は約90㎝、頌文は614字、字径は約22m。

この中で、僧安道壹によって書かれた『大集経』経文の書法の素晴らしさを讃頌している。それだけではなく、「頌」には偈陀（梵文：Gatha）を簡略した偈の意味があり、南北朝に流行した「駢儷文」を踏まえ、文章法を整え、対句を作り、字音を漢文韻音である「平仄」に合わせ、末字に韻を踏み、朗々たる音節感に富み、有名な「建安七子」の曹植（曹魏時代）が作った梵唄『声明』のような文体である。北朝文化人は「無名」や「超然」たる風流を追求した。このような自賛文を僧安道壹自ら述べ書くことがはたしてありえようか。

（2）雲翠山

㉗雲翠山は海抜474.9m、連綿たる泰山々脈の支脈の一つで、山頂の十数 m の絶壁下部に「大空王佛」（図10．右下）140x30cm が刻まれている。年号は無い。「王」字（図10．最右下の拡大写真）の縦画の上端が第一画めの横画の中へ挿入する表現や、「佛」字の最終画を長く伸ばすのは僧安道壹の独特な「経変書」。また⑧二鼓山「大空王佛」題記に見える「比丘僧太」がここにも刻まれている。その右方に高さ10m ほどの崖の隙間があり、ここをよじ登り、約60x70㎝楕円形の穴をくぐりけると、頂上に石積み製の小さな小屋が五棟ある。地元のガイドブックによれば東漢時代に豪族の避難所として作られたと、載っている。廃佛毀釈と戦乱（576年末、577年始）の最中、僧安道壹僧団の避難した所（洪頂山への山道はただ10数㎞）ではなかろうか。

（3）史上の僧安道壹

北魏菩提流支が訳出した《佛名經》十二巻は一万一千九十三の佛名を載せ、「若有衆生欲求佛道者、不聞此佛名終不得成佛」と述べている。《法華経・授学無学人記品》は「空王佛」に触れ、「諸善男子我與阿難等於**空王佛**所同時発阿耨多羅三藐三菩提心」と述べる。しかし佛教経典にも佛教に関する文物遺存にも、「大空王佛」は見あたらない。これは確かに僧安道壹僧団によって作られた独特な佛名である。

北朝佛教は伝統的に朝廷に依存してきたが、北魏の僧法果（生年、籍貫不詳，居趙郡）は、「太祖好叡明道，即当今如来，沙門宜応尽礼……我非拜天子，乃礼佛也」と、天子を佛と見做した。従って「大空王佛」の「王」は高王と高斉王朝のことだと考えられる。そのようなイデオロギーに支えられた僧安道壹僧団は、皇帝すなわち佛であることを表明する名として佛号「大空王佛」を作ったのではなかろうか。

正史にも佛教史にも、僧安道壹に明確に言及する記事は無い。それどころか北斉を滅ぼした隋朝において李大師と李延寿がまとめた《北史》や、唐朝において李百薬がまとめた《北斉書》などの正史は、儒教正統の立場に立ち、北斉を「禽獣王朝」と蔑み描写している。関連記事が多数ある。ここに私は、政治に付着した僧安道壹を称揚しない隋唐のイデオロギーを認める。さらに「署経僧安道壹」は石刻経事業推進の立役者とはいえ、僧稠、慧光、慧遠などのような高僧ではない。また「大空王佛」は南方の慧遠（334年～416年）が主張した「沙門不敬王者論」

の伝統に反する。このため、《高僧傳》、《續高僧傳》などの佛教史籍はおしなべて僧安道壹を高僧扱いしなかったのではないか。

前述したように、黄易が古代書道芸術の石刻を踏査して以來、多くの学者が1980年代末まで鉄山に記された署名「東嶺僧安道壹」について調査している。日本の学者清源実門は、「《續高僧傳》には安道壹を想起させる名として、釋道安、釋僧安などがあるが確定できない。安世高、安玄のように安息国に生まれた僧人であろうか。」と述べた。[21]

「釋僧安」という名が《續高僧傳》巻二十七の冒頭の《斉趙州頭陀沙門釋僧安傳》に立伝されている。「釋僧安。不知何人。戒業精苦坐禪講解。時號多能。**齊文宣時。在王屋山。聚徒二十許人講涅槃。**始發題有雌雉。來座側伏聽。僧若食時出外飲啄。日晩上講依時赴集。三卷未了遂絶不至。衆咸怪之。安曰。雉今生人道。不須怪也。武平四年。安領徒至越州行頭陀。忽云。往年雌雉應生在此。徑至一家。遙喚雌雉。一女走出。如舊相識。禮拜歌喜。女父母異之。引入設食。安曰。此女何故名雌雉耶。答曰。見其初生髮如雉毛。既是女故名雌雉也。安大笑為述本緣。女聞涕泣。苦求出家。二親欣然許之。為講涅槃。聞便領解一無遺漏。至後三卷。茫然不解。于時始年十四。便就講說。遠近咸聽。歎其宿習。因斯躬勸。從學者衆矣。」と。確かに「僧安道壹」刻経事業に《涅槃経》が頻出する。また西域から来た名僧佛図澄（232～348）の弟子である釋道安（312～385）以来、僧侶の姓はみな「釋」にすべきだと提唱されたことを鑑みれば、「僧安」は「釋僧安」とも考え得るが、武平四年（573）に「釈僧安」は越州（現在浙江省紹興市あたり）で行脚中だったわけで断定できない。

⑩洪頂山（**図６**．右上）に「僧安道壹／大沙門僧安□名道壹廣大鄉□／□里人也□□三世□若積石之／千峰□□碩□崆峒之萬嶺」という記載がある。洛陽の東南約50kmほど、連綿たる山々を越えると汝州の崆峒山[22]がある。ここから太行山の南支脈である王屋山まで約150kmである。

⑩洪頂山を中心とする半径20kmエリアは僧安道壹僧団刻経遺跡が一番集中している（図14）。周辺は曹魏時代（220-266）の「東阿国」に属し、「建安七賢」の一人である曹植が当地の小魚山々麓の某寺院で「声明」なる佛教音楽を始めた名所でもあり、佛教の伝統が生きている。そして現在も「僧安道壹」、「僧安」、「安法師」の名は当初の「金石難滅」という発願通り、長年風雨に晒されながらも堅牢に伝世して現代に真の古代史を明示しようとしている。

（4）僧安道壹僧団の僧侶たち

⑩洪頂山の南崖にある《沙門釋法洪題記》に「沙門釋法洪娑婆国士閻浮□落天竺人／也」と、明確に記されている。⑰徂徠山光華寺に「維那慧遊」が居た。「維那」とは姚秦時代に全国の佛教諸般事務を司るために始まった中央僧官制度下の階級名である。北魏僧官制度に引き継がれ、「沙門統」が高級僧官、「維那」は副長官である。地方政権下に「僧曹」を設け、「僧統」が長官、「維那」[23]が副長官である。東魏・西魏は共に北魏の正統と自認し、東魏の後を北斉が引き継

いだ。徂徠山の「維那慧遊」が正式な僧官だったかどうかは別にして、当地の名僧だったことは間違いない。また⑧二鼓山に「比丘**僧太**、道顒」、㉓崗山摩崖に「比丘惠暉」、「比丘道成、僧岸」、㉗雲翠山摩崖に「比丘寶陵／比丘智□／比丘**僧太**／比丘道□／比丘僧令」などが居た。

更に⑪金口壩《阿彌陀佛座沙丘題記》（図11）に「優婆夷比丘尼」とある。在家女性信者や尼僧も佛教石刻運動に参与した。

僧安道壹僧団の刻経では僧侶の法号が多数刻まれた。しかし《北史》、《高僧伝》、《続高僧伝》などの史籍に見当たらない。ただ彼らのスポンサーだった名門豪族だけは史籍によく出てくる。

３．僧稠僧団と僧安道壹僧団の関連性

（1）佛号「大空王佛」の存在

少林寺第二任住職の僧稠は僧安道壹よりはるかに高い名分である。天保二年（551）に文宣帝から国師として招聘され、553年に皇室寺院（現在の北響堂石窟）「大石窟寺主」に兼任された。北響堂石窟の造営計画は僧稠が采配を握ったのであり、この時の僧安道壹の身分は低く、石窟の上方高さ６ｍほどの一番高所に、縦約２ｍの双鈎書「大空王佛」を刻することは不可能であろう。しかも北朝時代の石窟造営工程が上層から下方に向かって彫り進めるのが常識であることを考慮すると、「大空王佛」は僧稠赴任前に刻まれたと推定される。⑮北響堂山の「大空王佛」は僧安道壹の石刻の開始と思われ、この後、彼は滏口陘を出て、高僧の多い鄴都を経て、東へ行脚し、ようやく⑩洪頂山を中心に刻経事業を遂行したように思われる。

⑮北響堂山の「大空王佛」の次は、⑨南響堂石窟の東南方の摩崖に刻まれた双鈎「大空王佛」であろう。この四字に隣接する佛龕に「河清二（？）年」（563？）の年号があり、南響堂石窟よりずいぶん前に作られたことを示唆しているようだ。響堂山の「大空王佛」は二つとも簡略に刻まれた。比べれば、⑧二鼓山と⑩洪頂山の「大空王佛」より初期的なイメージが呈されている。

北響堂山も南響堂山もすべて太行山山脈の支脈であり、北響堂山から鄴都へ行くには「太行八陘」（拙文八．５参照）の滏口陘を通らなければならない。滏山麓、滏陽河に挟まれた唯一の山道である。

南響堂山霊化寺は天統元年（565）比丘慧義が滏山の南麓と滏陽河の北岸に創建した。武平四年（573）に唐邕の政敵「顕貴大丞相」兼「淮陰王」高阿那肱が霊化寺に出資して、南響堂山石窟が起工され、「開窟鑿像」及び石刻経を始めたのである。

北朝から隋朝まで鄴都の東行政区は済州であった。旧済州は碻磝（現在の山東省茌平県西南部）という城を中心としたが、現在の洪範鎮（一億人口を越えた山東省の省都である済南市に所属する）は旧済州の東端に位置する。その時代に太行山々脈南端の王屋山麓より東へ済水という川が流れていた（2100年前の前漢時代に済水の南ほとりの町であることから、済南と名付

けられた。唐以後、黄河氾濫のために現在の東平までの上流が砂土に塞がれ、次第に東平湖が形成され、済水は消え、その下流部分が清河と改称された。1982年11月、洪範鎮で道路工事中、地下1.6m から「大隋皇帝舎利塔石函」が出土して、そこが崇梵寺遺跡であることが解った。《北斉書・蘇瓊伝》に「道人道研為**済州沙門統**、資産巨富……」と載り、《続高僧伝》二十六巻に隋文帝が全国113州の名刹に佛舎利を賜った記録に「**済州崇梵寺**」が載っている。清代の「東阿県誌」よれば、唐時代に洪水の土砂に埋められ、近くの書院東山の麓に移されて洪福寺と改称された。現在の洪範（Hongfan）鎮という地名は崇梵（Chongfan）寺と洪福寺（Hongfu）が語源だった可能性がある。

計17條ある「大空王佛」の内、洪範鎮周辺には10條が集まる。⑧二鼓山、㉗雲翠山、㉘洪範鎮東山（２條）、⑩洪頂山（６條）である。

年号のある「大空王佛」最後の作品は北周大象二年（580）の㉓崗山摩崖である。その四文字は楷書に近く、浅く刻まれ、大きさ102x29cm である。

また双鈎書「大空王佛」は総体的に、「王」字のサイズが他の文字より明確に小さいように思う。ここから図９・10などのように、「大空王佛」中の「王」が大振りになるほか、手、足、髪型、その他いろいろな表現が出てくるようだ。僧安道壹僧団が作出した独特な佛号「大空王佛」は、石に刻む場合にも宣教的な意味を意識している。

（2）僧稠僧団と僧安道壹僧団に共通する人物と名称

④中皇山にある趙妃の母が作った発願文に「亡女趙妃」。⑮北響堂の唐邕が作った「唐邕刻経碑」の発願文に、佛経を「盡勤名山」。㉑尖山刻経の経主署名にある「唐邕妃趙」。

僧稠と僧安道壹の名前に「僧」がつく共通性、また①小南海では僧稠を「**稠法師**」、㉒鉄山《石頌》では僧安道壹を「**安法師**」と言う。

七．石刻技術と特殊書法の問題

秦朝（BC.221-BC.207）に始皇帝が文字を統一し、その後の王朝も漢字の権威性を保ちつつ標準化を厳格に実行した。北朝は本来文字を持たない異民族政権であったが、漢民族の文化人を官僚に起用して文書行政を行った。多民族社会のせいもあってか、この数百年間に多くの異体字、簡体字、俗字が公認された。たとえば、《魏書》に「太武帝始光二年（425）三月初造新字千余」とある。それに「通假字」（当て字）も勝手に使われていた。前述の「**太**山羊氏」と「**泰**山羊氏」はその例の一つである。

書体沿革史では、北斉は隷書と楷書の併用期にあたるが、篆書体もまま見え、㉒鉄山摩崖の「幻」（図17．右上）という文字が篆書に変えることで「幻、変わる、惑わす、手品」などの意味を象形的に象徴させ、無常の世間を表現しているように思う。

北斉刻経運動が盛んだった地域には、伝統的に秦琅琊台刻石、秦泰山刻石、秦嶧山刻石、曲

阜孔廟漢乙瑛碑、禮器碑、泰山岱廟張遷碑、鄒城萊子侯刻石など秦漢時代の有名な書法作品や、漢畫像石「沂南北寨漢墓佛像」、滕州「六牙白象」、連雲港孔望山（花崗岩）摩崖佛像、曲陽様式佛像、青州様式佛像など素晴らしい造形作品が存在する。代々石刻技術が発達した所である。

１．北斉石刻技術の由来

後漢末に冶金技術「灌鋼」が発明され、石刻に使う鏨の性能が格段に上がり、南北朝期に各地へ広まった。[24] さらに東魏から北斉時代に綦毋懐文がその灌鋼製法をさらに発達させた。鍛造過程で焼き入れ、焼き戻しなどを行う新しい熱処理技術であった。綦毋懐文は襄国沙河（現在は邢台市の沙河）出身で、綦毋（qi wu）という復姓である。この源流の一つは姫姓の末裔とされる春秋時代の晋国大夫綦毋張、もう一つは漢末に匈奴の綦毋・伊牙斯民族部落が帰化した後に名乗った姓である。《北斉書・方伎傳》に再開発された灌鋼製法について次のように載っている。「懐文造宿鉄刀，其法燒生鉄精，以重柔鋌，数宿則成鋼。以柔鉄為刀脊，浴以五牲之溺，淬以五牲之脂，斬甲過三十劄」と。花崗岩が刻まれた鑿の性能は国家標準の45号炭鋼に近いと思われる。

光州刺史の鄭道昭が北魏永平四年（511年）作った萊州雲峰山《鄭文公下碑》は、花崗岩摩崖に彫られた有名書法作品である。彼の父親の兗州刺史の鄭羲[25]を讃頌している。その書は起筆が角張り、収筆も尖ったところがあり、曲線的な転折表現（図19）も特徴的で、書法史では画期的な魏碑体と言われる。鄭道昭は516年に亡くなるまで莱州雲峰山、平度天柱山、萊州大基山、青州玲瓏山に多数の摩崖石刻を造営した。

冶金技術が進歩し、堅く粒子の粗い花崗岩を刻める鏨が普及した事で、この書法が克明に再現できたのだろう。著名な文学者である楊守敬は、《評碑記》に鄭道昭の摩崖を次のように評価している。「所作皆有矩度，筆法不類漢人而筆意絶佳。以其意作楷書尤妙，褚河南、顔魯公皆此法也」と。ちなみに彼は光緒年間に日本駐在清国外交官を務めた時、日本の文化人に鄭道昭の書を大いに紹介して有名になった。

乾明元年（560）鄭道昭の息子の鄭述祖も兗州刺史に着任した。彼の**《夫子廟碑》**が曲阜孔子廟「漢魏石刻芸術陳列館」に展示されている。当時、光州や兗州の山々で鄭氏摩崖石刻工人集団が作業していた。乾明元年と言えば僧安道壹僧団が花崗岩摩崖に刻経するようになった初期にあたり、この集団に隣接する地域で僧安道壹刻経僧団が作業したのである。両集団の石工や、その鍛冶技術には交流や伝承関係があると思われる。そして北斉の信州刺史となった綦毋懐文が再開発した灌鋼製法で作った鏨を使ったからこそ、泰山・鉄山のような堅牢な花崗岩摩崖に大規模な刻経事業を展開できたと考える。大斉河清三年（564）五月廿四日，鄭述祖は光州刺史在任中に萊州で《重登雲峰山》を刻し、また「大斉天統元年（565）歳次乙酉五月壬午朔十八日己亥刊」に《天柱山銘》を作った。

近年、雲岡石窟６号窟の東壁に「道昭」題記が発現された。大同博物館のパネル（図20）には「雲岡20号窟《比丘尼曇媚題記》は魏碑体であり、鄭道昭の書である」と言う。しかし私はこれに賛同しかねる。その理由の一つは、僧侶の法号ではよく「道」が使われることから、この道昭は僧侶の可能性があること。二つめは、平城（大同）から洛陽への遷都は太和十八年（494）で、この四年後に鄭道昭がはるばる遠方の大同に行った証拠がない。三つめは、図19と図20（パネル最右の太和廿二年石刻の拓本）では「以」と「之」などの筆跡が違うこと。四つめは、両者が魏碑体で書かれていると言っても、石刻文字は様々な要因によりそれぞれの特徴を持っている。例えば、甘粛省涇川県の《南石窟寺之碑》は《鄭文公下碑》の１年前、北魏永平三年（510）四月の制作だが、石質は刻みやすい砂岩製であり、筆者も異なる。そして大同も砂岩であり、最先端の鏨を使わない工人集団でも彫れる。大同の石刻チームと鄭道昭のチームは別の集団だろう。以上の理由から、魏碑体を作った名門鄭氏に所属する摩崖石刻チームと鄭道昭は大同には行っていないと考える。

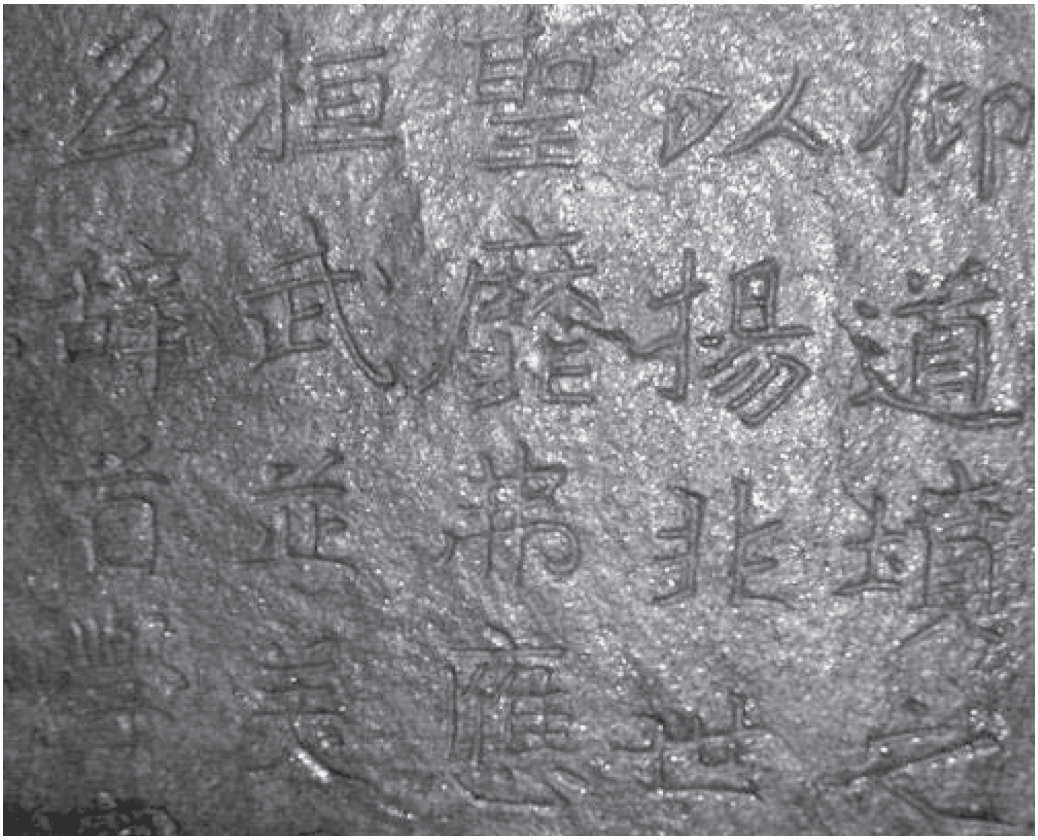


図19. 鄭道昭《鄭文公下碑》局部（筆者撮影）

図20．大同博物館に展示されている「鄭道昭與平城魏碑」（筆者撮影）

2.「経変書」―独特な書道表現

北斉石刻経の書法は、室内できちんと座って紙や絹布あるいは竹簡木牘に書くのと異なる。石窟と露天環境下で、足場が悪く険しい山崖に写経し鑿で刻する工程である。これを生かして創造的に字体を変形し、芸術効果を感じさせるものもある。不思議なことであるが、誇張した様々な表現も少なくない。一般常識で解釈できない書体である。日本学者の北島信一先生は、それが佛教画の一類である「経変画」を活用した「経変書」であると指摘した[26]。例えば②水牛山白石寺《文殊般若》刻経碑の上部の経名「文殊般若」（図７）、⑥平陰二鼓山の「大空王佛」（**図９**）の「空」字に表現された「佛足」模様、⑩洪頂山の「大空王佛」（**図10**．中）の「佛」などの上部に、燃焼する「光明火焔」のような手形が見えるなどである。この特殊な手形は、闇の中で苦難にもがく者に道を照らして教える「佛」、あるいは燃燈佛に出会った王子が、自分の髪を雨でぬかるんだ道に敷いて佛を歩かせたところ、「汝于来世、当得作佛、号釈迦牟尼」と授記を授かったという「燃燈佛授記」物語（**図21**．左上、アメリカ Metropolitan Museum of Art メトロポリタン博物館蔵石刻）などを想起させる。おそらく宣教のため「経変書」を採用したのである。また図10．最右下の㉗雲翠山「大空王佛」の「王」字の縦画の上端を横画へ挿入する表現は、洪頂山「大空王佛」の注意深く平行線を刻んだ表現と何らかの関連性があるかもしれない（図21）。

図21．経変書の典型（筆者撮影）

３．花崗岩彫刻の定量化を試みる

現在のような精密工作機器（CNC の人工ダイヤモンドの刃物）がまだない時代、摩崖に文字を刻んだのは鋼製鏨である。それには下記の３種類があった。

(1) 合金鋼を刃に溶接した鏨。

(2) マンガン鋼鏨。

(3) 中華人民共和国国家標準（GB/T699-1999）45号炭鋼鏨。

熟練した鍛造工が (2) と (3) を携帯して現場作業を行い、常に鍛造、焼き入れ、焼き戻しをして鏨の切れ味を保たなければ作業がスムーズに進まない。筆者が把握した資料から推測するに、北斉石刻経に使われた鏨の材料は「灌鋼」であり、性能は (3) に相当する。

筆者は、2016年８月に尖山摩崖刻経（現在消失）の再現復刻が進められていた鴻山の現場で、石工らに協力を仰ぎ確かめてみた。彼らは (1) タイプの鏨を使っていた。その話では、「鏨を敲くこと数十回で刃先が摩耗するため、砥石車で磨かなければならない。一本の合金鏨で50センチ四方ほどの字をせいぜい二文字しか刻めない。」とのことであった。

2017年３月７日、北斉当時の状況を究明するため、鄒城市博物館長の胡新立先生に協力していただき、尖山摩崖復原工事に参加した二人の石工を招聘して花崗岩彫刻の定量化テストをした。（図22）

図22．45号炭鋼鏨を使い花崗岩彫刻定量化テスト中の石工の杜洪軍氏（筆者撮影）

石工：腕のいい杜洪軍氏（曲阜武家村出身、以前に曲阜孔子廟に専属した石工集団の五代目）と部下の孟氏の二人。（両者の技能は異なり、効率に２倍ほど差がある）。

場所：尖山刻経がかつて存在した摩崖の上方約60m の地点。傾斜角度約20° の花崗岩。

工具：杜洪軍氏の用意した40本の45号炭鋼鏨（筆者は若い頃に工程兵であった。45号炭鋼鏨を使った経験がある）。

行程：文字を書いた紙を岩に貼り、赤色で岩石面に写す。次に文字の輪郭に沿って鏨で「双鈎」文字を刻む。

「双鈎」に沿って外から内へ少しずつ刻みながら彫り込んでゆく。大方彫り上げたら次に、筆画の底を円滑にするため、ノミの後端を使って敲き磨く。

結果：「山」字の第３画めの縦画を彫り、できた溝に計量カップで水を入れて刻字した体積を計測すると120cc であった。彫るのに１時間かかり、14本の鏨の刃が鈍化した。

また杜氏は次のように指摘する。

(1) 昔は道具の性能が現在より低いが、工人は苦労に堪えた。

(2) 炭鋼のような鏨を使う場合、三人の石工に一組の鍛造工（鍛造、焼き入れ）が必要。鍛造工が鏨を即時手入れ可能なことが、仕事の進展を左右する。

(3) 一人の石工が大字を１字刻むのに、筆画の簡単な場合で一日、複雑な場合で二日必要。

(4) 野外の摩崖刻経工事は、１年の内、旧暦２月から10月までの九９ヶ月間に限定される。しかも雨などの悪天候を避けると、せいぜい200日間ほどであろう。

(5) 大面積の摩崖刻経の場合、書丹する時の塗料として糯米粉のお粥に生石灰の粉を入れたものが使いがってがよい。これを大筆に付けて岩に直接書くのが１方法である。これは表面の粗い摩崖に適し、コストも安い。もちろん磨いた岩石表面に小さな文字を書く場合は、朱砂を使えば綺麗な作品が書ける。

以上の結果からも㉒鉄山摩崖刻経は二期に渡って作業されたと考えられる。

八、北斉石刻経成立の歴史的背景

北斉石刻経が成立した時期は、中国における長大な佛教史においてはきわめて短期的な一現象であったといえるかもしれない。しかし、実際に今日に残る多くの石刻経の痕跡には、その背景に存在する多くの歴史的文化現象の影響を推測させる。それは佛教史の領域だけでなく、政治、経済、社会、民族、あるいは他宗教などの諸文化をも総合しなければその背景を推測することは不可能であろう。

以下は、筆者のきわめて雑駁な短見の議論ではあるが、諸学の笑覧に供しご批判を仰ぎたいと思う。

１．石刻経の濫觴

敦煌博物館展示の北凉（428年前后）小石塔刻経《増一阿含経・結禁品》（図23）は石刻経の濫觴である。次が北魏永平元年（508）の河南省博愛県青天河摩崖《観世音菩薩普門品二十四》、北魏永安二年（529）の山西省和順県沙峪摩崖《観世音菩薩普門品二十四》である。また山東省済南市黄石崖の《観音経》と《无常経偈》は記年が無いが、近くに北魏孝明帝正光四年（523）、孝昌三年（527）、建義元年（528）、東魏元象二年（539）、興和二年（540）、北宋宣和三年（1121）などの銘が11件あることなどから、一般に北魏と考えられている。私の30数年の現場調査により知られたことは、**北斉以前の**石刻佛経はごく少ないこと。また総じて刻経の文字數が少く、刻字の深度が浅いことである。この目で見、この肌で感じたことである。

北斉の後のものとして河北省曲陽県八会寺石刻経、北京房山雲居寺石刻経、安陽靈泉寺石刻経、浙江省天台県国清寺石刻経、四川省安岳県臥佛院石刻経、重慶市大足石窟刻経、都江偃市靈岩寺石刻経、泉州開元寺石刻経、昆明市博物館に展示されている大理国地蔵寺梵文「佛頂尊勝陀羅尼経」などは重要な遺物である。

このうち北京房山雲居寺石刻経は隋の静琬法師が開窟刻経事業を開創し、清朝康熙年間まで各種の石経板が多数刻まれた。ここは刻経事業が最も長期継続し、石刻経の中で最大規模の大宝庫である。1956年４月に山上の石窟に蔵されていた4196枚の石経板を採拓、11月に石窟に再び戻したが、防水対策を取っていないため、保存状態が杞憂される。1957年８月に南塔遺跡で遼代から金代に渡る石経板10082枚が発掘され、こちらは1999年９月９日から現代的地下収蔵庫に収蔵されている。

図23．北涼小石塔（筆者撮影）

２．北斉の政治・経済

《北史》、《北斉書》などの史籍文献（漢代以後はほとんどが儒家本位の立場）は、北斉をマイナス評価する記述が多い。だが北斉最盛期の天保年間前半は、陳と北周と三者鼎立（図16）し、北に庫莫奚を打撃し、東北に契丹を追い、西北に柔然や山胡（屬匈奴族）を破るなど、シルクロードを重開し（下記の図24は、山東省青州博物館に展示されている北斉画像石で、ユーラシア大陸で東西交流が生き生きと促進された記録である）、南に淮南を取って勢力を長江まで伸ばし、農業、塩鉄業、瓷器製造業なども相当発達した。これらのことは《北斉書》巻四「文宣高洋」に忠実に評価されている。またこの時代に著名律学家の封述、崔暹、李洋、魏收などを重用して中国法制を多数創新し、河清三年（564）に《北斉律》を公布した。その「重罪十条」は、後に有名となった「十悪」の起源である。刑罰に死、流、徒、杖、鞭の五刑体系を定め，執行標準を細分化して隋唐の律典の見本となるなど、見るべき政策・文化的成果を多数上げていた。

天保十年（559）十月、高洋が崩御し、国運は寂れていった。皇族貴族の勝手な役職任命が相次ぎ、政治運営の矛盾が露見し、政変が多発した。年号が頻繁に変更され、乾明－皇建（560年）－太寧（561年）－河清（562～564年）と移り、565年に武成帝が禅譲、後主高緯が即位、年号は天統（565～569年）となり、更に武平（570～576年）と続く。高緯は吃音があり、終日琵琶を弾き「無愁曲」を歌い、和する侍者が数百人。無駄遣いがひどく、不必要な拡張工事や、一晩に１万盆の油を灯した。「貧児村」を作り自らぼろぼろの衣を着てそこで乞食をし、道楽に明け暮れた。

図24．武平二年（571）製画像石（石灰岩）八枚中の三枚。青州出身の青年が国際貿易の舞台で活躍したスタイル。左は「象に乗せた輿」の国、砂漠・山の向こうに中国式の建物。中は（粟特人？ローマ人？）との商談。右はシルクロードで東奔西走しているキャラバン隊。（筆者撮影）

武平三年（572）七月、名将の斛律光家族一門が冤罪で殺害された。⑱嶧山刻経の「経主」は、斛律光の息子である斛律武都の家人である。

武平四年（573）、蘭陵王の高長恭が毒酒によって殺害された。

武平七年（576）十月、北周武帝は14万５千人の軍隊（その中の将軍の一人が楊堅で、４年後に成立した隋王朝初代皇帝文帝）を率い北斉の晋州に侵攻した。前線より急を告げる駅馬が朝から昼にかけ３回も後主高緯のもとに参じたが、妃たちと狩猟に夢中で無視した。十一月になってようやく応戦に向かったが、２か月間に幾度も連敗し、鄴都に撤退した。この危機に瀕して一将軍が激越のあまり涙を流しながら、高緯に軍勢を励ますよう懇願した。これに応じた高緯だったが、現場で言うことを忘れてしまい、口が吃って自ら大笑してしまった。将校や兵士は皆怒り、君主にして尚これなり。我々は何のために懸命に戦ったのか、と落胆した。翌年一月、高緯と幼主の高恒が南の陳へ逃亡の途中、青州で北周軍に捕えられ、即刻惨殺されて北斉は滅ぼされた。そして北周は「皆複軍民，還歸編戸」という政策を実施し、北斉の三百万の僧尼（総人口の七分の一近い。寺院が擁する農家や職人なども入れると更にたいへんな数になる。）を還俗させた。

豊潤な土地に2000万の人口を擁した北斉は、痩せた土地に900万人が貧しく暮らす北周に滅ぼされた。原因は複雑であるが、礼佛に国力を消耗しすぎたこともその一つであろう。

３．ユーラシア大陸の民族移動と文化融合

㉟林旺石窟に北斉末と隋初の「秦風胡俗」に言及する碑文が残っている。「秦風」とはローマ、ペルシャ、ソグド（Sogdiana）の「風」（図25），「胡俗」は柔然（Rouran Khaganate）、突厥（Tukut peoples）、鮮卑の「俗」のことである。山東省青州博物館蔵品の北斉佛の袈裟に外域人（図34）が描かれ、山西省左権県高歓洞（図５）に西域風の洞窟やゾロアスター教絵画が描かれている。みな鮮明で生き生きと当時の「秦風胡俗」を伝える。《北斉書・恩倖伝》には「西域醜胡、龜茲雜伎，封王者接武，開府者比肩，非直獨守弄臣，且復多幹朝政 ..... 猶以波斯狗為儀同、郡君，分其幹祿。 又有何海及子洪珍，皆為王，尤為親要。 洪珍侮弄權勢，鬻獄賣官。 又有史醜多之徒胡小兒等數十，鹹能舞工歌，亦至儀同、開府、封王。 胡小兒等眼鼻深嶮，一無可用，非理愛好，排突朝貴，尤為人士之所疾惡。 」と。当文に記された民族差別は賛同し難いものがあるが、北斉の頃、西北諸胡族や北方鮮卑族が多数中原へ進出していたのである。

北斉は高斉とも言い、その皇族祖先の高歓は「北方六鎮」出身の胡化漢人という説がある。筆者は、「民族の属性は血統より文化である[27]」、と述べる陳寅恪先生の主張を支持したい。

山西省博物院展示の虞弘墓石刻（図26．石灰岩）や西安市博物館展示の安伽墓石刻（図27．石灰岩）は、胡人の商業活動、狩猟（図27．三枚画屏の中。北朝エリアに生存しないライオン）、日常生活及びゾロアスター教信仰などを反映している。

胡人である虞弘（533-592年）は，字は莫潘，北魏から隋にわたって官員を勤めた。初め柔然で仕官し、「莫賀弗」にまで昇任した、使者としてペルシャ、吐谷渾（Tuyuhn）などに派遣され、北斉では軽車將軍、直斉、直蕩正都督、射声校尉、涼州刺史，假儀同三司、遊撃將軍などの官職を務めた。北斉陥落後は北周において使持節、儀同大將軍、廣興県開国伯、領並代介三州郷団、検校薩保府などを歴任。ちなみに「薩保」はシェリア語の“saba”長者や、ペルシャ語の“Xsath-ra-pavan”首長の意味であり、本来はキャラバン組織の長を指す語であった[28]。北朝の「開府」制度では、薩保府は属官（幕僚）の任命権を持ち、地域の胡人事務を管理する官庁であった。

同時期の北周「同州薩保」安伽なる人物は、姑蔵昌松（今甘粛武威）に生まれ，父は「昭武九姓」のソグド人（図24）。北朝は門閥が強く出自を重視したため、墓誌銘には中原の主流社会との融和を目的に漢民族と同じ黄帝の子孫であることを主張して「先黄帝之苗裔，分族因居命氏，世済門風，代増家慶」と記入した。

古代王朝は国力増強のため、人口増加を図った。北斉は「近者悦，遠者来。」（論語より）の道理を良く踏まえ、北魏で外来民族優遇策として行われた「均田制」を継承したため、多数の「胡人」が移住した。邯鄲市水浴寺石窟（石灰岩）は武平五年（574）に作られ、その画像石（図28. 左）には、二人の僧侶が荷物を背負っ

図25. 粟特人を描いたレリーフ 敦煌博物館蔵（筆者撮影）

図26. 虞弘墓画像石（筆者撮影）

図27．下左は安伽墓「石棺床」。上は石棺床の三枚石屏。下右は墓室門上の石刻「火壇」で、外輪廓線も炎の形（鄭岩氏作成図）。（筆者撮影）

た六人の胡服男子を連れ、その後ろに胡人の家族が続く図が描かれている。同じ洞窟に北斉最高僧官の「**昭玄大統定禪師**」題記も見られる。（図28．右）

北斉のみならず北朝全般にわたり外来民族と異文化に刺激され、「隋唐盛世」の基礎を固めたのである。

図29は時代ごとのアジア、ヨーロパ、北アフリカの人流を示す。グローバル化は古代も盛んで、民族移動も文化交流も活発であった。紀元１－３世紀のクシャーナ朝になると、中央アジアのガンダーラ地方に佛伝故事の浮彫や礼佛のための単独佛龕が現れた。多くが彫刻しやすい堆積岩製である。ガンダーラ佛（図30）の特徴は、ガウンを掛けたローマ元老あるいは哲人の胴体部にギリシャ太陽神アポロの頭部を載せ、細部にインド偉人の徴章等を付けたもので、「ガ

図28. 邯鄲市峰峰礦区大社鎮西南にある水浴寺石窟内の摩崖壁画―倉本尚徳氏提供

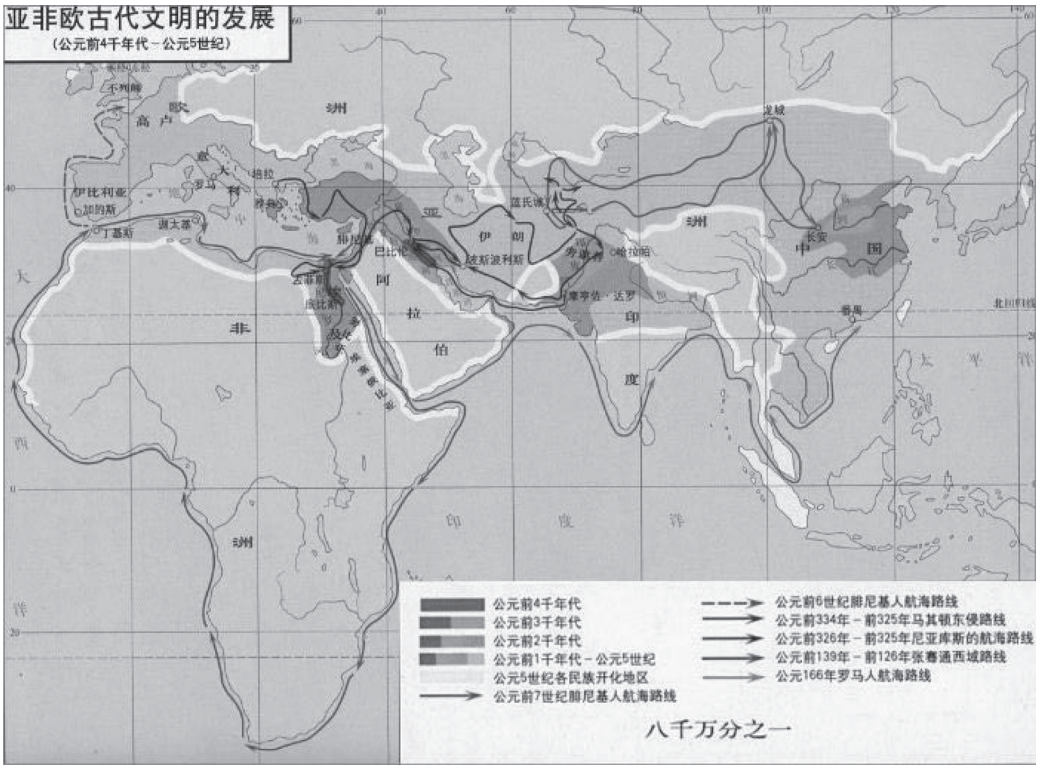


図29. 紀元前４千年代から紀元５世紀までのアジア・アフリカ・ヨーロッパにおける古代文明の動向（張芝聯　劉学栄　編「《世界历史地图集》北京・中国地図出版社、2002年４月刊、所収」P.14より引用）。

ウンを着る佛像」と言われた。佛像の顔は楕円、眉は屈曲して細長く、眼窩は深く，唇は薄く、額から一直線につながる鼻は高く，肉髻を持ち、髪は波状式、体の後ろの光背は素朴である。通肩式袈裟のひだは深く、印相や座り方は一定している。中国内博物館では旅順博物館が、ガンダーラ佛の展示数が最も多い。

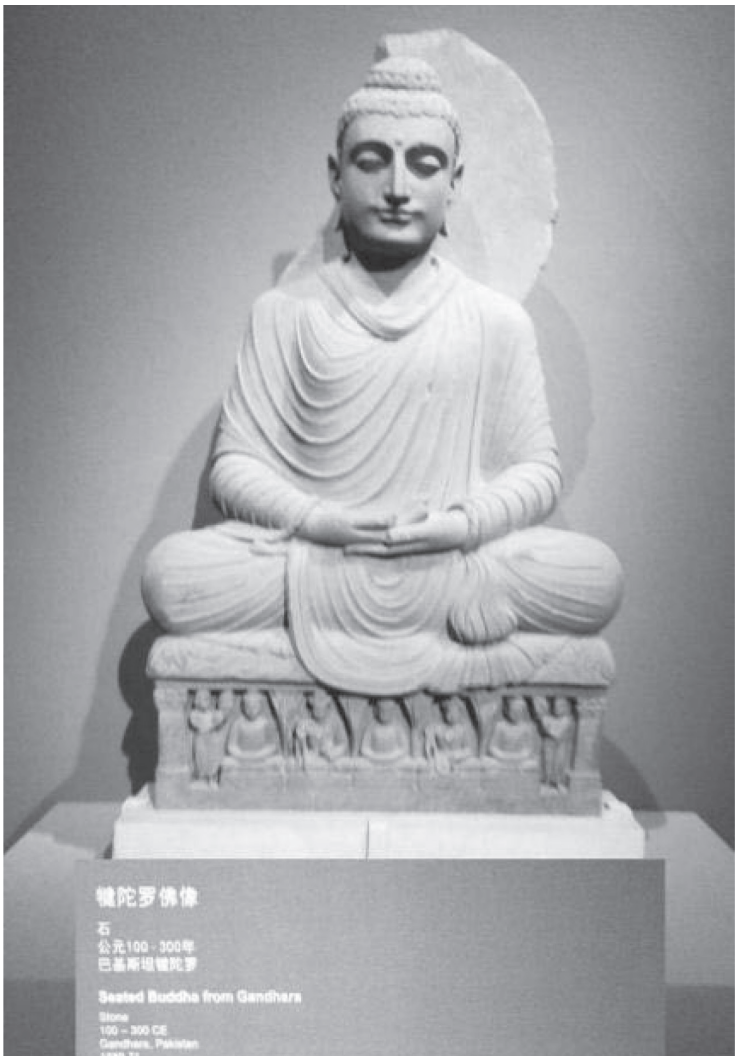


図30．ガンダーラ石佛。2017年５月中国国家博物館
「大英博物館蔵100件文物より見える世界史」展（筆者撮影）

北朝歴代皇帝は石窟、佛像などの造営の際、多くの僧団と各地の工匠を動員し、外来僧をも使った。例えば、雲岡石窟18号窟の大佛の後面に人身大の彫像がある。現地学者の周雪松先生の御教示によれば、「この西方的な顔だちの人物も当窟大佛の作者、周り数人の供養者も西方的である」（図31の中央下）。また、《魏書・釋老誌》にも「太安初、有師子国胡沙門邪奢遣多、浮陀難提等五人、奉佛像三、至京都。皆云、備歴西域諸国、見佛影及肉髻、外国諸王相承、咸遣工匠、摹写其容、莫能写及所造者、去十歩、視之炳然、轉近轉微」とある。また図31の右は13号窟「明窓」東側にある大佛龕両側にある諸神王で、ギリシャ神話のヘラクレス Heracles 勒（大力士）のイメージである。北朝では彫刻技術の進歩が目覚ましかった。中国初期石窟である

図31．左下は北斉佛。中は雲岡18号窟の大佛像、大佛の右上の円形写真は20号窟で「拱穹頂」式の天井部が見える。大佛右下の二枚の写真は人身大の頭部彫像で「西方的な顔だちの人物は当窟大佛の作者」と言われた、右の２列の「諸神王像」は雲岡13号窟の「明窓」にある。（筆者撮影）

雲岡石窟は彫りやすい砂岩で、風化しやすい。ところが河北省博物院に展示されている北斉天保七年（556）の佛像（図31左下）は石英成分が多く、より硬い「白石」製であって、やはり彫刻工芸レベルが進歩している。時代が百年ほど違うだけだが、顔つきも表情も中国化が著しく進んでいる。ちなみに雲岡石窟初期とされる北魏「曇曜五窟」（16～20号窟）の18号石窟などは「拱穹頂」式（遊牧民族の「穹廬」式テント）であるが、前述した「高歓洞」（図5）は宮殿式に変わったのである。

さらに北斉になると、皇室寺院である⑮北響堂「大石窟寺」のように、外見は古インドの「覆鉢塔頂」に中国風の木造宮殿を加えた前廊からなるが、窟内は大佛像を配した「中心柱」と、その周りを「甬道」で囲んだ「響堂山様式」と言われる様式に変わった。しかし、同じ北斉でありながら、②水牛山白石寺《文殊般若經》碑の上部の佛龕は外来的イメージが濃い。（図７）

20世紀前半のフランス人考古学者フーシェ（A.Foucher 1865～1952年）とイギリス人考古学者スタイン（A.Sstein 1862～1943年）は、中央アジア佛教が古代ギリシャの信仰や原始佛教と融合して成ったもので、ギリシャ的佛教だと指摘したが[29]、そのような西寄りの観點は不適切であろう。佛教の伝播過程において環地中海文明、古代ペルシャ文明、中国文明、東南アジア文明から豊富に栄養を吸収し、浩瀚な佛教経典が作られ、世界に通じる哲学や美術が完成したのである。

例えば⑮北響堂石窟に唐草模様（floral scrolls 巻草紋）の浮彫がある（図32）。その濫觴は古

図32. ⑬北響堂山の唐草模様（筆者撮影）

代エジプト文明に求められ、パピルス（Papyrus 紙莎草）模様と円形の蓮の花模様が進化したものである。ギリシャ～ローマ帝国時代に唐草模様は、帝国の東方拡張に伴って中央アジアやインドに至り、そして中国に伝来した。雲岡、南北響堂山、龍門などの石窟に「霊魂不滅、輪廻永生」を象徴する図案様式として刻まれた。とくに②水牛山白石寺《文殊般若經》碑（図７. 右上）が風化されているのに、注意深く見れば、経名と経文の間と経文の両側に、floral scrolls 巻草紋をもっとも精密に表現している。ちなみに南響堂石窟は古代より有名な磁州窯と同地域にある。現在にも窯の職人達は焼物にそのような蓮華唐草を自在に写し、人々の日常生活で使われている。

また筆者は近年エジプトを訪れ、各期の蓮華の石刻や彩色図を見た。図33. 左は紀元前20世紀の第11王朝の画像石である。ファラオ（Pharaoh）の右手に生命のカギ、左手に蓮華を持つスタイルは復活の画面である。古代エジプト人は、太陽を一人の金色の少年と見立て、毎日、

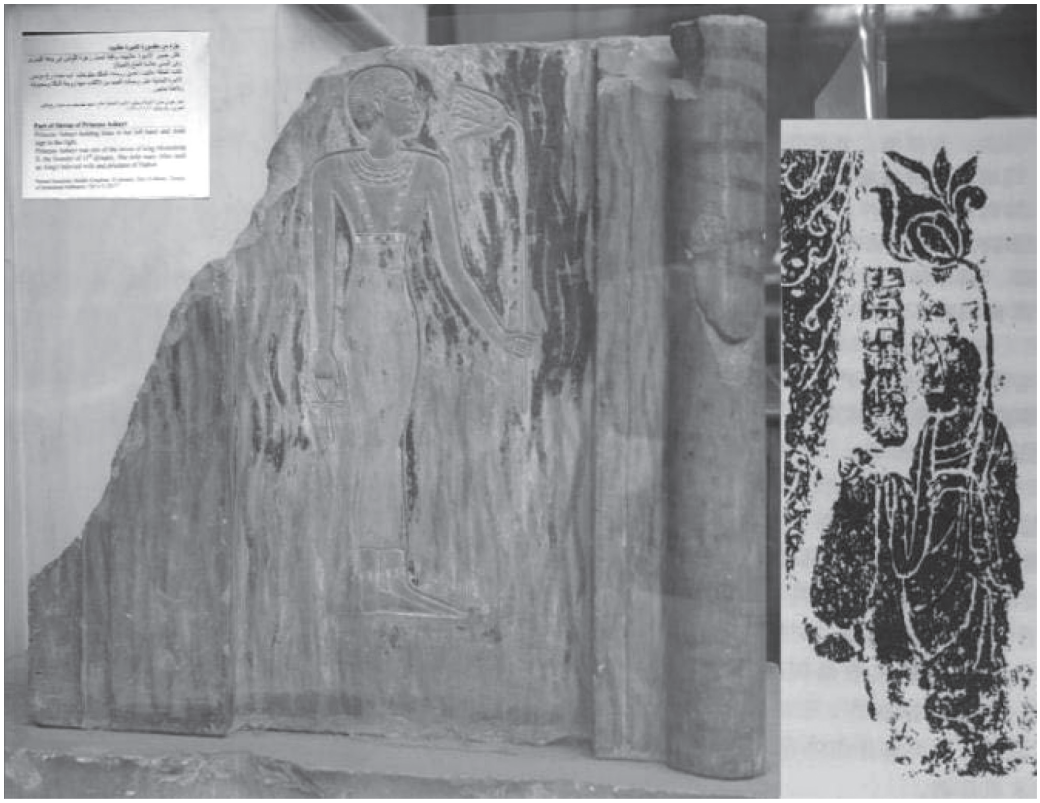


図33. 左：エジプト国家博物館二階の石刻展品。　右：小南海「比丘僧稠供養」像の拓片。（筆者撮影）

蓮華から昇ってくると考えた。蓮華は輪廻と復活の意味であり、繁殖と繁栄のシンボルである。古エジプトの蓮華崇拝は後世の多くの植物紋の元祖であり、蓮華は現在もエジプトの国花である。佛教の経文、壁画、石刻などにも蓮華崇拝がある。佛教本生譚の「釋迦牟尼出生七歩蓮花」とか、『妙法蓮華経』の蓮華など不可欠のテーマとなっている。また図33. 右は小南海石窟の「比丘僧稠供養」と刻まれた僧稠像及び蓮華であり、これらの蓮花図から古代環地中海文明と東方文明の間に時空を超えたつながりが感じられる。

シルクロードは単なる貿易路ではなく、東西文明の架け橋であった。胡人隊商たちは漢地に根付き、佛教、ゾロアスター教などをもたらした。

4．佛教の中国化

両漢から南北朝前半まで、佛教信者の中心は中原に来た「胡人」達であった。初期佛教経典は、西域（月氏国）僧人支婁迦讖が漢訳したもので、漢地に居住する「胡人」と「土生胡人」（二代、三代外人）を対象に、「辞質多胡音」と言われる日常会話的な文体であった。呂澂先生（1896～1989）および近年の学者らの考証によれば、現存する支婁迦讖訳出経典に《宝積経》、

《阿閦佛国経》、《道行般若経》など８部が上げられる。東漢建和元年（147）に洛陽を訪れた西域の安息国王子安世高が翻譯した佛経35種41巻も、これに類するものだったと思われる。「胡人」や「土生胡人」（支謙は三世胡人）と漢人学者が共同し、「胡語」要素濃厚な翻譯作業が続いた。その後、漢人僧団が成長する東晋時代５世紀前半まで、かような佛教経典であった。「胡人」や「土生胡人」らが、中原土壌に布教の種を蒔いたのである。

図34．佛像の袈裟の一部　青州博物館蔵（筆者撮影）

名僧鳩摩羅什（Kumarajiva 343～413年）の父親は天竺名門の出身、母親は庫車亀茲（現在の新疆庫車。筆者は蘇巴什佛寺、拜城亀茲石窟、南新疆米蘭（ミーラン）、ホータン、カシュガルなどの佛教遺跡を実地踏査した。）の国王の妹と伝えられる。鳩摩羅什は７歳で出家、初め小乗経典を読み、９歳で母に従って罽賓（現在のカシミール）の盤頭達多に師事し、《雑蔵》、《阿含経》などの経典を学んだ。12歳で母と亀茲へ帰る途中、疏勒（現在の新疆カシュガル）に１年余り在留し、阿毗曇と六足論を学び、大乗の僧侶である莎車王子の須利耶蘇摩に従って《中論》、《百論》、《十二門論》を習得、佛陀耶舎から戒を受けた。彼は亀茲に帰着後，大乗経論を広め、講経説法に勤めて有名になった。後秦時代（384～417年）に長安に至り、弟子達（多数は漢民族学者）と共に佛経経典35部294巻を翻譯し、新たに千余の漢語を創った。佛教中国化の過程でそれらが広まり、「世界」、「辯證法」、「思維」、「覚悟」、「平等」「神通」、「歓喜」などの語が現在も活用されている。

季羨林先生の考証によると、中国語の「佛」の初まりは亀茲語の「pud」、「蜜」は焉耆語の「myat」と亀茲語の「mit」、「沙門」は亀茲語の「samane」、「沙彌」は亀茲語の「sanmir」、「獅

子」は焉耆語の「sacake」、「昆侖」は焉耆語の「klyom」と亀茲語の「klyomo」であった。「中国最古の佛典に出てくる「佛」字は梵文でなく、トカラ語吐火羅文A（焉耆文）とトカラ語吐火羅文B（亀茲文）である。[30]」

佛経翻譯の際は中国伝統経典を懸け橋に、儒教や道教の物語、比喩などの方法も借りて佛教の義理を「格義」し、中国語に「翻譯」し再創造した。「佛教は道家のゆえに清楚になり、しかも道家も佛教に借りて明らかになったのである[31]」。

「佛教即便被西域，乃西域間接傳入中国。吾輩驟讀佛門記載，輒覺魏晉之間，印度名僧入我国者至夥，其実不然，什九皆西域僧耳。僧名初皆冠以国，以支為姓者皆月支（月氏）人，以安為姓者皆安息人，以康為姓者皆康居人，以竺為姓者則天竺人，不冠国名者多類皆蔥嶺以東諸西域国人[32]」。山東省青州博物館に展示されている北朝石刻佛像の袈裟の図案（図34）に当時の西域人が素晴らしい極彩色で描かれ、この梁啓超の判断を証明している。

中原僧として海外求法の第一人者である法顕（334～420）は、３歳にして宝峰寺で沙弥として出家し、20歳で比丘戒を授与された。彼は律蔵が不足していることを常に嘆き、東晋安帝隆安三年（399）に同志の慧景、道整、慧應、慧嵬らと共に天竺へ求法の旅に出た。北、西、中、東天竺などを遍歴し、《方等般泥洹經》、《摩訶僧祇律》、《薩婆多律抄》、《雑阿毗曇心論》、《摩訶阿毗曇》などの梵文経典を入手した。また師子国（現在のスリランカ）で《彌沙塞律》、《長阿含》、《雑蔵》など多くの梵本を入手。14年で30数ヵ国を訪ね、義熙八年（412年）海路で青州長廣郡の牢山（現在は山東省青島市の嶗山）に帰着した。青州の興隆寺にも経由し、翌年秋、晋都建康に到達した。道場寺にて佛陀跋陀羅や宝雲などと一緒に《摩訶僧祇律》40巻、《僧祇比丘戒本》１巻、《僧祇比丘尼戒本》１巻，《大般泥洹経》６巻、《雑蔵経》１巻などを翻訳し、《佛国記》なる伝記も記した。しかし彼がインド諸国を歴訪した時代は、佛教はすでに衰微し始めていた。

①小南海（図１）、④中皇山、⑦司里山、⑮北響堂山に《涅槃經》が彫られている。陳寅恪氏は「《涅槃經》は佛教中で最も左的な経典である。佛教は新環境の影響を受けて新理論を生み出すことができた。この経典は於闐より伝入したのであるから、その地の説法とみられる。佛教の初旨ではあるまい。」と述べる[33]。

南北朝時代、外来佛教の中国社会への影響力は頂点に達した。ここに登場した北斉石刻経は、佛教中国化過程を顕著に示すマイルストーンと見做される。旧北斉エリアの山々に残る石刻遺跡こそ、今日の多元的中華文明が大昔から徐々に形成されてきた過程を生き生きと忠実に示している。

５．太行山脈中の上都と下都の「官道」

北魏（386～534年）皇族は鮮卑族で、高緯度の大シンアンリン山脈よりモンゴル大漠を経由

して住みやすい南方へ下り、494年に平城（現在の大同）から南の洛陽へ遷都した。さらに北魏孝武帝崩御（534年十二月）の後、「鮮卑六鎮」軍に護られた高歓は都を洛陽から鄴城に移し、元善見が孝静帝となり、東魏を建国。その後、北斉歴代皇帝は上都を晋陽（「鮮卑六鎮」の大本営、現在山西省太原市晋源区古城営あたり），下都を鄴城（現在河北省臨漳県鄴城鎮）と定め、その間（途中で高歓を偲ぶ「高歓洞」（図５））を頻繁に往来した。それは北方系統民族の遊牧や狩猟の娯楽というより、主に政治運営上の考慮である。

南北に走る太行山脈は総延長400余 km、北朝時代はここを東西に横切る山口が８ヶ所あって「太行八陘」と言われ（図35）、滏口陘は[34]その１つ。北斉では上・下都の間に要所となる関所があり、駅道、行宮を設けた。南・北響堂山と中皇山はこの要路に面している。重臣の唐邕は皇家寺院である石窟大寺の刻経洞の入り口左に《唐邕写経記碑》を刻し、佛経石経造営について「盡勒名山」と発願し、高斉王朝へ忠誠を表明した。

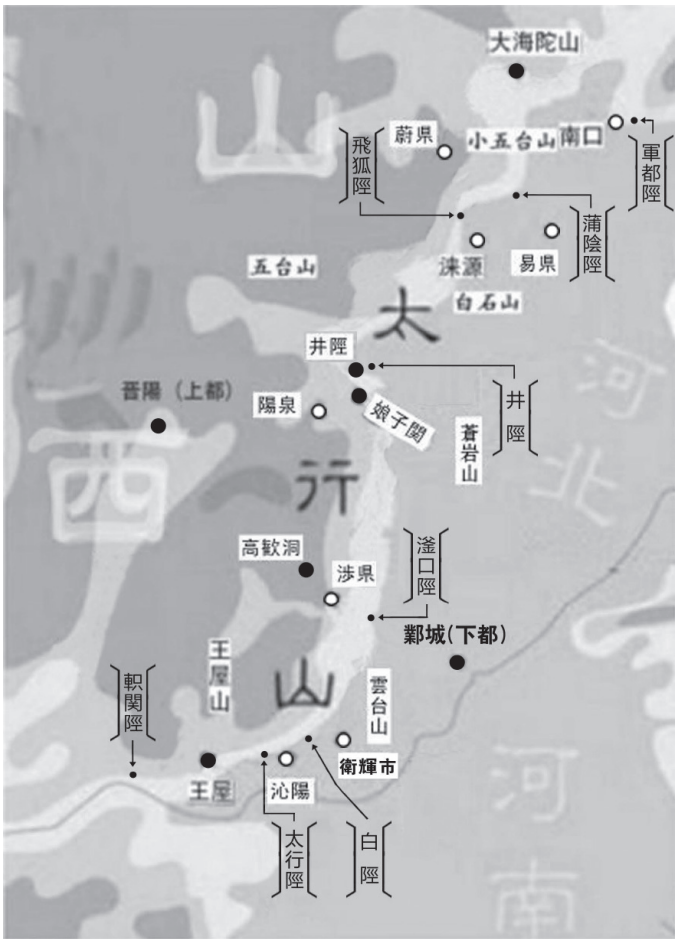


図35．太行八陘の方位（筆者作図）

６.「熹平石経」の直接的影響

中国語の「経」は糸で織る交織の意味を持ち、これが先王の典籍や糸でくくった規範簡策の意味となった。3000年ほど前の周時代、書写材の竹簡を皮や糸で作った「緯」を用いて横に結びつなぎ、長いものは巻いて一巻の「経」にした。

秦始皇「焚書坑儒」の教訓を経て、簡策は滅しやすく金石は滅びにくいことから「金石難滅」という信念が固まり、最初に儒学が石刻経を作った。漢の霊帝熹平４年（175）、大臣蔡邕は皇帝命令を受け、国家統一教材として高さ１丈、幅４尺の石碑を46通造り洛陽の太学門前に建てた。儒学経典の《周易》、《尚書》、《魯詩》、《儀禮》、《公羊傳》、《論語》、《春秋》の合計200911字を８年かけて刻んだ。これが歴史に有名な「熹平石経」である。「見学や模写する者の車が日に千輛あまり、街陌を填塞した。」と史書にある。現在も国家博物館や澳門の博物館などにその残片が展示されている。

東魏時代の遷都では、大勢の人足と厖大な財力を使って「熹平石経」を洛陽から鄴城に運んだ。その様子を多くの佛教信者が見たであろう。またこの後、滅佛や末法に多重の危機感を持つようになる北斉の人々にとって印象深い存在だったと考える。

⑮北響堂山の《唐邕写経記碑》に「以為縑緗有壞，簡策非久，金牒難求，皮紙易滅，於是発七処之印，開七寶之函，訪蓮花之書，命銀鉤之跡，一音所説，盡勒名山……海收経籍，斯文必傳;山從水火，此方無害……諸法為祖，諸経亦王，一文半偈，與物行藏……殺青有缺，韋編有絶，一托貞堅，永垂昭晳」（図３）とある。この発願文は刻経事業の動機を明確に表明している。

「熹平石経」の完成は国をあげて８年かかった。石灰岩製で、文字サイズは約４ cm、屋根の下で一年中作業でき、都には石刻職人も鍛冶屋も多数居て互いに協力できる便もあった。ところが北斉の摩崖刻経は野外作業である。作業条件が悪く、所要時間もコストもはるかに高い。しかも山東省内の花崗岩が石灰岩よりはるかに刻みにくく困難である。

７．ミトラから弥勒信仰 へ

「世界三大文明の中間部分（すなわち北アフリカ、西アジア、南アジア、中央アジア、ペルシア）は、ヨーロッパに通じ、シュメール－アッカドからクリト－ミケーネに拡散し、そしてギリシャ－ラテン－ゲルマン系を織り込んで西方古典文明圏を構成した。その東方の中国では中国古典文明を構成した。こうして「中」と「西」の文明は並び立った。概括すれば古代文明世界は一つと見るべきである」[35]。この通り、古代文明には多元共存的性質があると思う。

「早期の各民族の起源や移動と立国などの研究では、人口数量、地域面積、所在地形、海洋条件など現在行われる基準で図ってはいけない。現代人にとって必ずしも良好な生存環境と思われない草原、沙漠、高原などが古代民族の発祥地であったり、素晴らしい生存環境であるはずの河川流域に広がる平野が古代では争いと滅亡を誘引する危険地帯であった。同様に近代の殖

民戦争以来認識されてきたコンセンサスである海洋は、古代において草原や沙漠緑洲より魅力の少ない所だった。草原民族の活動こそ、各文明間をつなぐ主要なきずなであった[36]」。環地中海文明と西域と中原の間にはこのような見解が当てはまり、ソグド人など外来民族がつないだと言えよう。

現在のインドは「人種博物館」と称されるように、数千年に渡って色々な人種が融合した。それが現代の種姓制度に垣間見える。この社会問題は解消しようにも解決し難い歴史背景があるのである。現在インドには100以上の民族がある。もとウラル山脈南部の草原民族アリアン（Aryan 高貴する意味）人騎馬民族は戦争に長け、紀元前14世紀に古インドに侵入した。古代の世界三大遊牧民族の一である。梵文は âryâ、英語は Aryan、イラン語は Iran で発音が似ている。1935年にペルシャ国パレヴィ王朝は古代アリアン人の子孫であることから、国号をイラン（Iran）とした。今も西はドイツから東はインドまで、この遺伝子を引く民族が多く、インド・ヨーロッパ語族（Indo-European languages family）に属す語言体系とつながりがあると近代学者が指摘する。またアリアン人は「万神殿」でミトラ神（Mithras）（図36）を崇拝した。彼らは太陽神の放つ放射状の光線を図案化してシンボルにした。例えば「十」、「卍」である。

文明は多くの信仰を持ち多様化を呈する。その一方で異なる文明であっても、共同的文化を

図36．密特拉（ミトラ）像。
2017年５月中国国家博物館「大英博物館蔵100件文物世界史展」にて（筆者撮影）

持つのが常である。ミトラ信仰は紀元初の数世紀間にキリスト教、ゾロアスター教、佛教とつながりを持つようになり、イラン系アリアン人とインド系アリアン人に分化して発展していった。それがアヴェスター阿維斯陀（Avesta）すなわちゾロアスター教の密特拉とヴェーダ吠陀（veda）すなわち古インド早期バラモン婆羅門教の密多羅である。ペルシャではゾロアスター教はゾロアスターが原始宗教を改革したものとされている。

インド・イラン語族に属する古代語言（梵語と阿維斯陀語）における密特拉“mitra-”は「契約」や「同伴者」の意味である（語根“mi-”は“約束”の意、語尾“-tra”は「工具」の意）。しかし梵語は阿維斯陀語よりさらに「同伴者」や「契約」の意味が強い。例えば《リグヴェーダ》では“mitra”を神名として使う以外に、「友人」の意味でも使う。

インドにおいて密特拉（密多羅）は佛教の弥勒菩薩と関係すると思われる。弥勒菩薩降世の予言が佛教経典に見え、信者は弥勒菩薩に救われるという。また弥勒は南天竺の婆羅門出身で、釋迦牟尼佛の弟子として菩薩道を修し，兜率天で説法をしているという。《雑阿含経》に弥勒は人間界に下り、龍華菩提樹の下で三次傳法盛会（龍華三会）を行い、三度にわたり九十六、九十四、九十二億の衆生を済度し、みなを阿羅漢にし、生死輪廻から脱離させる、とある。この観念が発展して「人間淨土」の理論が登場した。

また弥勒信仰は紀元前２世紀に僧伽羅国にもたらされた。王の杜多伽摩尼（dutthagāmaṇī）は臨終の時、多くの天神に迎えられて兜率天へ往った、とパーリ巴厘文《大史》に載っている。

「弥勒三部経」とは、西晉竺法護訳《観弥勒菩薩下生經》、劉宋沮渠京聲訳《観弥勒菩薩上生兜率天經》。姚秦鳩摩羅什訳《弥勒大成佛經》である。北斉時期に弥勒信仰は民間に広く普及した。④中皇山（図37）、⑮北響堂（刻経洞に《彌勒成佛經》）、⑯徂徠山、㉓崗山、㉖神童山など

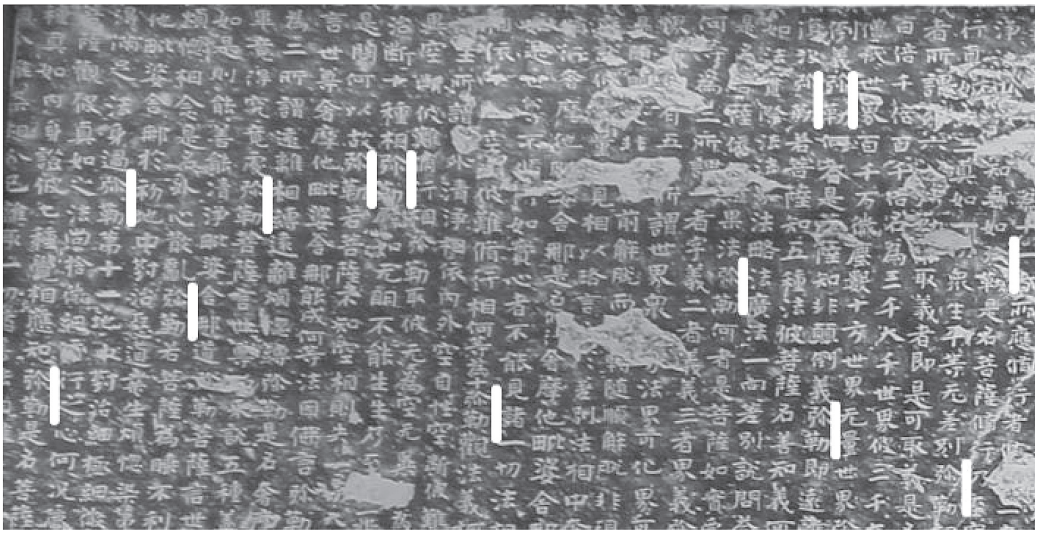


図37．④中皇山刻経の弥勒信仰（筆者撮影）

に弥勒信仰が認められる。また河南省鞏県石窟の北斉造像題記に「天統四年（568）二月／十五日佛弟子／魏顯明為亡／女圏造観世／像一区願亡／女至兜率□□□」とある。

8．ゾロアスター教の影響

阿育王以後の最も熱心な護法の人とされるカニシカ迦膩色迦王は、「先信火教後乃信佛教[37]」と述べた。彼は佛教をゾロアスター教という樹木に接ぎ木したのである。

多くの西域人は北斉に入り佛教東進を促進したばかりでなく、ペルシャ発祥のゾロアスター教を直伝した。ゾロアスター教は「火」を崇拝することから「拝火教」とも言い、初期の信者のほとんどは中国に居ついた外国人であった。また佛教もゾロアスター教も外来宗教であるから、中国人は彼らをみな佛教徒と思い混同したのである。

ゾロアスター教は一般信仰に混じり、唐朝に祆神に変じた。その寺院は「火神廟（閣）」と言われた。儒教本山の曲阜孔子廟の西わずか300余メートルの処に1965年まで「火神閣」があった。山西省介休県には今も「祆神楼」（国家重點文物保護單位）がある。

図38．佛像光背の「火焔紋」―趙立春氏作図

⑬北響堂山刻経洞の上方の摩崖に「宝火佛」、「明炎佛」なる佛名が刻まれている。また各地佛像の光背に施された「火焔紋」（図38）、山西省左権高歓洞（図５）の「門楣」上の火焔図案、安伽墓刻石の「火壇」（図27．右下）、⑧二鼓山（図９）と⑩洪頂山「大空王佛」（図10中）の燃える手など、多くにゾロアスター教の血統を引く遺伝子があると思う。

９．佛教の環境づくり

佛教が中国に入る以前、天子自ら神山へ登って国儀「封禅の儀」を行った。これは紀元前12世紀の周王朝から10世紀末の宋王朝真宗皇帝まで行われた。封は天を祭ること、禅は地を祭ることである。秦の始皇帝の「泰山封禅」が『史記』封禅書に明記されている。ところで南北朝時代に僧人が地面に座って修業することを「禅」と称し、後にこうした修行をする宗派を禅宗と言うようになった。座禅は北斉地論学派の中でも盛んに行われた。自然の山林に「**法身舎利**」である石刻経と一体となった佛教の「禅」道場が形成された。

また中国は漢字の国だが、当時は文盲が多かった（1952年２月24日始まった「掃盲運動」の公式統計によれば、20世紀50年代初でさえ人口の８割ほどが文盲）。しかし中国文字文化は神秘思想をはらみつつ神人一体の高度な世界観を形成していたため、佛教教義が解らなくても、文字が読めなくても、「佛は一つの文字であり、文字は一人の佛である[38]」と考えた。㉑尖山摩崖刻経に刻まれた「経佛」の語は、こうした文化的発想を体現しただろう。

10．末法思想の影響

北天竺ウジャーナ国僧侶の那連提黎耶舎（約490-589年）は「天保七年（557年）屆於京鄴。文宣帝極見殊禮……安置于天平寺中，請為翻経三藏[39]」と伝えられる。彼が翻訳した《大集經》は正法五百年，像法千年，末法万年なる末法思想を北斉に知らしめた。㉒鉄山摩崖《大集経・海慧菩薩品》の左方に刻まれた偈（石頌）には次のような文言がある。「圖其盛法」、「逢劫火而莫焼」、「對炎風而常住」、「従今鐫構」、「金石難滅，托以高山，永留不絶」。鉄山摩崖は当時が末法時代であることを認識し、経文を石に刻して恒久に後世に伝えることを述べ、多難な時代を生きる信徒らを励まし戒めている。また㉑尖山摩崖の題記には「大沙門僧安道壹……韋子深……等同刊**経佛**」とある。石刻経は「**法身舎利**」である。これが56億７千万年の久遠の時を経て伝えられ，未来佛の弥勒に引接されて生死輪廻の煩悩から解脱し、幸福を得ると信じたのだろう。

前述した慧思は、北魏延和三年（434）に末法時代に入ったと主張。これが現実に⑩洪頂山の双林後の年号や、「安王佛」、「大山岩佛」など一系列の佛号の形で表わされた。僧安道一僧団が「もう末法時代に入ってしまった！」と主張する壮烈な説法と解釈できる。

11. 滅佛運動への反抗

北周武帝が建徳六年（577）一月に北斉を破った。４万余の寺院を押収し、佛像を破壊し、200余万の僧侶を還俗させ滅佛の危機が襲った。末法への恐怖が重なり多重の苦難に見舞われた。北周大象元年（579年）年二月十九日、７歳の静帝宇文闡が皇位につき、「大象」に改元、佛教と道教の弾圧を少し緩めた。この機会を狙って佛教徒は佛教復活を計り、同年八月時点（旧北斉）で未完成だった㉒鉄山摩崖《大集経》経文の左に《石頌》を刻んだ。そこに「信佛弟子匡喆及弟顯□祖珎漢丞相匡衡之苗裔……與同義人李桃湯耿奴等……乃率邑人……皇周大象元年（579）歳大淵献八月庚申朔十七日丙子」とある。佛弟子の匡喆達は偈文の「石頌」を作り、佛教再興を宣言したのである。

12. 庶民の「願掛け」

後漢時代中期以後、国民は安定した生活から遠ざかった。魏晋南北朝にかけて300年間以上の戦乱が続き、王朝が頻繁に変わり、民族大移動が幾度も起こり、581年の隋王朝統一まで、苦難や絶望が多い時代であった。昔から中国では、家族が病気になったり旅や戦争に赴く時、佛に願掛けした。これを「求佛」と言う。そのために寺院へ寄付をして石窟、石刻経、石佛が盛んに営造されたようだ。『七級石浮図観音経碑』（中皇山ふもとの「北斉石刻陳列館」に展示）は石経碑と七級浮図を結合させている。また④中皇山、⑩洪頂山、⑰徂徠山、㉒鉄山、㉔葛山、㉕泰山経石峪など大規模石経には多くの信徒が参加したのではなかろうか。

13. 中原の伝統文化への懐柔政策

北斉は多民族国家である。高洋が即位するや僧稠を国師に招聘し、僧官制度を再建し、佛教を王朝の正統イデオロギーの首位に置いた。多くの北斉石窟と石刻経と石佛の造営題記が「為皇帝陛下、父母、家族」と刻んでいる。また「天保年中，釋李二門，交競優劣[40]」とあるように、北斉前半は道教も許容し、意図的に両者を競わせた。ゾロアスター教も勢力をふるった。

鮮卑民族は元来文字を持たないため、北魏時代から漢字を借りて使ってきた。北魏「北方六鎮」軍出身の高歓は高氏の政治基礎を固めた人物で、高斉政権になると、漢の正統的文化の象徴である孔子廟をも修繕し、学校を各地に多数作るなど文教政策に熱心だった。そんなことが後述の鄭述祖「夫子廟碑」の中にも記してある。

結　語

北斉石刻経は佛教中国化過程に重要な一環であり、石窟寺文化に不可欠な構成部分である。これらの総合研究を介して、中華民族が多民族融和によって形成され、中華文明が異文化から栄養を吸収してできた多元的文明であることがより一層理解できる。

1．時間上および空間上の重要な座標

鄴都を中心にした僧稠僧団によって、天保元年（550）①小南海石窟が造営された。次いで東部の洪頂山を中心にした僧安道壹僧団によって、天保七年（556）十一月以前に、②水牛山白石寺刻経碑が造営された。こうして石刻経がスタートする。

上記の二つ僧団は、北斉王朝から供養を受け、さらに名門豪族から援助を受け、多くの信者からも献身的な奉仕を得て、わずか30年間の内に北斉領内で20数万文字の石刻経と石窟をつくり、中国のみならず全世界でも稀な大規模石刻文献の宝庫を創造した。

2．末法時代に備えた石刻経

唐邕は二つ僧団をバックして石刻経運動を遂行した。僧稠僧団は字径「寸余」の楷書をもって、主に経文全巻を刻んだ。その代表作は④中皇山（約13.64万文字）、⑮北響堂山（約4.8万文字）である。僧安道壹僧団は総じて大きな文字を刻んだ（榜書）。その代表作は⑧二鼓山、⑩洪頂山、㉒鉄山、㉕泰山であり、独特な佛号「大空王佛」が目を引く。「署経」者と石工が共同で末法の世にあるべき理想的佛の姿を追求し、この「法身舎利」を創造したのである。

3．北斉に起工し、中断を挟んで再起工した石刻経

これに相当するものに下記の二種類がある。

(1) ⑨南響堂山石窟、㉟林旺石窟。これらが石窟という形式を備え北斉滅亡後に完成の日の目を見たのは、石窟内に彫られた佛像に理由があるのではなかろうか。北朝が終わると信仰の仕方も変わり、難しい佛経理論より偶像崇拝がご利益を得やすいと考えて再起工したのではなかろうか。

(2) 二工期に渡った㉒鉄山摩崖。武平六年（575）六月以後に造営を開始し、『大集経』経文部分が完成したが、碑額と台座はまだ未完成のまま北周軍襲来によって放棄された。この後「皇周大象元年（579）大淵献八月庚申朔十七日丙子」に、旧北斉の僧安道壹僧団と佛弟子の匡喆達が佛教再興を宣言するため、「石頌」を作った。

４．未完成に終わった石刻経とその後

北周襲来による廃佛毀釈は、破竹の勢いで迫り、北斉は崩壊した。未完成のまま放棄された石経は多数にのぼる。また④中皇山石窟は王朝が変わり、都から遠い過疎の山岳地帯になってしまった。㉕泰山経石峪『金剛経』も大事な泰山祭の通路とは別の峪にあったため、布施する者が訪れず、歴史の流れに沈んでいた。

５．建　言

現存する北斉石刻経は各地の省、市、県に分散している。中には保存・保護困難な山奥に位置するものもある。自然と人為による損壊は激化しつつあり、一日も早く具体的かつ有効な保護制度を国家事業の「石窟寺保護項目」などのもとで制定されることを期待する。

また「石窟寺研究計画」の一部として、最新 IT 技術を使った石刻経の三次元図化やビックデータ化を進めたい。かようなデータベースを長期保存するとともに一般公開し、公衆サービスとして提供することを整備しよう。更にこれらの成果として、世界文化遺産あるいは世界記憶遺産に登録することを提案しよう。

謝　辞

これまで30余年間、多くの学者や先輩・友人諸氏にお世話になった。山東省鄒城市文物局の王軒氏（故人）、胡新立氏、山東省文物局の由少平氏、山東省石刻芸術博物館の焦德森氏、賴非氏、曲阜市文化局の管栄斌氏、東平県博物館の楊浩氏、泰安市泰山文物研究所の温兆金氏、青州博物館の夏名采氏（故人）、莊明軍氏、臨朐県史志弁公室の宮德傑氏、山東旅遊職業学院の曹成德氏、河北省博物院の劉建華氏、邯鄲市文化旅遊局の馬忠理氏、邯鄲市博物館の馬小青氏、邯鄲市峰峰鉱区文物管理所の張林堂氏、邯鄲市響堂山石刻芸術博物館の趙立春氏、渉県文物旅遊局の姚英芳氏、山西省考古所の張慶捷氏、山西省文物局の李会智氏、山西省宗教局の韓麗蓉氏、太原天龍山石窟研究所の武新華氏、大同市梁思成紀念館の周雪松氏、河南省博物院の楊煥成氏、河南大学の張家泰氏、中国社科院世界宗教研究所の羅炤氏、張総氏、北京大学の李崇峰氏、北京龍泉寺の賢世和上、首都師範大学の徐忠雨氏、上海復旦大学の張偉然氏、桂林航天工業学院李強氏、日本立正大学の桐谷征一氏、東京都立高等学校の北島信一氏、福岡教育大学の小原俊樹氏、龍谷大学の佐藤智水氏、京都大学の倉本尚德氏、国学院大学の中村啓信氏、山浦アンタレス国際交流基金の山浦啓栄氏（故人）、愛媛大学の菊川国夫氏、はじめ各地で文物保護に情熱を傾ける諸氏である。

この場をお借りして心より感謝申し上げます。

1994年12月12日初稿　　2021年12月14日訂正稿

＊拙文は「房山石経博物館・房山石経与雲居寺文化研究中心　編集『石経研究』第二輯（中国華夏出版社2018年10月刊、所収」P.188-222よりの増補版である。

注釋

（1）〈宋〉趙明誠・李清照　著《金石録》 斉魯書社 2009年４月再版　P.17～20より引用

（2）〈清〉黄易（1744-1802）著《岱岩訪古日記》

（3）〈清〉包世臣　著《艺舟双辑》中国書店1983刊、P.79より引用。康有为　著《广艺舟双楫》中国書店1983刊、P.42より引用。

（4）〈清〉魏源　著《古微堂詩集》

（5）崗山は鋼山とも言う。崗山の南隣に鉄山がある。鉄山は小崗山とも言う。

（6）道端良秀　著「鄒県尖山大佛嶺刻経（中国語訳）」《北朝摩崖刻经研究》（三）内蒙古人民出版社 2006年７月刊、所収 P.303-305より引用

（7）林東海・史為樂 著《郭沫若紀遊詩選注》上海文芸出版社1983年３月刊、P.130より引用

（8）桐谷征一 著「北斉大沙门安道壹刻经事迹」焦德森編《北朝摩崖刻経研究》（续）天马图书有限公司 2003年12 月刊、所収 P.45～91

（9）马忠理 著「邯郸北朝摩崖刻经时代考」焦德森编《北斉摩崖刻経研究》（三）内蒙古人民出版社 2006年７月刊、所収 P.25～73より引用

(10)〈清〉光緒《涉県誌》「山下旧有北斉時離宮，傳載文宣皇帝高洋，自鄴詣晉陽，往来山下，起離宮以備巡幸，於此山腰見數百僧行過，遂開三石室，刻諸尊像，即天保末，又使人往竹林寺取経函，勒之岩壁，今山上経像現存」。

(11) 2002年８月第二次北朝摩崖国際研討会現場調査の時に日本学者北島信一、現地学者胡新立、筆者に発見された題記である。2003年３月，胡新立、桐谷征一、筆者は再び嶧山刻経考察の時，さらに題記上方に「文殊 / 般若」を発見した。

(12) 2008年３月23日に現場考察の時、筆者、北島信一、現地学者趙立春が発見した13文字。

(13) 刻経の成立は武平元年ないし武平三年の間：経主署名は武平元年（570）に任命された兗州刺史斛律武都の「家客」董珍陁。斛律武都は武平三年（572）七月に冤罪で滅 族された名将である斛律光（515 ～ 572 年）の息子、北魏・東魏・北斉の名将である斛律金（488 ～ 567 年。西魏との戦争中、彼が陣中で故 郷の『勅勒歌』を歌って高歓をはじめ、東魏軍の士気を鼓舞した。『勅勒歌』は現在も国家統一教材である『語文』（国語）小学校二年の教科書に載っている。『勅勒歌』：勅勒川，陰山下。天似**穹廬**，籠蓋四野。天蒼蒼，野茫茫，風吹草低見牛羊。）の孫。

(14) ２通の碑は本来は近辺の偏城村寿勝寺にあったが、中皇山景区北斉石刻陳列館陳列館（2014年５月１日より開館）に遷して展示されている。ほかに中皇山（媧皇宮）石窟刻経殘石なども展示。

(15)《大蔵経》のこと。

(16) 趙立春 著「河北涉県林旺隋代石窟調査」《石窟寺研究》（第二輯）中国古迹遺跡保護協会石窟専業委員会・龍門石窟研究院 編　2011.12 所収　P.42-52より引用

(17) 馬忠理 著「邯鄲北朝摩崖刻経時代考」焦德森編《北朝摩崖刻経研究》（三）内蒙古人民出版社 2006年７月刊、所収 P.28より引用

(18) 梁啓超 著《佛学研究十八篇・中国佛法興衰沿革説略》P.9　上海世紀出版有限股份公司 / 上海古籍出版社 2001年９月刊

(19)〈唐〉法琳《辨正論》。大意：南北朝東魏天平年間（534-537），河北省定州の孫敬德は反乱者と認定されて

逮捕され拷問にかけられ、無実の罪に陥れられた。死刑執行の前夜の夢に高僧が現れ、《観音救生経》を教えてくれた。死にたくないなら、その経文を千回読めば死を免れる、と。孫敬德は目覚めるやいなや経文を読み始め、刑場に着くまで懸命に読んで数百回に達し、着いても読み続けた。死刑執行人が大刀を振り挙げた時、やっと千回読みきった。大刀が孫敬德の首に触れた瞬間、刀は三つに割れた。もう一本の大刀を試みたが役に立たなかった。このため丞相の高歓が孝静帝に死刑免除の上表を出し、部下に命令してその命を救った経文を聞き取らせ、全国臣民に読ませたので《高王観世音經》と言われた。唐の道宣撰《大唐內典録》卷十、《歴代衆経應感興敬録》、《続高僧傳》卷二十九《周鄜州大像寺僧明傳》などに記載がある。

（20）〈唐〉《北斉書》卷四十 列傳第三十二 唐邕

（21）清源実門 著「四山摩崖刻研究」中国書法家協会山東分会・山東石刻芸術博物館　編《北朝摩崖刻经研究》斉魯書社 1991年12 月刊、所収　P.198より引用

（22）臧勵龢　編《中国古今地名大辭典》商務印書館香港分館 1931年５月刊、P.791より引用

（23）〈梁〉《高僧傳》卷六、南海寄歸内法傳卷四、禪林象器箋職位門

（24）後漢末に「灌鋼」技術が発明され「相時陰陽，制茲利兵，和諸色劑，考諸濁清；灌襞已數，質象已呈。附反載穎，舒中錯形。」と。王粲（177-217年）の《全後漢文》卷九十一の《刀銘》に「宝刀」作成の全過程を載せている。「灌」は灌煉のこと。「襞」は本来衣服の皺のことだが、ここでは鋼鉄材料を幾重にも積み上げ折り畳んだ襞こと。「灌襞已數」は繰り返し「灌煉」すること。後漢末に灌鋼を使って刀と劍を製造した。その後，晋の張協著《七命》にも王粲の《刀銘》と同じ内容「銷逾羊頭，鏷（鍱）越鍛成，乃煉乃鑠，萬辟千灌；豊隆奮椎，飛廉扇炭。」が見える。ここの「銷」は唐の李善が許慎の説を採用した説明では「生鉄」のことである。鍱は《廣雅》の解釈では「鋌」である。李善の注に「辟謂疊之，灌謂鑄之」、「萬辟千灌」とあり、灌鋼製造過程で多重に積み上げ多回に灌煉すること。（《科技史文集》第15輯，上海科技出版社1989年版）。

（25）鄭羲（？～492年）和平中，舉秀才，擢補中書博士，參與鎮壓田智度起義。李沖受寵於文明太后，鄭羲連姻李沖，官至給事中、中書令，總司文史。太和初年，出為使持節、安東將軍、兗州刺史，封南陽郡公。太和中，征為秘書監，献女為皇妃、鄭羲性貪而吝，多受賄賂，法官不敢糾。太和十六年（492年）卒，年六十七，謚號為文。

（26）北岛信一　著「彩色石壁摩崖刻经论及其年代考」焦德森编《北朝摩崖刻经研究》（三）内蒙古人民出版社 2006年７月刊、所収　P.270より引用

（27）萬繩楠 整理《陳寅恪魏晋南北朝史講演録》貴州人民出版社　2012年１月刊、P.251より引用

（28）Berthold laufer 著《Sino-lranica,Chinese Contributions to the History of Civilization in Ancientlran ……1919》P.386-387より引用。

（29）庞霄骁　著「多元文化与犍陀罗艺术：再论贵霜时代佛教和佛教艺术的发展」―《四川大学学报》（哲学社会科学版）2017年第６期，第74-81页に引用された《La xieille Route de I'Inde de Bactres a Taxila》（ A. Foucher PARIS LES EDLTLONS D'HISTOLRE 1942）を再引用にした。

（30）季羨林 著《浮屠與佛》-《中央研究院歴史語言研究所集刊》第二十本1948年刊、所収 P.93-105より引用

吐火羅語（Tocharian 或者 Tokharian），単一語言構成した印歐語系下の語族は可能、一つもう消えた古い語言として、５世紀の後半（今まで発現した吐火羅文の文献はほとんど６～８世紀のもの）塔里木河流域（現在の新疆維吾爾族自治区中南部）に使われていた。その語言は二つの方言からなり、東部の吐火羅語 A，吐魯番盆地和孔雀河中下游流域に使われ、西部の吐火羅語、B は庫車緑洲及びその周辺（A 部分と重ねっている地域もある）に廣泛に使われていた。

（31）（英）崔德瑞・魯惟一　编《劍橋中国秦漢史》中国語訳 中国科学出版社　1992 刊、P.906より引用

（32）梁啓超　著《佛学研究十八篇・佛教与西域》上海世纪出版有限股份公司／上海古籍出版社2001年９月刊、

P.96より引用

（33）萬繩楠 整理《陳寅恪魏晋南北朝史講演録》貴州人民出版社　2012年１月刊、P.296より引用

（34）陘、音 xíng。拙文で論じる滏口陘のほか、軍都陘、蒲陰陘、飛狐陘、井陘、白陘、太行陘、軹関陘は「太行八陘」と言われた。河北、河南、山西三省の境にある重要な関所であった。

（35）日知 著《中西古典文明千年史》吉林文史出版社 1997年６月刊 P.16より引用

（36）沈愛鳳 著《從青金石之路到絲綢之路 - 西亞、中亞與亞歐草原古代芸術溯源》山東美術出版社 2009年１月刊．P.4より引用

（37）梁啓超 著《佛学研究十八篇・佛教与西域》上海世纪出版有限股份公司 / 上海古籍出版社2001年９刊、P.94より引用

（38）李一 著「環境芸術的創造」《北朝摩崖刻経研究》中国書法家協会山東分会・山東石刻芸術博物館　編《北朝摩崖刻经研究》1991年12 月刊、所収　P.55より引用

（39）〈唐〉《續高僧傳》卷二 那連提黎耶舍。北天竺烏場国人。亦姓釋迦。刹帝利族。

（40）〈唐〉《続高僧傳・卷二十三　護法曇顕傳》